

多賀城市文化財調査報告書第一三〇集

多賀城市の歴史遺産

笠神村

下馬村

多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会

多賀城市教育委員会



## 序文

多賀城市では、市内各地域に存在する歴史資料の保全を図るため、平成二四年度から、市内全域を対象とした文化財調査に着手いたしました。本市は、江戸時代に一三の村に分かれていたことから、村ごとの調査を行うことによつて、地域の歴史の特徴を明らかにしたいと考え、本事業を企画したのであります。

平成二五二六年度の旧八幡村を対象とした調査では、江戸時代から近代にかけての歴史資料が予想以上に残つてゐることを実感し、今年度は笠神村、大代村、下馬村の調査を実施いたしました。笠神村地域は、太平洋戦争時に海軍工廠用地となつたため、集落の移転を余儀なくされた地域ですが、幸いにも道端の石碑や神社の棟札など貴重な文化財が失われることなく残されておりました。旧大代村、下馬村についても、住宅地が立ち並ぶ現代とは大きく異なる姿が徐々に明らかになり、これまであまり知られることのなかつた地域の歴史を明らかにできたと考えております。また、地域の方々からの聞き取り調査では、古くから行われてきた行事や習慣、契約講の内容など、貴重な情報を詳細に採録することができました。本書は、それらの中から、取りまとめが終了した笠神村と下馬村の調査成果を収録したものであります。

このようないわゆる文化財調査は、古代から近世、近現代へと続く地域の歴史を明らかにするものであり、今後も継続していきたいと考えております。本書を御一読いただき、地域の歴史の豊かさ、個性、そしてその重要性を感じ取つていただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、調査に御協力をいただいた方々に対し、心より御礼申し上げ、巻頭の挨拶とさせていただきます。

平成二八年三月

多賀城市教育委員会

教育長 菊地 昭吾



## 例　　言

一 本書は、多賀城市内全域を対象とした歴史・民俗調査の報告書であ

り、その第三冊として作成したものである。

二 本書は、平成二七年度「文化庁　文化遺産を活かした地域活性化事業」の採択を受けて作成した。

三 本書で対象としたのは江戸時代の笠神村、下馬村であり、現在の多賀城市笠神一～五丁目、鶴ヶ谷一～三十目、丸山一～二十目、下馬一～五丁目、伝上山一～四丁目である。

四 調査は平成二七年度に実施したものであり、文化財課文化財係の千葉孝弥、鈴木孝行、同調査普及係の瀧川ちかこ、早坂優子が担当した。

五 本書は千葉、瀧川、早坂が執筆し、早坂が編集を行った。分担は第二章第七節、第三章第六節が早坂、第四章が瀧川であり、それ以外は千葉が担当した。その中で、第二章第六節の棟札については、岡版作成を鈴木、写真撮影を調査普及係の村上詩乃が行つた。

六 石造物の石材については、永広昌之氏（東北大學総合学術博物館協力研究員）に調査を依頼し、その成果は巻末の石造物一覧表内に収録した。

七 調査に関する諸記録及び資料は、多賀城市教育委員会が保管している。

八 本書の作成にあたり、下記の方々より協力をいただいた。

宮城県公文書館

宮城県図書館  
防衛省陸上自衛隊多賀城駐屯地

永広昌之（東北大學総合学術博物館協力研究員）  
柏木神社  
西園寺

# 目次

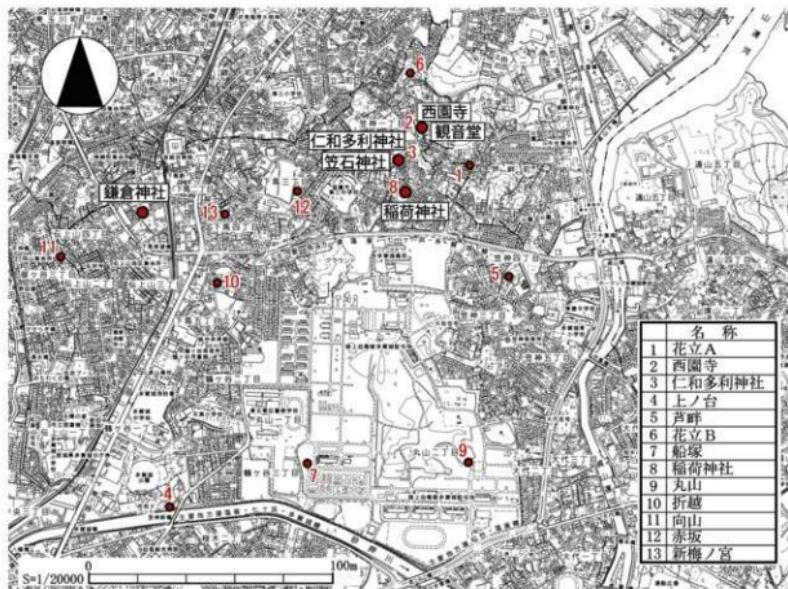
序文	194
例言	195
目次	195
第一章 平成二七年度の調査概要	1
第二章 笠神村	2
第一節 地理的・歴史的環境	2
第二節 地図と写真に見る地域の変化	4
第三節 地名	20
第四節 寺社仏閣	25
第五節 石造物	32
一 凡例	32
二 分布と概要	32
三 近世・近代の供養塔	211
四 墓標	211
第五節 石造物	211
第六節 民俗	211
第七節 地誌・記録・文書	213
参考文献	226
石造物一覧表	218
参考文献	235
石造物一覧表	239
一 凡例	241
二 分布と概要	241
三 板碑	241
四 近世・近代の供養塔	241
五 石燈籠・石鳥居・繩立・手水鉢・扁額	241
六 豊彰碑・沿革碑	241
七 墓標	241
第八節 棚札	148
第九節 民俗	110
第十節 第七節	102
第十一節 第六節	88
第十二節 第五節	40
第十三節 第四節	35
第十四節 第三節	32
第十五節 第二節	32
第十六節 第一節	25
第十七節 第二章	20
第十八節 第一章	182

註

「箱崎」は風土記御用書出以外では確認できない。笠神村には塚の一つとして「箱塚」、砂押川の流域名称として「箱塚川」がある。箱塚川はその南側にある八幡村との境界をなす川であることから、村の南境にある「箱崎」は「箱塚」の可能性がある。



海軍工廠建設以前の集落の様子



第2図 調査区位置図

## 第二章 笠神村

### 二 歴史的環境

笠神村の古代以前の歴史については資料がない。しかし、中世になると笠神や鶴ヶ谷を苗字とする武士の存在が確認できる。一六世紀前半頃に作成された「留守分限帳」は、宮城郡東部の国人領主留守氏の被官を「御館之人數」（諸代の家臣）、「里之人數」（外様の家臣）、「官うとの人數」（塙竈神社の神官）に分けて記載したものであるが、里之人數の中に「かさかみ図書助（笠神図書助）」と「鶴かやふせん（鶴ヶ谷豈前）」の名が記されており、「かさかみ図書助」は里之人數の中で最大の知行地を有している（水沢市立図書館一九七九）。また、仙台市東光寺板碑群の中には「笠上入道」と記された弘安年間（一二七八—一二八八）の板碑がある（仙台市史編さん委員会一九九八）。同板碑群は陸奥国府在庁官人層によつて造立された追善供養塔という考え方があり、笠上（笠神）氏は、鎌倉時代後期には既に在地領主として活動していた可能性がある。

笠神村は、江戸時代を通じて村高四四石と記録されている。現在は残つてないが助ヶ森には西沼という周囲一六〇間の沼があり、山中に八合入堤といつう一九五石余の耕地を潤す用水をためる堤があつたといふ。また、村には六か所の御林（用材林）があり、藩の厳重な管理のもと、山守を代表者とする村の人々によつて守られた。

耕地や堤、御林が点在するこの村が、大きく変貌を遂げる原因となつたのは、アジア・太平洋戦争における海軍工廠建設である。昭和一七年（一九四二）、多賀城村八幡字中谷地・前原、笠神字丸山、黒石崎を中心とした地域がその用地となり、土地の強制買収が行われて集落は解体された。建設工事が開始されると、箱塚山、伊勢堂山などは崩され、水田は整地されるなど地形も大きく改変されていった。

丸山一二丁目にあたる。

風土記御用書出には、

一南ハ当郡八幡村境当村分箱崎と申所まで

一北ハ当郡下馬村境当村分与五山と申所迄

一東ハ当郡湊浜境当村分高原と申所まで

一西ハ当郡留谷村境当村分西澤と申所迄

と四至を記している。高原は大代六丁目、西澤は鶴ヶ谷一丁目から伝上

山一丁目にかけての地区である。与五山、箱崎については不明であるが（註）、八幡村との境界は、概ね、笠神村内では箱塚川と呼ばれた砂押川と考えられる。

地形的にみると、北部は北側から標高二〇〇—三〇メートルの丘陵が三列伸びてきており、大小の谷が発達した複雑な地形を形成している。その南側は、一部で多賀城公園のような標高約一八メートルの独立丘陵や、船塚のような小丘陵が見られるが、それ以外は後背湿地に区分される低地となつていて（地質調査所一九八三）。

アジア・太平洋戦争以前の笠神は、丘陵部から低地部の耕地にかけて集落が点在する純農村地帯であり、現在とは全く異なる景観を呈していいた。

笠神村の古代以前の歴史については資料がない。しかし、中世になると笠神や鶴ヶ谷を苗字とする武士の存在が確認できる。一六世紀前半頃に作成された「留守分限帳」は、宮城郡東部の国人領主留守氏の被官を「御館之人數」（諸代の家臣）、「里之人數」（外様の家臣）、「官うとの人數」（塙竈神社の神官）に分けて記載したものであるが、里之人數の中に「かさかみ図書助（笠神図書助）」と「鶴かやふせん（鶴ヶ谷豈前）」の名が記されており、「かさかみ図書助」は里之人數の中で最大の知行地を有している（水沢市立図書館一九七九）。また、仙台市東光寺板碑群の中には「笠上入道」と記された弘安年間（一二七八—一二八八）の板碑がある（仙台市史編さん委員会一九九八）。同板碑群は陸奥国府在庁官人層によつて造立された追善供養塔という考え方があり、笠上（笠神）氏は、鎌倉時代後期には既に在地領主として活動していた可能性がある。

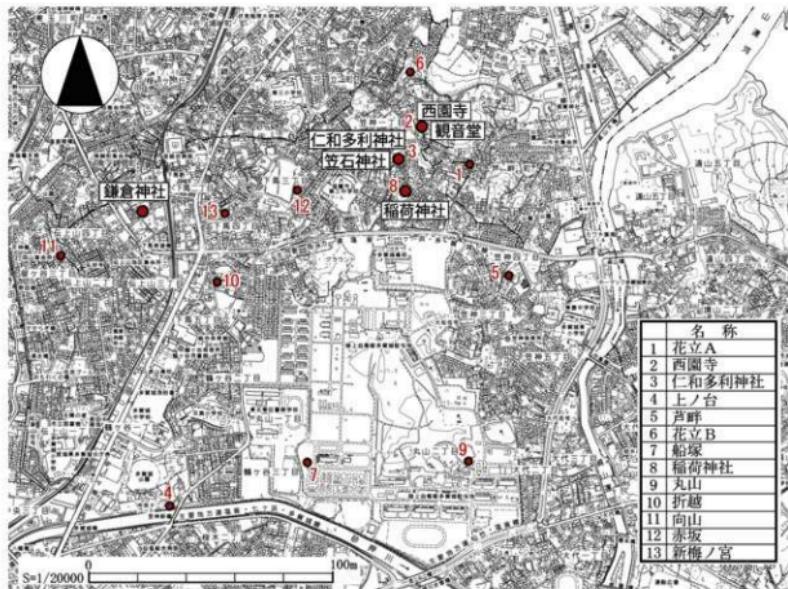
笠神村は、江戸時代を通じて村高四四石と記録されている。現在は残つてないが助ヶ森には西沼といつう周囲一六〇間の沼があり、山中に八合入堤といつう一九五石余の耕地を潤す用水をためる堤があつたといふ。また、村には六か所の御林（用材林）があり、藩の厳重な管理のもと、山守を代表者とする村の人々によつて守られた。

耕地や堤、御林が点在するこの村が、大きく変貌を遂げる原因となつたのは、アジア・太平洋戦争における海軍工廠建設である。昭和一七年（一九四二）、多賀城村八幡字中谷地・前原、笠神字丸山、黒石崎を中心とした地域がその用地となり、土地の強制買収が行われて集落は解体された。建設工事が開始されると、箱塚山、伊勢堂山などは崩され、水田は整地されるなど地形も大きく改変されていった。



海軍工廠建設以前の集落の様子

「箱崎」は風土記御用書出以外では確認できない。笠神村には塚の一つとして「箱塚」、砂押川の流域名称として「箱塚川」がある。箱塚川はその南側にある八幡村との境界をなす川であることから、村の南境にある「箱崎」は「箱塚」の可能性がある。

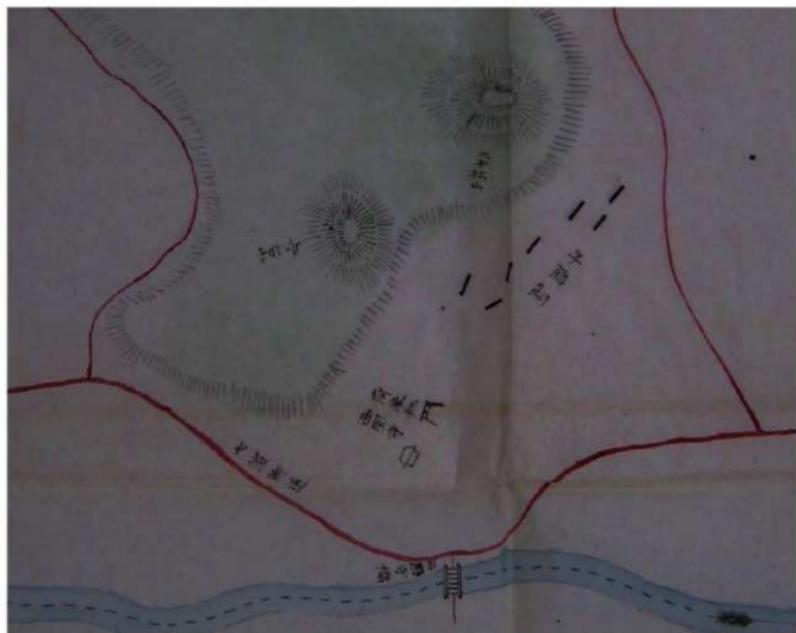


第2図 調査区位置図

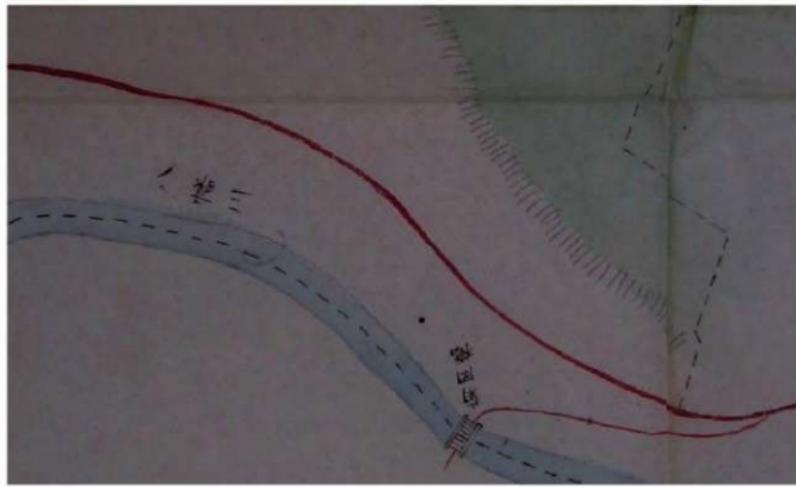
第二節 地図と写真に見る地域の変化



陸前国宮城郡地誌附図宮城縣管轄陸前国宮城郡笠神村 宮城県図書館蔵 (66.5 × 59.5cm)



同右（部分）



同右（部分）

16 宮城郡  
笠神村



陸前国宮城郡笠神村地引絵図（明治8年） 宮城県公文書館蔵

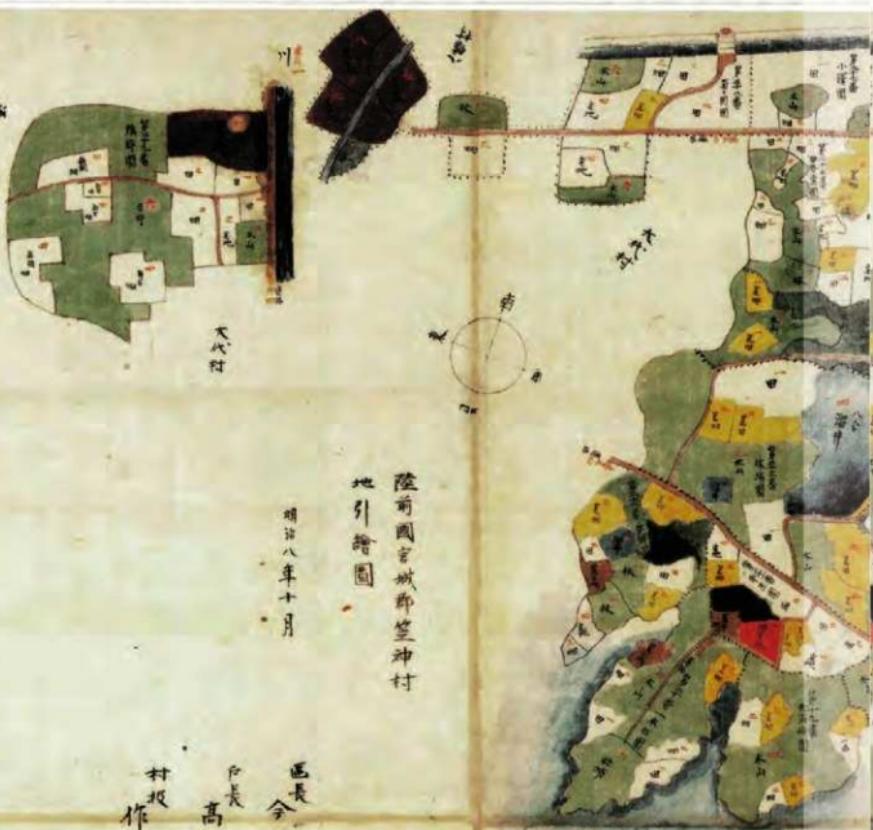
薩前國宮城郡笠神村  
地引繪圖

明治八年十月

區長  
今村畔

戶長  
高橋正保

村役  
作間盛頭



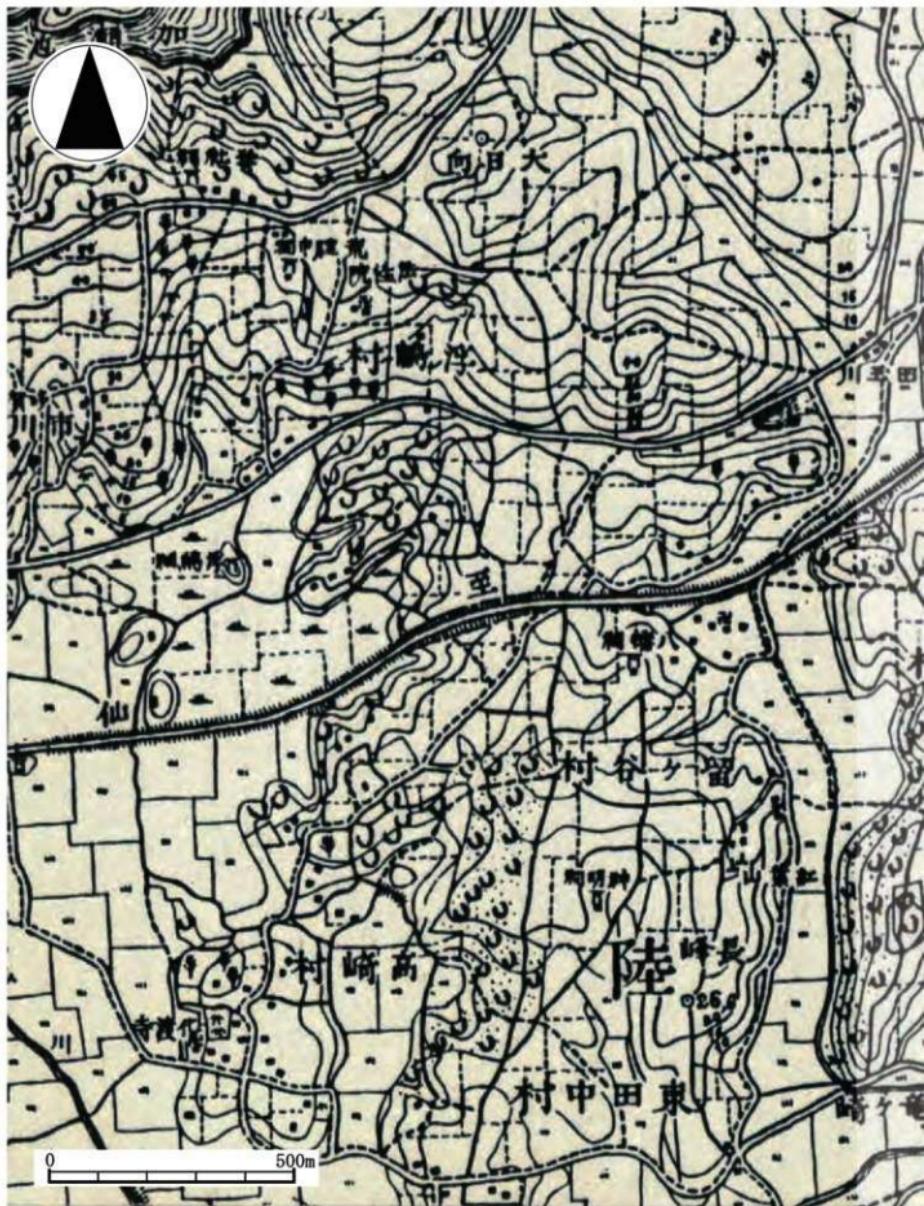


陸前国宮城郡笠神村（明治 22 年以前）宮城県公文書館蔵





笠神地区周辺地図 1 (明治 24 年第二師団參謀部測量・製版)



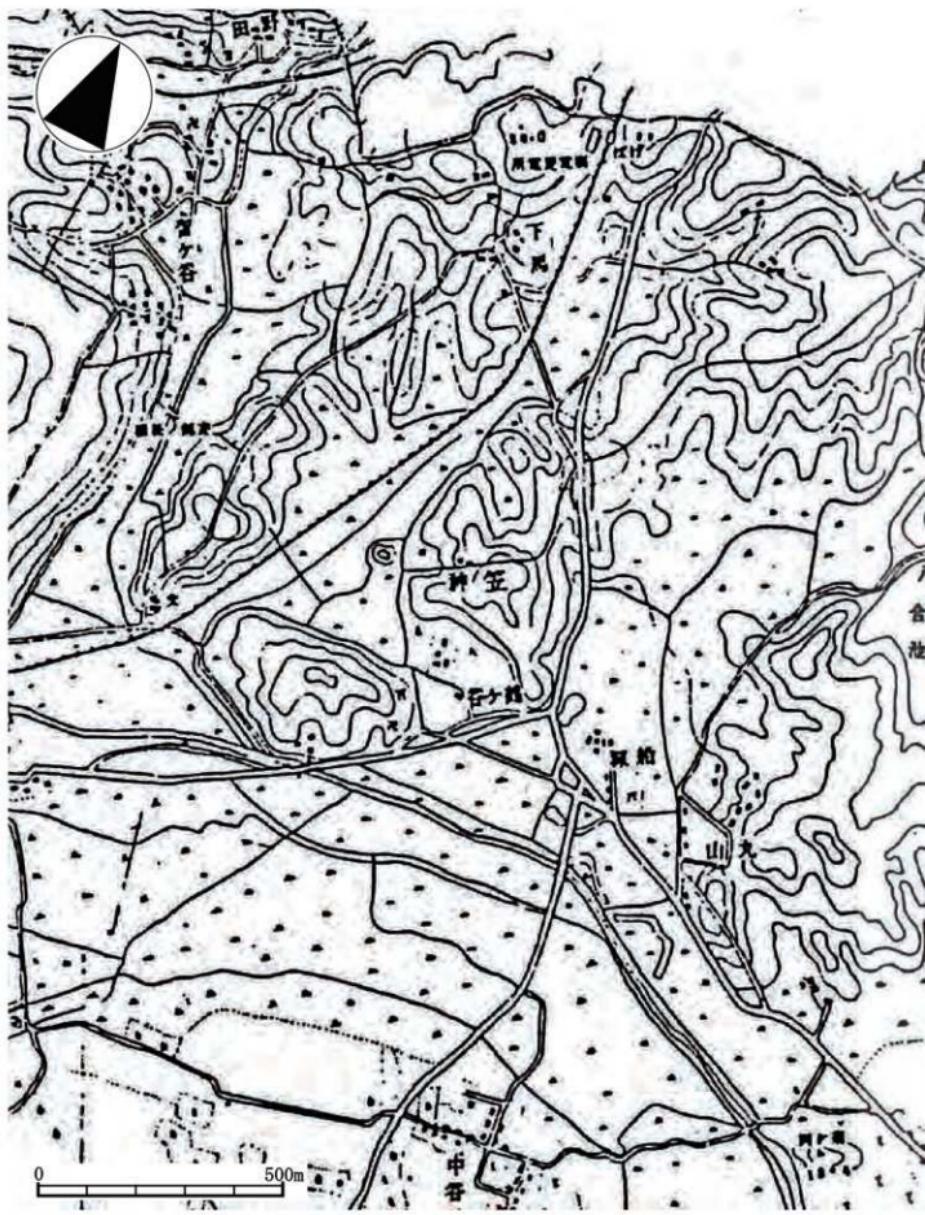


笠神地区周辺地図2（昭和6年国土地理院発行）





笠神地区周辺地図 3 (昭和 13 年)





笠神地区周辺地図4（昭和44年）





笠神地区周辺航空写真 1 (昭和 23 年米軍撮影)

画面左下隅から北東方向にかけて直線的に伸びているのは国道 45 号線であり、その西側を並行するのは仙石線の線路である。画面下端付近を東西に流れているのは砂押川で、その南側には耕地整理前の水田が残されている。画面中央は、アジア・太平洋戦争時に海軍工廠が建設されたところであり、戦後は米軍の駐屯地となった。画面北側の集落が点在する一帯とは対照的な景観を呈している。

南側の耕地を縦断し、南北に広がる区画の中を、海軍工廠の機銃部（画面より南側）と火口部（画面中央）を結ぶ道路が延びており、その延長線上で、細長く木立に覆われた所が舟塚である。画面左下の上ノ台という高台は、かつて西園寺と仁和多利神社があったところであり、戦後米軍の将校俱楽部が置かれた。



笠神地区周辺航空写真 2 (昭和 36 年国土地理院撮影)

砂押川の南側の水田は、耕地整理が進み短冊状の区画に変わった。国道 45 号線の縁辺では宅地が増加し、開発が進んだ様子がうかがわれる。

### 第三節 地名

○ 陸前国宮城郡各村字調書に記された小字

笠神村の地名については、安永三年（一七七四）の「風土記御用書出」に小名として表示されているものがあり、小名とは表示されないが地名として見られるものもある。また明治九年（一八七六）の「陸前国宮城郡各村字調書」には、村名、大字、小字がそれぞれ読み仮名を伴つて書き出されており、字名に関する基本資料となつている。その後、昭和八年（一九三三）には三塚源五郎が『多賀城村聚落の機構 地名の研究』（私家版）を著し、主な地名の由来等について紹介している。三塚の研究には安易な想像と見られる部分も含まれてはいるが、昭和八年当時の地域の様子を知る上で参考になる部分が多い。昭和四二年（一九六七）の『多賀城町誌』には、町内の歴史が江戸時代の村単位でまとめられており（第四篇近世史・第七章江戸時代・六 区誌）、その中には、現在では失われてしまった地名に関する情報が多く含まれている。

以下、それらの資料を参考にして、「風土記御用書出」は「書出」、「陸前国宮城郡各村字調書」は「調書」、「多賀城村聚落の機構 地名の研究」は「研究」、「多賀城町誌」は「町誌」の略称により記述する。

○ 風土記御用書出に記された小名

鶴谷 丸山 牛生 小坂 日向

○ 風土記御用書出に記された小名以外の地名

眉見 前畑 山中 箱崎 高原

○ 風土記御用書出に記された山や川

大山 与五山 助ヶ森 箱塚川

○ 戰後の字名

赤坂	芦畔	石崎	上ノ台	台山	内手	大松	大山	折越	海仙壇	原	丸山	金口	中庭	清水	持替	海仙壇	黒石崎	花立	天満崎
牛生	黒石崎	西の神	三本松	清水	新梅の宮	新丸山	天満崎	一本松	牛生	芦畔	休場	大山	伊勢堂	赤坂	小沢	菊ヶ岡	天神	牛生前	

○ 上ノ台（あしごろ） 別名東方田（とぼた）。「とぼ」は最初という意味で開墾したこと。畔に芦が繁茂していたためか（研究）。現在は塩窓市に編入されている。

○ 石崎（いさき） 石の山の出先という意味か（研究）。鶴ヶ谷一丁目から伝上山一丁目にかけての地域であり、現在の多賀城小学校所在地も含まれる。

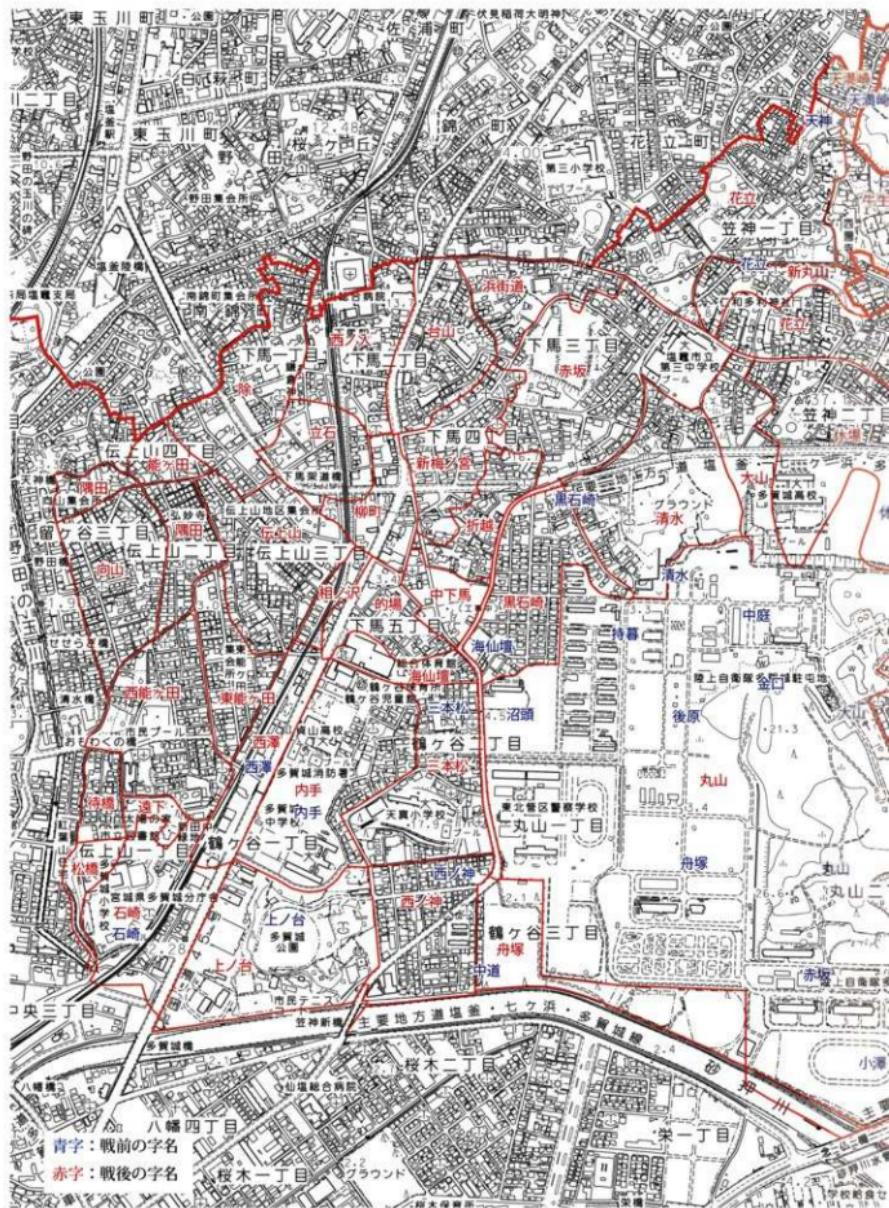
○ 伊勢堂（いせどう） 本郷家の氏神であるお伊勢様が祀られている（研究）。現在の陸上自衛隊多賀城駐屯地内に所在したと見られる。

○ 一本松（いっぽんまつ） 松の大木のあつたところであろうが今はない（研究）。

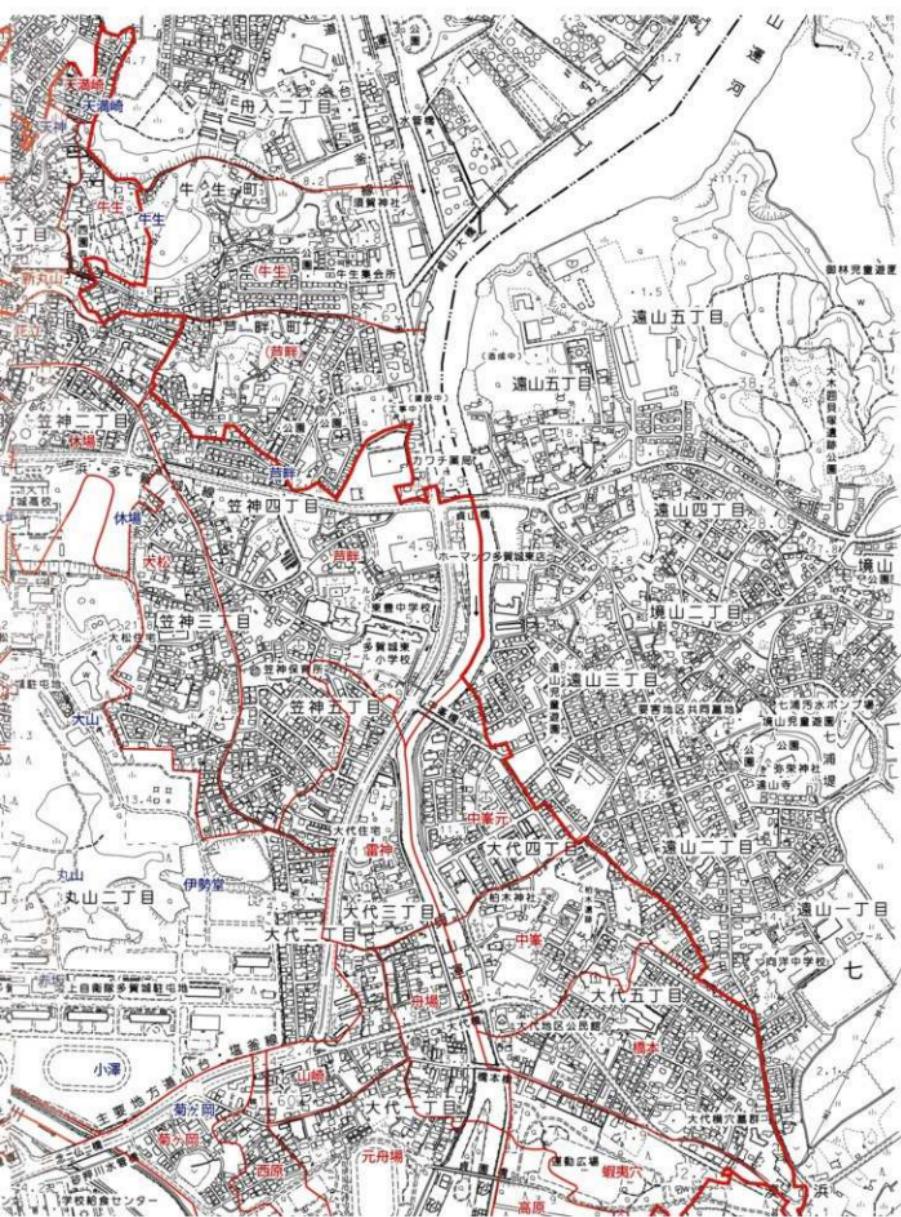
○ 上ノ台（うえのだい） 多賀城中学校の

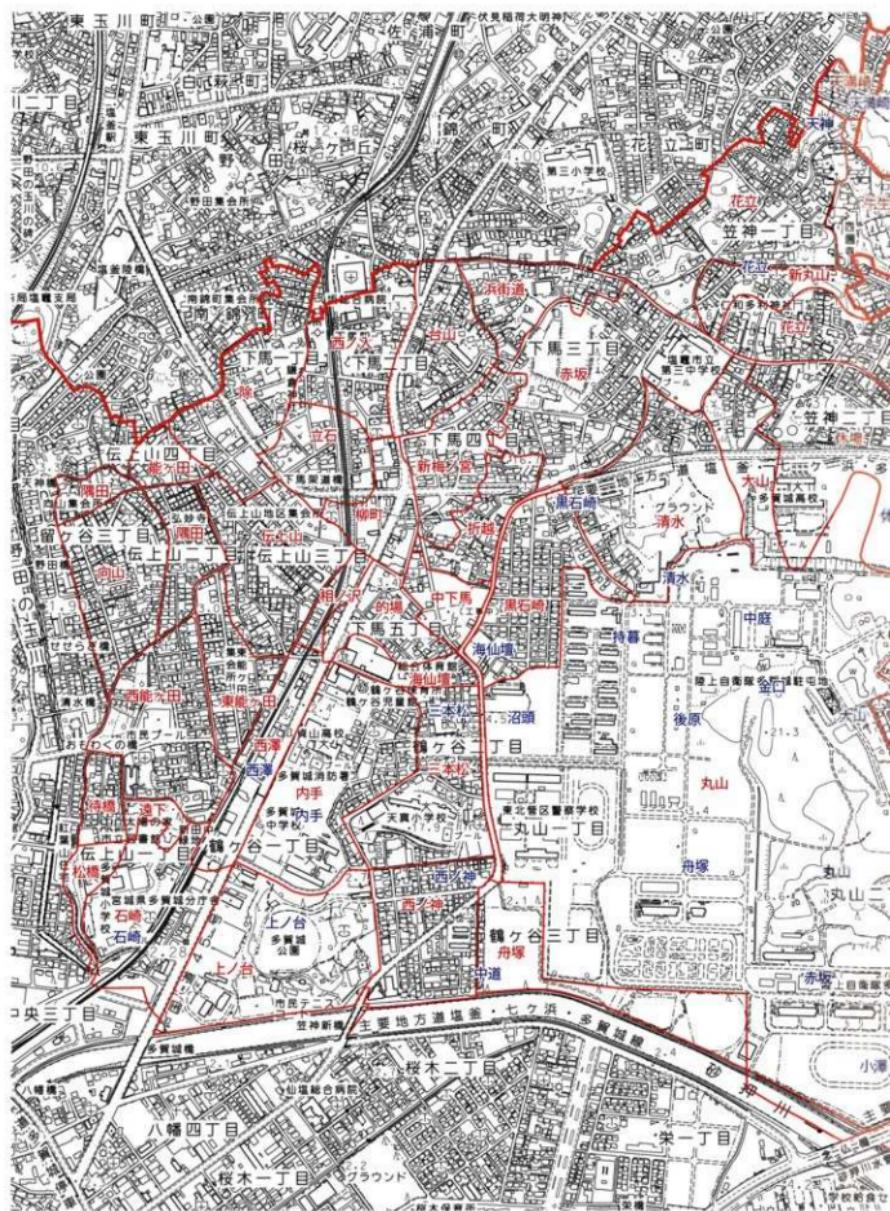


上ノ台



第3図 字名分布図





第3図 字名分布図

大代中峯から現在地に移転する際、中峯に取り残されてしまい、後日柏木神社・石鳥居の西側周辺から掘り出され、昭和五五年（一九八〇）に本社境内に再建されたものである（仁和多利神社由緒碑より）。

### 笠石神社（神明社）

笠石神社は、現在は笠神一丁目の仁和多利神社境内に祀られ、南向きで東西一間、南北一間の神明造りの社殿となっているが、かつては上の台（現在多賀城公園）の周辺にあった石宮である。昭和四二年（一九六七）一〇月に作成された『多賀城町誌』には、笠神村の村名のもととなつたという説とともに、以下のような記載がある。

「前略」現在の多賀城中学校前、宮城建詰の東側の丘で、戦後米軍の将校俱楽部が建てられたところである。その上の台の西沢に面した小さな崖がある。この崖は石であるが、そこ

さやかな笠石神社の石宮があつた。（中略）

南面し西向きの門もあつたという。（後略）

具体的な場所については、今は宮城羅詰があると記されているので、現在の宮城県多賀城分庁舎や大型商業店舗の間ということになる。



現在の笠石神社



仁和多利神社境内

かつて笠石神社の近辺で生活していた人々が作成した『古里の笠神を訪ねて』（板橋ほか一九九七）には、『町誌』に記載された場所よりもやや北側で、現在の多賀城中学校正門前、天真小学校へのぼる坂道の入り口に笠石神社があったという記載があり、そこに直径約三・三尺、高さ二・二尺ほどの大石と石のお宮が祭られ、幟も立てられていたという。『町誌』には、笠石神社幟として二流の幟の写真が掲載されており、それぞれ「奉納笠石大明神 天保七丙申年 三月廿八日 当村中」、「奉納笠石大明神 天保丙申七年 三月廿八日 当村中」の文字が記されている。写真右側の幟には、上辺と左辺に乳（竿に取り付けるための輪）が確認できる。ところで、仁和多利神社に保管されている明治三七年（一九〇四）の棟札に「神明社笠石大明神」とある。神明社は、風土記御用書出に、所在地の小名は曰向、誰がいつ勧請したかは不明であるが、社地は豊明であるが、社地は豊豊横とも五間、社は南向きで二尺作りであり、地主・別当は新屋敷の久兵衛、祭日は九月十九日と記



笠石神社幟（『多賀城町誌』より）

## 第四節 社寺仏閣

### 一 神社

#### 仁和多利神社



仁和多利神社

仁和多利神社は笠神村の村鎮守である。かつては上ノ台（現在の多賀城公園）の北東部にあつたが、現在は笠神一丁目の住宅地の中にある。上ノ台にあつた時の様子を伝える資料はないが、風土記御用書出には仁波多里權現社とあり、誰かがいつ勧請したかは不明であるが、社は東向きで四尺造り、鳥居は北東向きと記載されている。

仁和多利神社には元禄二年（一六九九）から平成一九年に至る四点の棟札がある。これにより、元禄二年、宝永七年（一七一〇）、元文四年（一七三九）の建立や、文政二年（一八二八）の替（屋根修理）が行われていたことが明らかである。名称については、元禄二年の棟札に「仁和田里權現宮、風土記御用書出に仁波多里權現社」とある。明治四年（一八七一）、神仏分離令に伴つて權現号が廢されて仁和田里神社となり、明治二年（一八七八）に現在の仁和多利神社となつた（表1）。

明治の終わり頃になると、笠石神明社、須賀神社を合祀し、明治四二年（一九〇九）には柏木神社も合祀するが、昭和一七年（一九四二）から多賀城海軍工廠の建設が始まると境内はそ

の用地となつたため、大代字中峯（現在の柏木神社の場所）の地に移転し、終戦後の昭和二五年（一九五〇）、笠神の方々からの要望で境内地の寄進を受け、現在地に移転するという変遷をたどっている。

現在の境内は東西約二〇メートル、南北約三〇メートルであり、その中央やや北寄りに拝殿と幣殿、境内の南中央に石鳥居、その北側に一对の石燈籠がある。社殿は、鐵板寄棟造りの拝殿背面に幣殿が接続し、その奥に離れて一間社流れ造りの本殿が配置されている。昭和三二年（一九五七）に拝殿を新築し、その後幣殿も新設されて今日に至つている。社殿には四点の棟札が保管されており、表1のように、近世から現代に至る修繕の歴史をたどることができる。

境内の東邊には供養塔と並んで念忠碑（大正六年）、昭徳神碑（大正九年）、仁和多利神社由緒碑（昭和五五年）がある。昭徳神碑は本社が

表1 棟札に見る仁和多利神社の歴史

年代	摘要
元禄12年	1699 仁和田里權現宮建立
宝永7年	1710 建立
元文4年	1739 建立
安永3年	1774 仁波多里權現社
文政11年	1828 屋根葺替え
明治4年	1871 仁和田里神社 建立
明治11年	1878 仁和多利神社岩階修繕
明治末年	笠石神明社・須賀神社を合祀
明治42年	1909 (柏木神社等を合祀)
昭和17年	1942 (大代村中峯に移転)
昭和25年	1950 (笠神村に復帰)
昭和32年	1957 拝殿新築
昭和44年	1969 仁和多利神社本殿拝殿修営
昭和55年	1980 仁和多利神社由緒碑建立
昭和58年	1983 御輿鞆堂本殿屋根替
昭和58年	1983 軛奉納
昭和58年	1983 軛立一対奉納
昭和59年	1984 社地土留工事
平成13年	2001 犬一対奉納
平成18年	2006 軛一対奉納
平成19年	2007 仁和多利神社本社殿並に拝殿 弊殿屋根葺替
不明	仁和多利神社拝殿新造

大代中峯から現在地に移転する際、中峯に取り残されてしまい、後日柏木神社石鳥居の西側周辺から掘り出され、昭和五五年（一九八〇）に本社境内に再建されたものである（仁和多利神社由緒碑より）。

### 笠石神社（神明社）

笠石神社は、現在は笠神一丁目の仁和多利神社境内に祀られ、南向きで東西一間、南北一間の神明造りの社殿となっているが、かつては上の台現在多賀城公園の周辺にあった石宮である。昭和二年（一九六七）一〇月に作成された『多賀城町誌』に以下のような記載がある。

〔前略〕現在の多賀城中学校前、宮城建結の東側の丘で、戦後米軍の将校俱楽部が建てられたところである。その上の台の西沢に面した小さな崖がある。この崖は石であるが、そこには数箇の巨石が蟠つておらず、ささやかな笠石神社の石宮があった。（中略）南面し西向きの門もあつたという。（後略）

具体的な場所については、今は宮城羅詰があると記されているので、現在の笠石神社（神明社）（中略）

鶴ヶ谷一丁目の多賀城公園と、その西側の宮城県多賀城分庁舎や大型商業店舗の間ということになる。



現在の笠石神社



仁和多利神社境内

かつて笠石神社の近辺で生活していた人々が作成した『古里の笠神を訪ねて』（板橋ほか一九九七）には、『町誌』に記載された場所よりもやや北側で、現在の多賀城中学校正門前、天真小学校へのぼる坂道の入り口に笠石神社があったという記載があり、そこに直径約三・三尺、高さ二・二尺ほどの大石と石のお宮が祭られ、幟も立てられていたといふ。『町誌』には、笠石神社幟として二流の幟の写真が掲載されており、それぞれ「奉納笠石大明神 天保七丙申年 三月廿八日 当村中」、「奉納笠石大明神 天保丙申七年 三月廿八日 当村中」の文字が記されている。写真右側の幟には、上辺と左辺に乳（竿に取り付けるための輪）が確認できる。ところで、仁和多利神社に保管されている明治三七年（一九〇四）の棟札に「神明社笠石大明神」とある。神明社は、風土記御用書出に、所在地の小名は曰向、誰がいつ勧請したかは不明であるが、社地は豊明であるが、社地は豊豊横とも五間、社は南向きで二尺作りとあり、地主・別当は新屋敷の久兵衛、祭日は九月十九日と記



笠石神社幟（『多賀城町誌』より）

一現境内八歩

第二大區宮城郡小八區  
笠神村字西沢

## 神明社

調査

大浪咸光  
万城目盛近

立會  
副戸長

板橋金右衛門

村振  
作間盛顕

宮城県公文書館所蔵の複製をトレース

第4図 社寺境内区画図（宮城郡笠神村 神明社）



稲荷神社

稲荷神社は笠神二丁目に所在し、休場稲荷、五社稲荷とも呼ばれている。境内は、湊浜から塩竈に至る「浜街道」の南側に面しているが、社殿は浜街道に背を向けており、境内に入るには、民家の間を通り、南側から入るようになっている。境内は東西約一〇メートル、南北約二〇メートルであり、そのほぼ中央に南向きの社殿、南辺に鳥居がある。この稲荷社の創建については明らかではないが、明治二十四年（一八九一）に第一師団參謀部が作成した地図には、休場に「稲荷祠」として神社の表示があり、その頃には既に存在していたことが分かる（第二章 第二節 参照）。但し、その位置は湊浜から下馬に至る浜街道の北にあり、浜街道の南にあたる現在地とは別の場所にあつた可能性もある。扁額は「改平成三年七月吉日」となっているが、大正十四年（一九二五）一月の奉納を記しており、「稲荷神社祈願所建築有志金募集世話人」と題した寄進札にも「大正十四年十一月五日」とあるので、大

載されている。所在地である日向については不明である。両社の祭日は、神明社は九月一日、笠石神社は三月二八日と異なつており、笠石明神と神明社を同一の社とする資料は、明治三七年の棟札があるのみで、詳細は不明である。



正一四年に現在の社殿が造営されたことが知られる。社殿の南東には手水鉢があり、社殿の造営を約八ヶ月さかのばる大正一四年三月二十日の大正一四年三月二十日には刻まれている。鳥居の前には轄立がある。昭和二年（一九二七）に柏木神社の本郷勝治が復興主、大友勇三郎が寄附募集の発起人となつて奉納したと記されており、境内の整備の様子がうかがわれる。

## 二 仏閣

### 観音堂

風土記御用書出に仏閣として記載されている。現在西園寺境内に移設されているが、かつては船塚という小山の上に祀られていたものである。移設の原因は、同地が海軍工廠用地となつたためである。宮城三三番札所の一つであり、船塚觀音と呼ばれている。

書出には、誰がいつ勧請したかは不明となつていて、境内は堅一五間、横四間で、堂は南向き二尺作と記されている。明治七十九年（一八七四）一八七六年）の「民有地

宮城郡社寺境內區畫圖」（県庁文書）

の中の第二大區宮城郡小八区等神村字船塚

「觀音堂」には、境内は東西とも二間と記載されており、安永三年（一七七四）の書出とは境内の規模が大きく異なっている。平成二年一二月に建造物調査を実施してお

り、江戸時代後期の様式とされた。



観音堂

## 一 現境内四歩

### 調査 観音堂

大浪咸光  
万城目盛近

立會  
副戸長

板橋金右衛門  
作間盛顕  
村坂



南北  
東西  
右同人持山

第一大區宮城郡小八區  
笠神村字船塚

宮城県公文書館所蔵の複製をトレース

第5図 社寺境内区画図（宮城郡笠神村 観音堂）

## 黄龍山西園寺

西園寺は笠神一丁目に所在する臨濟宗妙心寺派の寺院である。かつては鶴ヶ谷（現在の多賀城公園の南側）にあつたが、その一帯が多賀城海軍工廠建設用地に含まれたため、昭和一八年（一九四三）から約二年をかけて現在地へ移転した。風土記御用書出には、仏殿は南向きて竪七間半、横四間半、門は辰巳向きで松島瑞巌寺の先住曾庵和尚の筆になる「黃龍山」の横額があつた。開山は、年代が不明であるが瑞巌寺二七世大林和尚であり、享保一六年（一七三一）二月に仙林和尚が中興した。本山は松島の瑞巌寺である等の記載がある。また、一六世月叟宗圓和尚の墓標銘には「造建中興」とともに、「明治一四年已新築」の記載もあり、その時期に堂宇新築という大改修があつたことが分かる。

明治元（一八六八）・二年（一八六九）の「民有地宮城郡社寺境内區畫圖」（県庁文書）の中に、西園寺の区画を記した図面が三点収録されている。A図「第二大大區宮城郡小八区笠神村字上野臺 西園寺」は数値の記載があるもの、B図「陸前國宮城郡笠神村 西園寺」は道路以外に数値の記載がないもの、C図「陸前國宮城郡笠松（神の誤記）村 西園寺」は数値の記載が一切ないものである。

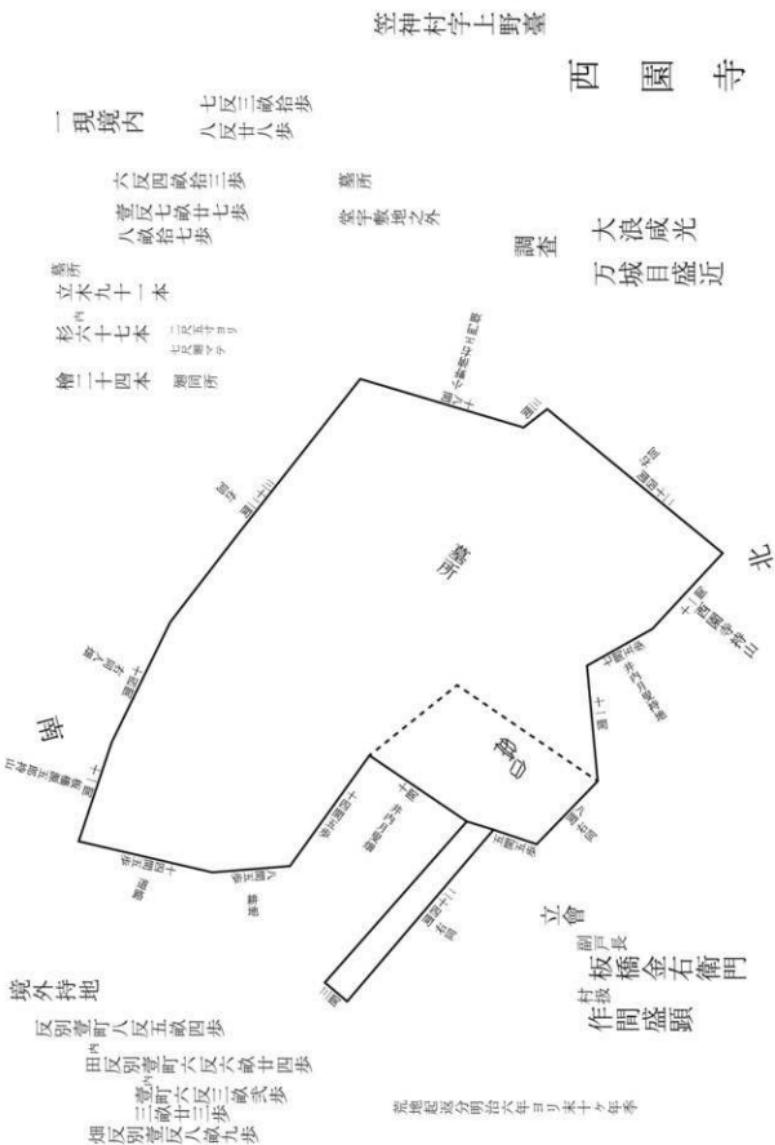
A図によれば、境内は東西一五間五歩、南北八間であり、その中央北寄りに東西棟、その東側に南北棟が各一棟描かれている。また、墓所を含めた全体の規模も記載され、墓所には幹回りが八〇センチから二メートルを超える杉や檜が生い茂っていた状況も記録されている。境内、B・C図には東西棟が本堂、南北棟が庫裏と表示されている。境内の南側には幅三間、長さ二四間の南北方向の細長い区画が表示されており、



西園寺全景（昭和 17 年頃）山上右手奥の建物は仁和多利神社

第6図 陸前国宮城郡寺院境内区画図面（笠神村 西園寺）

宮城県公文書館所蔵の複製をトレース



B・C図には道路、境内北側と西側の広い範囲は墓所となっている。

現在の西園寺は、笠神二丁目二番にある。低丘陵の南斜面を造成して境内があり、その東側の丘陵西斜面に墓地が形成されている。山門をくぐると正面に本堂、右手に庫裏がある。また、庫裏から墓地に向かう通路の北側に船塚観音が移設されており、それをさらにのぼると北側の一段高いところに東西四・五メートル、南北一・八メートルの平場が造成され、住職の墓域となっている。その一角に「前住西園」碑があり、次のように歴代住職の名が記されている（）内は墓標銘による寂年である。

### 開山

大林宗茂和尚

福菴満公座元（延宝五年一二月三二日）

藍田水公座元（元禄一〇年一一月二八日）

劫點塵公座元

松洲清公座元

海印珠公首座（享保二〇年三月二八日）

仙林守廓和尚（享保二六年二月一〇日）

龍水智懶和尚（元文元年七月一四日）

切峯薰公座元（延享五年三月六日）

益州宗虎和尚（安永三年正月一二日）

虎嶽性調和尚（天明四年十二月三日）

梅溪英公座元

大圓明公座元  
笠郷傳公座元  
天瑞全止和尚（文化六年一〇月三二日）

月叟宗圓和尚（明治一五年一〇月一九日）

堯州宣明和尚（明治一四年九月七日）

全呆徹外和尚  
禪城一比和尚  
造建



西園寺旧本堂（昭和17年頃）



旧西園寺（昭和4年頃）

開山である大林宗茂和尚については、生没年及び住職を務めた時期等全く不明であるが、風土記には瑞巖寺の二七世とあり、実際は中世に再興された円福寺の二七世とされている（松島町史編さん委員会一九九二）。再興の時期については、建長年間（一二四九～一二五六）説、正元年（一二五九）説、正元・文応年間（一二五九～一二六一）説、弘長元年（一二六一）説などあるが、いずれにしても一三世紀中葉である。瑞巒寺所蔵の「天台記」には円福寺となつてからの歴代住職の交名が付されており（松島町史編さん委員会一九八九）、それによれば五六世茂林和尚は文明年間（一四六九～一四八七）の人とみられる。二七世大林和尚の在職期間は一三世紀中葉から文明年間であり、代位も概ね中間頃となることから、大林和尚を開山とする西園寺の創建年代を一四世紀頃と推定することも可能であろう。

## 第五節 石造物

### 一 凡例

1 本節には、中世の供養塔である板碑・庚申塔をはじめとする近世・近代の供養塔・石燈籠・石鳥居・手水鉢・幟立・顯彰碑・墓標等石造物について調査成果を収録した。

2 石造物は、近世と同じ様式が続いているため、昭和期まで調査の対象とした。しかし、個人情報への配慮から、一覧表等には掲載したが図版には掲載しなかったものもある。

3 石造物には、登録番号として001番からの連続番号を付した。その中には過去の調査で確認されながら、今回の調査で確認できなかつたものも含んでいる。

4 図版中、右上の表示は、「図版番号・所在地・(登録番号)」である。

5 図版は拓本、図版内釋文、写真で構成した。拓本の縮尺は八分の一に統一し、図版内釋文では可能な限り実際の文字に近いもので示した。写真は今回の調査で撮影したもののはか、過去の調査で撮影したもののが参考資料として掲載したものがある。

6 稲文は原則として常用漢字を使用した。

7 梵字は片仮名で表記し、(梵字)とした。

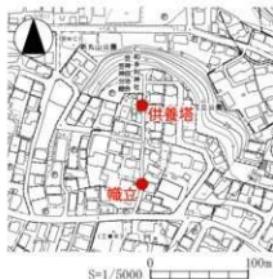
8 欠損や摩耗等により判読できない箇所については、文字数に応じて□または□で示した。

9 石材については、東北大学総合学術博物館協力研究員永広昌之氏の肉眼観察による。

### 二 分布と概要

管轄地域で確認した石造物としては、中世の板碑、近世・近代の供養塔・石燈籠・石鳥居・幟立・手水鉢・扁額・顯彰碑・墓標がある。それらは単独で存在する地区もあるが、両者が混在している地区もある。それらの分布と所在地の概要については以下のとおりである。

仁和多利神社 仁和多利神社には境内南辺中央に石鳥居があり、その北側に一对の石燈籠がある。境内東辺には四基の供養塔があり、それと共に南北に並んで忠誠碑(大正六年)、昭徳神碑(大正九年)、仁和多利神社由緒碑(昭和五五年)がある。



第7図 仁和多利神社石造物分布



仁和多利神社

### 西園寺

山門をくぐると、左手に觀音菩薩立像や萬靈塔が祀られた区

画があり、その周囲に供養塔八基、地蔵菩薩坐像一基、墓標三基がまとめられている。また、移設されている船塚觀音の前には題目塔が一基あり、他所から運び込まれた可能性が高い。住職の墓地には代々の住職の墓標がある。



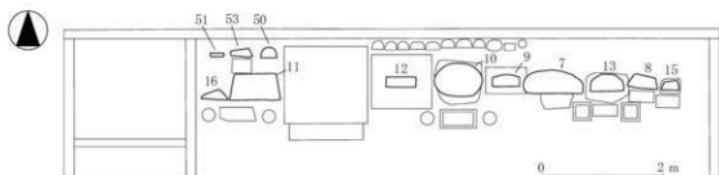
西園寺境内の供養塔



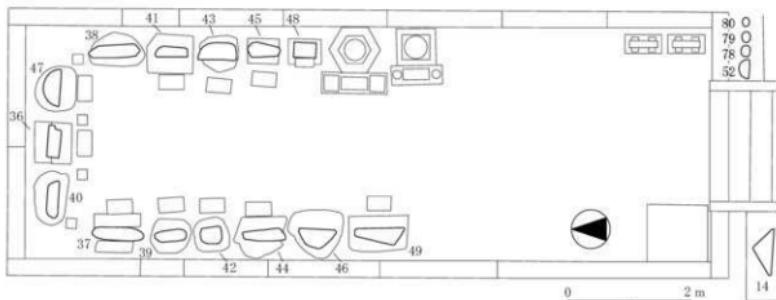
西園寺住職墓地



第8図 西園寺石造物分布図



第9図 西園寺境内供養塔配置図



第10図 西園寺境内住職墓地墓標配置図

**福荷神社** 稲荷神社には、鳥居の前に幟立があり、社殿の南東には手水鉢がある。社殿には石製の扁額が掲げられている。



**花立 A** 笠神一丁目一〇番、塙竈市牛生との境界となる東西方向の水路の南側に板碑が一基ある。壇状に高く造成された一画の覆屋の中に、石製、土製の小祠とともにあり、鈴木家の氏神として祀られている。かつては現在地の東方の水田中（塙竈市牛生町）にあったが、昭和四〇年（一九六五）頃、同地が造成されることになったため現在地に移転したという。現在は一帯が宅地となり、板碑が立っていた位置は不明である。覆屋の中には、板碑と並んで方柱状の石が一基並んで立てられているが、文字等は確認できなかった。



花立 A

**花立 B** 笠神一丁目一八番の宅地内に供養塔が三基あり、現在も同家で祀られている。同家

は海軍工廠建設によって現在地に移転しており、かつての住所は伊勢堂である。供養塔の周囲には手水鉢とともに自然石が多く数あり、移転の際に供養塔と一緒に運び込んだという。

**芦畔** 笠神四丁目五番の宅地内に供養塔が一基、屋敷神として祀られている。同家は海軍工廠建設によって現在地に移転しており、かつての住所は丸山である。



芦畔



花立 B

### 船塚 陸上自衛隊多賀城駐屯地

の南西隅に、船塚と呼ばれる小山があり、頂部に觀音堂が祀られていた。觀音堂は西園寺境内に移設されたが、名号塔が一基残されたままとなつており、平成二七年に船塚が消滅した際、その名号塔も他所へ移設された。

上ノ台 鶴ヶ谷一丁目にある丘陵は、かつて仁和多利神社や西園寺があつたところである。旧字名

橋の西側約四〇メートルの地点に三基の供養塔がある。

で「上ノ台」と呼ばれる

の丘陵の南端部、笠神大

寺があつたところである。旧字名

橋の西側約四〇メートル

の地点に三基の供養塔が



図 11 上ノ台地籍図



船塚

### 三 板碑

旧笠神村地域では、一基の板碑を確認した。その内の1基は近世の墓標に転用されていたもので、今回の調査で発見したものである。

#### 1 解説

No.1は阿弥陀如来を主尊とした無紀年の板碑である。石材は方柱状であり、碑面は平滑である。梵字の彫りは浅く、幅も狭い。

No.2は阿弥陀如来を主尊とした板碑である。享保二〇年（一七三五）の海印珠公の墓標に転用されており、確認できるのは種子「キリーケ」のみである。表面全体にわたって平滑に摩耗しており、板碑としての役割を終えた後、砥石として再利用された可能性がある。

#### 2 板碑の年代

いずれも紀年銘がなく、年代は不明である。

##### 釋文

1 花立 A (No.202)  
(キリーケ)

2 西園寺 (No.221)  
(キリーケ)

1

花立A

(No.  
202)

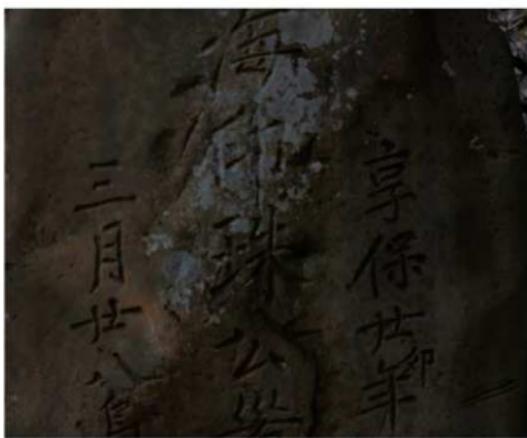
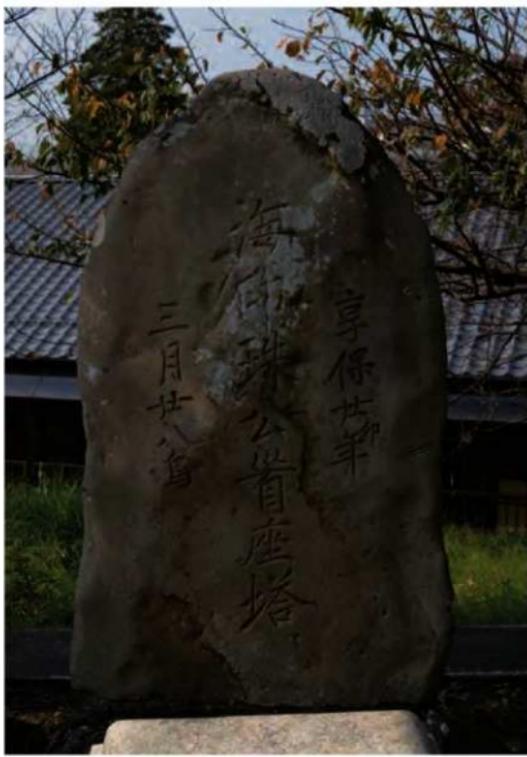
（キリーグ）



S=1/8 0 30cm







#### 四 近世・近代の供養塔

今回の調査において、供養塔二六基、石仏一基を確認した。信仰内容からみると、供養塔には庚申塔、自然神信仰の塔、馬の守護神の塔、山岳信仰の塔、名号塔、題目塔、その他仏教関係の塔のほか、神社に関わるもの、巫言に関わるとみられるものがある。年代的にみると、供養塔は近世が一三基、近代が一二基、不明が一基であり、石仏は近世のものである。

なお、昭和五七年（一九八二）に三崎氏が調査したもので、確認できなかつたものもある。

（1）庚申塔  
「庚申」と刻んだ庚申塔が一基ある。

No.18は寛政二年（一七九九）五月一日の庚申塔である。上部に日天と月天が配され、それぞれ瑞雲を伴つていて。寛政二年は己未の年であり、庚申の年ではないが、五月一日はこの年三回目の庚申の日にあたっている。

（2）自然神信仰の塔

山神塔が三基、水神塔が一基、地神大神塔が一基ある。

No.4は文政元年（一八一八）の山神塔で、上部に「子牛田」とあることから、小牛田山神社への信仰を示すものである。年には「裁」の字が充てられている。

No.7は寛政八年（一七九六）の山神塔である。世話人「木□」と記されているので、その世話を中心とする人々によって建立されたと考えられる。

らる。

No.15は明治三年（一八九〇）の山神塔である。能嶋長吉の門人である永倉忠次郎がこの塔を建立した施主であろう。

No.24は大正二四年（一九二五）の水神塔である。施主は本郷栄次である。

No.21は地神大神塔である。地神は土地の神であり、宅地の守護神である。「地神」+「大神」と地神を神格化した表記となつている。

（3）馬の守護神の塔

馬頭観世音塔が一基ある。

No.8は文化二年（一八一四）の馬頭観世音塔である。上部に觀音菩薩の種子である「サ」が刻まれている。村中によつて建立されたものである。三月吉辰の「吉辰」は吉日と同様で、日を特定しない記載方法の一つである。

No.11は安政二年（一八一五）の馬頭観世音塔である。中央部に、上部を円弧状にした高さ九〇センチメートル以上、幅約四〇センチメートルの区画を割り出し、その中の中央に「馬頭観世音」、その両側に年次左下には「松吉」の名が記されている。

（4）山岳信仰の塔

「湯殿山」、「湯殿山大権現 羽黒山 月山」、「湯殿山 月山 羽黒山」

「湯殿山大神」と記されたものが四基ある。

No.3は文化二四年（一八一七）の湯殿山塔である。願主は「彦□」と人名の一部が読み取れる。

No.19は中央に湯殿山大権現、右に羽黒山、左に□山（月山）と刻まれた文化二年（一八一四）建立の出羽三山塔である。上部に日天と月天

が配され、いずれも瑞雲を伴つていて。

No.20は中央に湯殿山、右に月山、左に羽黒山と記された明治一八年（一八八五）の出羽三山塔である。

No.19と同様に、上部には瑞雲を伴つた日天と月天が配されており、その図案はきわめて類似したものとなつてゐる。

No.22は大正三年（一九一四）の湯殿山大神塔である。本郷庄之助と妻

ふくによつて建立されたものである。「湯殿山」+「大神」という表記は、山岳信仰の靈山である湯殿山を神格化した称号であり、明治時代以降に現れるものである。

#### (5)名号塔

中央に南無阿弥陀仏の名号を刻んだ塔が二基ある。

No.12は慶応二年（一八六六）に本郷貞吉によつて建立された名号塔である。石材は板状に切り出され、表面は平滑に加工されている。塔面は界線によつて上下に二分され、上半分には中央に南無阿弥陀仏の名号、その左右に法華經如意輪品第一六から蘭頃「心欲見仏 不自惜身命」を配している。下半分には建立の趣旨を「〇行にわたつて記してお

り、続けて四言一六句の漢詩があり、慶応二年丙寅秋七月現住月船撰併書と結ばれている。

当時の西園寺住職月鬼宗圓和尚が撰文し、書も月復によるものである。側面には「本郷貞吉建焉」と建立者名が明記され、その下に答神村の石工三名の名が記されている。本塔は六歳で夭折した次子の冥福のため、本郷貞吉が建立した供養塔である。なお、明治四年（一八七二）の仁和利神社建立棟札には、大庄屋として本郷貞吉の名

があり、明治七年（一八七四）一八七六年）に作成された「民有地宮城郡社寺境内區畫圖」（県府文書）の中の「第二大宮官城郡小八区答神村字船塚 観音堂」にも、観音堂の地主としてその名が記されている（第

四節「觀音堂」の項参照）。

No.25は享保二年（一七二七）の名号塔である。下部に五名の交名があるが判読できない部分が多い。「現住西園寺」や「頬宝院」などの名がある。頬宝院は大代村の修驗來宝院の可能性がある（第六節参照）。

#### (6)題目塔

No.17は明治二八年（一八九五）の題目塔である。中央に題目、その下に「宇賀大善神」とある。宇賀大善神は日蓮宗で祀る三十番神の一つである。

#### (7)その他仏教関係の塔

「念佛供養塔」、「大日如來」と記したものや六地藏を刻んだ塔などがある。

No.9は文政一二年（一八二九）の念佛供養塔である。石材は方柱状に加工されたものである。「丸山忠藏妻けさ樹之」とあり、丸山忠藏の妻が建立した旨が明記されている。「樹之」は「建之」と同義である。

No.16は明治二六年（一八九三）の大日如來塔である。

No.14は明治十九年（一八八六）の六地藏を刻んだ塔である。一面に地蔵菩薩立像を六体、二段に並べて陽刻したるもので、いずれも請花の上に立つており、次のように持物や印相が異なる姿となつてゐる。またそれらの脇にはそれぞれ名が刻まれている。

上段右 「清光室」 右手に錫杖、左手に如意珠を持つ

上段中 「即心」 合掌

上段左 「道」 両手で幡幅を持つ

下段右 「豊」 右手で施無畏与願印、左手で引摶印

下段中 「即得」 両手で念珠を持つ

下段左 「即空」両手で香炉を持つ

「造立當山六世堯州」とあるが、開山から数えて一七番目の堯州宜明和尚のことと見られる（歴代住職墓碑銘による）。

(8) 神社関係の塔

「日吉神社」の塔がある。

No.6は明治一八年（一八八五）、No.13は明治二二年（一八七九）の日吉神社塔である。No.13の「三」は年の異体字であり、今回の調査でも數例確認している。

(9) 巫言関係の塔

No.5は蛇神塔である。明治一三年（一八八〇）に小林三右衛門によつて建立されたものである。巫者の祈祷によつてその崇りが告げられ、それを供養して排除するための建立と考えられている（多賀城市史編纂委員会 一九八六）。

(10) 石仏

地蔵菩薩坐像が一基ある。No.10は、両手で宝珠を持ち、請花の上に座した地蔵菩薩座像である。請花の下には五輪塔の水輪・地輪に類似した輪状の基礎がある。水輪状の基礎には菊の花と葉の文様が陽刻されており、地名の女性、次が在家の男性、次が僧籍にある人と見られる。はじめの四人が俗名の女性、次が在家の男性、次が僧籍にある人と見られる。天保二年（一八三二）の建立である。

2 供養塔に見るいくつかの問題点

(1) 八幡村地域との比較

今回の調査において、近世から近代にかけての供養塔は一四基確認し

た（表2・3）。最も古いものが船塚の享保一二年（一七二七）の名号塔であり、最も新しいものは花立Bの大正四年（一九一五）の水神塔である。八幡村地域における供養塔総数は六四基（註1）であるので、その差は大きいが、これは供養塔建立の主体者である村人の人数にもよるのであろう。八幡村は武士・寺院等をのぞいても人頭四一人であるのに対し、笠神村は二六人である（註2）。供養塔建立という財政的事情に対し、講中の人数は少なからず影響すると考えられる。

前項(1)～(10)に示したように、笠神村にもさまざまな供養塔が建立され、その種類は八幡村地域と比較しても大きな相違はない。しかし、各供養塔の建立年代についてみると、馬頭觀世音塔は三年、名号塔と庚申塔は三五年、出羽三山塔にいたつては五六六年遅れての建立となつており、八幡村との間に大きな差違が見られる。

一方、山神塔は八幡村地域より六年早く建立されており、特に「小牛田」と明記した小牛田山神社への信仰を示すものについては一八年早い建立となつている。

このような差違が生じた原因について、現段階では不明であるが、今後周辺地域の調査を進める中で明らかになつていくと考えられる。

(2) 舟堤寺と名号塔の関係

供養塔の建立にあたり、西園寺が造塔時の祭事に関わっていたことを示す名号塔が二例ある。一例目は船塚の享保一二年（一七二七）の塔であり、交名のはじめに「現住西園寺」と記されている。二例目は西園寺の慶応二年（一八六六）の塔であり、觀音堂の地主本郷貞吉が建立したもので、文末に「月航撰併書」と記されている。月航は西園寺一六世月叟宗圓である。

臨済宗妙心寺派の西園寺が、浄土教系の名号塔建立に関わることは、通常は考えにくいことであるが、村人の信仰が、檀那寺の宗派に厳格に規制されない状況を示している。このような問題は八幡村地域においても存在し（註3）、江戸時代、民衆はいすれかの寺院を菩提寺とし、その権家となることを義務付けた寺請制度下においても、特段不都合なあり方ではなかつたと考えられる。

註1 八幡村の調査で供養碑として一覧表に記載したものから、墓碑等を除外した点数。

註2 八幡村は安永三年（一七七四）の「八幡村風土記御用書出」、笠

神村は「笠神村風土記御用書出」に記載がないため、安永元年

（一七七二）に完成した「封内風土記」による。

註3 「多賀城市の歴史遺産 八幡村（二）」の「第三章・四 近世の供養碑・4 念仏塔に見られる禅宗的要素」参照。

表2 供養塔等一覧表（年代別）

番号	年号	西暦	所在地	主体	図版番号	備考
1	享保12	1727	船塚	名号	25	
2	寛政8	1796	西園寺	山神	7	
3	寛政11	1799	上ノ台	庚申	18	
4	文化11	1814	西園寺	馬頭觀世音	8	
5	文化11	1814	上ノ台	湯殿山大權現・羽黒山・月山	19	
6	文化14	1817	仁和多利神社	湯殿山	3	
7	文政1	1818	仁和多利神社	山神	4	
8	文政12	1829	西園寺	念佛供養塔	9	
9	天保2	1831	西園寺	地蔵菩薩坐像	10	
10	安政2	1855	西園寺	馬頭觀世音	11	
11	慶応2	1866	西園寺	名号	12	
12	明治6	1873	折越	湯殿山	60	現在、下馬に移転
13	明治12	1879	西園寺	日吉神社	13	
14	明治13	1880	仁和多利神社	蛇神	5	
15	明治18	1885	仁和多利神社	日吉神社	6	
16	明治18	1885	上ノ台	湯殿山・月山・羽黒山	20	
17	明治19	1886	西園寺	六地蔵	14	
18	明治23	1890	西園寺	山神	15	
19	明治26	1893	西園寺	大日如來	16	
20	明治28	1895	西園寺	題目	17	
21	明治31	1898	芦畔	地神大神	21	
22	大正3	1914	花立B	湯殿山大神	22	
23	大正6	1917	花立B	日吉神社	23	
24	大正14	1925	花立B	水神	24	

表3 供養塔等一覧表（主体別）

番号	年号	西暦	所在地	主体	図版番号	備考
3	寛政11	1799	上ノ台	庚申	18	
2	寛政8	1796	西園寺	山神	7	
7	文政1	1818	仁和多利神社	山神	4	
18	明治23	1890	西園寺	山神	15	
21	明治31	1898	芦畠	地神大神	21	
24	大正14	1925	花立B	水神	24	
4	文化11	1814	西園寺	馬頭観世音	8	
10	安政2	1855	西園寺	馬頭観世音	11	
5	文化11	1814	上ノ台	湯殿山大權現・羽黒山・月山	19	
6	文化14	1817	仁和多利神社	湯殿山	3	
12	明治6	1873	折越	湯殿山	60	現在、下馬に移転
16	明治18	1885	上ノ台	湯殿山・月山・羽黒山	20	
22	大正3	1914	花立B	湯殿山大神	22	
1	享保12	1727	船塚	名号	25	
8	文政12	1829	西園寺	念佛供養塔	9	
11	慶応2	1866	西園寺	名号	12	
20	明治28	1895	西園寺	題目	17	
17	明治19	1886	西園寺	六地蔵	14	
19	明治26	1893	西園寺	大日如來	16	
14	明治13	1880	仁和多利神社	蛇神	5	
13	明治12	1879	西園寺	日吉神社	13	
15	明治18	1885	仁和多利神社	日吉神社	6	
23	大正6	1917	花立B	日吉神社	23	
9	天保2	1831	西園寺	地藏菩薩坐像	10	

3 仁和多利神社 (No. 191)  
文化十四丙  
壯天  
願主彦  
湯殿山  
八月八日

4 仁和多利神社 (No. 192)  
子牛山  
文政元載  
田十一月十二  
5 仁和多利神社 (No. 193)  
明治十三庚辰年  
蛇神 小林三五衛門  
十月八日 建之

6 仁和多利神社 (No. 194)  
明治十八年  
日吉神社  
四月廿五日

7 西園寺 (No. 207)  
寛政八丙辰天  
山神  
世話人  
三月廿五日  
木□

8 西園寺 (No.203)

文化十二甲戌季

(サ) 馬頭觀世音

三月吉辰 村中

9 西園寺 (No.204)

文政十二己丑年

念佛供養塔

十月九日

丸山忠藏妻けさ樹之

10 西園寺 (No.205)

(地藏菩薩坐像台座)

願主

けさ

□ち

きく

ちゃん

□室妙光信士

妙音□大徳

天保卯年

七月廿六日

建立之

11 西園寺 (No.206)

(側面)

當村 銀右工門

本郷貞吉建焉

石工

梅吉

丑吉

12 西園寺 (No.208)

(オセヂテ面)

一心欲見佛

南無阿弥陀佛

不自惜身命

原天淨士之同者乃末世衆生出生死之路難占海之舟  
航一達彼岸水不退轉凡一切諸行乘爲淨土而修無別岐路  
名一行譬如衆流入海用得海名地雖片疇能行得徹則於往  
生淨土又道決定無疑矣惟越姓本鄉名行廣稱貞吉世爲邑  
長素信佛乘爲寺多竭力爲次子曰不識生而利通罹重病  
父母夙夜嘗祈佛神治療雖盡善盡美而宿債之所不免乎遂  
就風頭失明六歲逝矣憇夫之喪斯大命矣天法護春岳善童  
子實安政戊午二月三十有一日今茲建碑于寺門前境大  
書六字寶號以資爲冥福爲嗚呼利濟之善巧偉矣哉山野不  
端醜拙略記其顛末目係以銘銘曰

還源報詎 净土爲王 那周三際 通徹十方 童子得果

直至道場 心蓮煥發 偏界○香 群生同受 □靈賚

福 法輪子轉 寶邦咸康 家內餘慶 福祿無強 連綿

瓜瓞 千歲昌昌 麋鹿 年内寅秋七月現住月解撰併書

馬頭觀世音

安政二卯年

十一月十七日 松吉

13 西園寺 (No.209)

明治十二年  
正月廿四日  
卯山  
日吉神社

旧八月廿四日

14 西園寺 (No.216)

清光室  
豊  
(地藏菩薩立像)  
(地藏菩薩立像)

道	即心	即得
(地藏菩薩立像)	(地藏菩薩立像)	(地藏菩薩立像)
即空	即空	即空
當山	當山	當山
羽前	羽前	羽前
六世	四日	月廿
釋迦	造立	年九
石工	當山	明治
助松	羽前	十九
山寺	羽前	年九
山	當山	明治
寺	羽前	十九

17 西園寺 (No.215)

家内安全 明治八年  
南無妙法蓮華經 宇賀大善神

子孫長久所 四月廿八日

18 上ノ台 (No.239)

日天 (瑞雲) 寛政十一年  
庚申 施主

月天 (瑞雲) 五月朔日

彦衛

19 上ノ台 (No.240)

日天 (瑞雲)	羽黒山	文化十一年
月天 (瑞雲)	湯殿山大権現	三月吉日
□山		

20 上ノ台 (No.241)

日天 (瑞雲)	月山	明治十八年
月天 (瑞雲)	湯殿山	
羽黒山		
十二月八日		

15 西園寺 (No.211)

明治廿三年  
山神

16 西園寺 (No.210)

正月一日  
能鷺長吉門人  
永倉忠次郎  
大日如來  
舊三月吉

21 芦畔 (No.242)

明治三十一年三月十五日  
地神大神  
板橋よね

22 花立B (No.246)

大正三年

本郷庄之助

湯殿山大神

妻立之

十月八日

建之

23 花立B (No.247)

大正六年

日吉神社

七月二十五日

本郷榮吉建之

24 花立B (No.248)

(オモテ面)

大正十四年

水神

三月十一日

頬裏院

25 鈴塚 (No.238)

師匠□□□

現住西園寺□□  
寺譲書

作石工門

徳兵衛門

享保十二年  
南無阿弥陀佛 (誂花)

八月五日

卯 □ 平 □ 日 □ 申 □ 未 □  
弥四郎

右工門





田牛子  
文政元載  
十一月十二  
山神



S=1/8 0 50cm



昭和中期の山神塔



S=1/8 0 30cm

明治十三庚辰年  
十月八日 建之  
蛇神 小林三右衛門





S=1/8 0 30cm





S=1/8 0 50cm





S=1/8 0 50cm





S=1/8 0 30cm



願主

けさ

□ち

きく

ちん

口室妙光信士

妙音口大德

天保二卯年

七月廿六日

建立之



S=1/8 0 30cm





S=1/8 0 50cm

安政二乙卯年  
馬頭観世音  
十一月十七日  
松吉

(才モテ面)

一心欲見佛  
南無阿彌陀佛  
不自惜身命

原天淨土之法門者乃末世衆生出生死之要路離苦海之舟  
航一達彼岸水不退轉凡一切諸行悉爲淨土而修無別岐路  
名一行譬如衆流入海用得海名地雖片墮能信得徹則於往  
生淨土又道決定無疑矣檀越姓本鄉名行廣稱貞吉世爲邑  
長素信佛乘爲寺多竭力焉次子曰不羈生而口利適罹重病  
父母夙夜醫佛祈神治療雖盡善盡美而宿債之所不免平遂  
就風眼失明六歲逝矣嗟天之喪斯子命矣天法諱春岳善童  
子實安政戊午二月二十有一日口今茲建碣于寺門前境大  
書六字寶號以資爲冥福爲嗚呼利濟之善巧偉矣哉山野不  
端醜拙略記其顛末且係以銘曰

還源要訣 淨土爲王 廏周三際 通徹十方 童子得果  
直至道場 心蓮燐發 循界口香 群生同受 口露寶  
權 法輪于轉 篤厚安康 家內餘慶 福祿無疆 連繩  
瓜瓞 千歲昌昌 慶應二年丙寅秋七月現住月就撰併書

(側面)

當村 銀右工門

本鄉貞吉建焉  
石工 梅吉  
丑吉



S=1/8 0 50cm

(正面)

原天淨土之法門者乃末世衆生出生死之要路離苦海之舟  
航一達彼岸水不退轉凡一切諸行悉爲淨土而修無別岐路  
名一行譬如衆流入海用得海名地雖片壁能信得徹則於往  
生淨土又道決定無疑矣檀越姓本鄉名行廣稱貞吉世爲邑  
長素信佛乘爲寺多竭力焉次子曰不羈生而口利適罹重病  
父母夙夜醫佛祈神治療雖盡善盡美而宿債之所不免平遂  
就風眼失明六歲逝矣嗟天之喪斯子命矣天法諱春岳善童  
子實安政戊午二月二十有一日口今茲建碣于寺門前境大  
書六字寶號以資爲冥福爲嗚呼利濟之善巧偉矣哉山野不  
端醜拙略記其顛末且係以銘曰

還源要訣 净土爲王 廏周三際 通徹十方 童子得果

直至道場 心蓮燭發 循界口香 群生同受 □露寶  
權 法輪于轉 篤厚安康 家內餘慶 福祿無疆 連綿  
瓜瓞 千歲昌昌 慶應二年丙寅秋七月現住月就撰併書

(側面)

一心欲見佛  
南無阿彌陀佛  
不自惜身命

本鄉貞吉建焉

當村 石工

當村 銀右工門

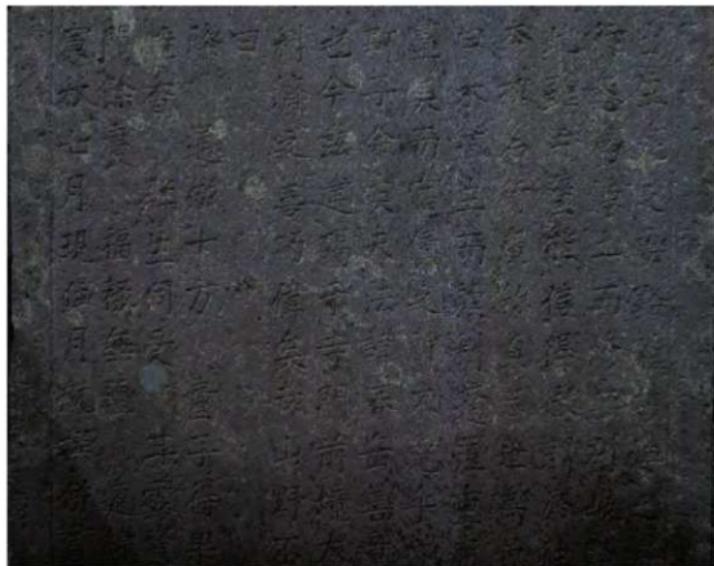
梅吉 丑吉

一心一意見佛

南無阿彌陀佛

不白惜身命









清光室 □ 豊  
（地藏菩薩立像）  
即心 即得  
（地藏菩薩立像）  
即空  
（地藏菩薩立像）  
道 世 六 畠 造 日 月 年 九 明治  
堯 州 石 山 寺 前 羽 助 松  
當 立 造 畠 廿 廿 九 月 九 明治  
羽 前 畠 造 畠 廿 廿 九 月 九 明治  
助 松 畠 造 畠 廿 廿 九 月 九 明治  
道 世 六 畠 造 日 月 年 九 明治  
堯 州 石 山 寺 前 羽 助 松



S=1/8 0 50cm



明路先昇當莊



S=1/8 0 30cm



山神  
正月二日  
能嶋長吉門人  
永倉忠次郎



S=1/8 0 30cm



明治二八年（一八九五）



S=1/8 0 1 30cm

家内安全 明治廿八年

南無妙法蓮華經 宇賀大善神

子孫長久所 四月廿八日





0 50cm  
S=1/8



昭和 44 年の庚申塔

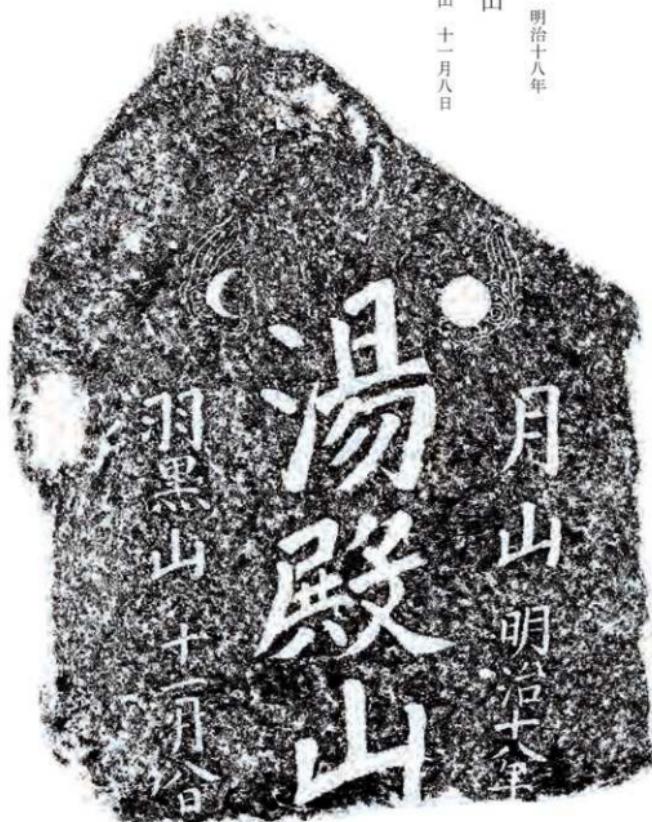


日天 (瑞雲) 羽黒山 文化十一年

湯殿山大權現

月天 (瑞雲) □山 三月吉日





50cm





S=1/8 0 30cm

明治三十一年三月十五日

地神大神

板橋よね



大正三年（一九一四）

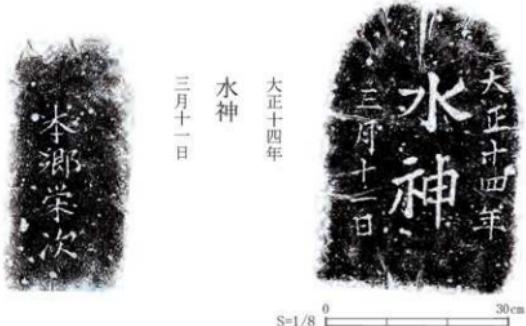


S=1/8 0 50cm





本郷栄次



S=1/8 0 30cm





S=1/8 0 50cm

享保十二天

南無阿彌陀佛  
(請花)

八月吉祥日

賴宝院

□右工門 □卯 □平 □市 □  
□ □ □ 作右工門 德兵衛 現住西園寺 □ □  
□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □

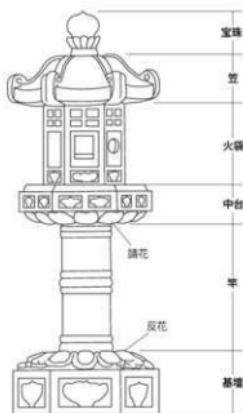
師匠 □ □ □  
寺。畫謹書



## 五 石燈籠・石鳥居・権立・手水鉢・扁額

今回の調査において、石燈籠一基、石鳥居一基、権立一対、手水鉢三基、扁額一面を確認した。

### 1 解説



第12図 石燈籠模式図

## 積文

26 仁和多利神社石燈籠 (No.195) 東側

竿部 (2面) 奉納 御神燈

基礎部 (5面) 明治十五年九月十九日

基礎部 (1面) 主顧 (2人) 本郷 吉

世話人 板橋源五郎

祐志人 金三円

小望 (右工門) 同 円五拾錢

基礎部 (2面) 同 板橋金右工門

同 円 本郷孫右工門

同 鈴木長五郎 同壹円

同 河原善吉 同五拾錢

同 小林繁之助 同小林金平

同 山地孫四郎 同五拾錢

同 本郷富右工門 我妻 (右工門)

同 小林金平 同板橋徳次郎

基礎部 (3面) 同本郷義助

No.26・27は仁和多利神社に奉納された一対の石燈籠である。宝珠、笠、火袋、中台、竿、基礎からなる。竿には「奉納 御神燈」、「明治十五年九月十九日」の年次が記されている。中台と基礎は平面形が六角形であり、中台には三面に草花文様が陽刻され、基礎には四面に主顧 (2人)、世話人、祐 (右) 志人、清道人、石工の名が記されている。

No.28は仁和多利神社の鳥居である。竿木に反りがあり、明神鳥居と呼ばれるものである(近藤一九七二)。柱は表面に粗い加工痕をそのまま残しているが、銘文が記される部分のみ平滑に仕上げられており、西側の柱に「大正八年旧九月十九日」の年次、東側の柱に「管神区 同「石工 塩釜町  
志賀清漸」と刻まれている。

No.31は稲荷神社境内の手水鉢である。「大正十四年/三月三十/大代/櫻井つ」と刻まれている。寄進したによれば、社殿の造営は大正十四年(一九二五)であり、この手水鉢に記されている年次は、社殿造営の約八カ月前のものである。櫻井某は、名前の一文字目が平仮名の「つ」となっていることから、女性の可能性がある。

同本郷喜人造

同郷吉三郎

同板橋篤造

基礎部（4面）

清造人

仙台土穂

梅津祐正

石工

山王

田原正義

27 仁和多利神社石燈籠（No.196）西側

竿部（2面）奉納 御神燈

（5面）明治十五年九月十九日

基礎部（1面）主<sup>(2)</sup>顧<sup>(2)</sup>人

本郷□□

世話人

板橋源五郎

有志人

金三郎

本郷貞吉

同 丙午拾錢

板橋勘四郎

同 丙

本郷源吉

同壹円

本郷貞治

同板橋篤造

基礎部（3面）

同小林三右工門

同本郷隆道

同五拾錢

我妻長次郎

同我妻善八

同本郷徳之助

同小林松次郎

同鈴木新造

同佐藤市蔵

山王

田原正義

同梅津祐正

仙台土穂

梅津祐正

28 仁和多利神社石鳥居（No.197）

（西柱）

大正六年旧九月十九日

石工塙釜町  
志賀清弥

（東柱）

竿袖区一同

29 仁和多利神社蟻立 (No. 254)  
(オモニア面)

発起人 一金五拾錢也本郷清治  
一金壹円也 板橋熊治全 板橋源五郎

板橋勘左工門全 本郷隆威  
全 吾妻善之照

寄附者

(ウラ面)

明治四十四年  
六月十五日建之

30 稲荷神社蟻立 (No. 253)

(東側)

奉 瞽和一年 神社復興主  
納 正月元日 寄附募集 本郷勝治

发起人

大友勇三郎

(西側)

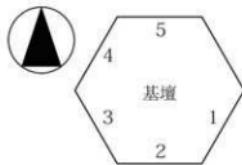
奉 瞽和一年 寄附募集人 大友のい  
納 正月元日 今募集中 本郷みゑ  
鎌田しつ

发起人

31 稲荷神社手水鉢 (No. 201)

大正十四年  
三月二十  
大代 櫻井つ

32 稲荷神社扁額 (No. 274)  
正一位休場五社  
稻荷神社



2	1
<p>納奉 御神證</p> <p>主願人 本郷口吉 世話人 祐志人 板橋源五郎 金三円 小禁口右工門</p> <p>同二円五拾錢 板橋金右工門</p> <p>同二円 河津善吉 同小禁源之助</p> <p>鈴木長五郎 同壹円 本郷孫右工門</p> <p>同山地孫四郎</p> <p></p>	<p>主願人 本郷口吉 世話人 祐志人 板橋源五郎 金三円 小禁口右工門</p> <p>同二円五拾錢 板橋金右工門</p> <p>同二円 河津善吉 同小禁源之助</p> <p>鈴木長五郎 同壹円 本郷孫右工門</p> <p>同山地孫四郎</p> <p></p>

S=1/8 0 30cm

5	4	3
明治十五年九月十九日 		
	<p>清道人 仙台土種 梅津祐正 石工 山王 田原正義</p> <p></p>	<p>同本郷富右工門 同五拾鍬 我妻□右工門 同小林金平 同板橋徳次郎 同本郷義助 同本郷喜久造 同郷古与三郎 同郷古徳治</p> <p></p>



2	1
	
	
<p>同二円五拾錢 板橋勘四郎 同二円 本郷源吉 同板橋源之允 本郷貞治 同小林三右工門</p> 	<p>主顧人 本郷世話人 板橋源五郎 有志人 金三円 本郷貞吉</p> 

S=1/8 0 30cm

5	4	3
明治十五年九月十九日		
	<p>山主 田原正義 石工 仙台區土種 梅津祐正</p>	<p>同本郷隆造 同小林水之進 同五拾錢 我妻長次郎 同本郷徳之助 同我妻善八 同小笠松次郎 同小笠松次郎 同鈴木新造 同佐藤市藏</p>



西側



東側



東側4面

太正八年旧九月十九日

笠 神 区 一 同

笠 神 区 一 同

石工塩釜町  
志賀清弥



S=1/8 0 30cm



(才モテ面)

寄附者

一金五拾枚也本郷清治

一金壹円也 板橋熊治全

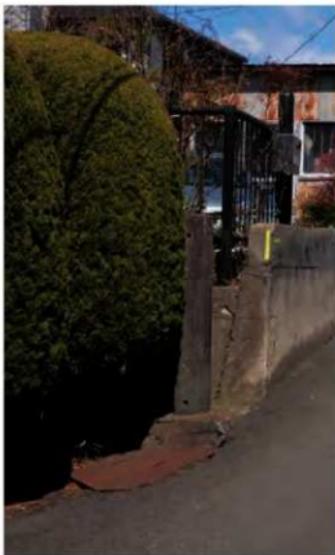
一金壹円也 板橋勘左工門全

吾妻善之原

全

(ウラ面)

明治四十四年  
六月十五日建之



(東側)

奉 照和二年 神社復興主  
納 正月元日 寄附募集

発起人

本郷勝治  
大友勇三郎

(西側)

奉 照和二年 寄附募集人  
納 正月元日 全募集人

大友のい  
本郷みゑ  
鎌田しつ



西側

大正一四年（一九二五）

大正十四年  
三月二十  
大代  
櫻井つ



S=1/8 0 30cm



正一位休場五社  
稻荷神社



## 六 顯彰碑・沿革碑

今回の調査において、顯彰碑一基、沿革碑二基を確認した。

### 1 解説

No.33は明治以降、西南の役、日清・日露戦争に従軍した笠神区民の忠義を表すため、明治維新から五〇年の年に建立された顯彰碑である。正面には、表題の「忠忠碑」の下に建立の経緯と、四言一二句の漢詩がある。表題の三文字は篆書体であり、陸軍中将樺澤静夫によると碑文冒頭に記されている。裏面には、戦役従事者名と本碑建立に係る寄附人名簿が記されている。「十年戦役」は明治一〇年の西南戦争、「二十七八戦役」は明治二七・八年（一八九四・一八九五）の日清戦争、「三七八戦役」は明治三七・三八年（一九〇四・一九〇五）の日露戦争のことである。

No.34は仁和多利神社の石鳥居建立の経緯を記した沿革碑である。正面には、表題の「昭徳神」の下に神社の沿革と石鳥居奉納のことを記し、その下には寄附人名を列記している。「石碑」は石段、「華表」は鳥居のことである。統いて四言四句の漢詩と大正九年（一九二〇）の年次があり、西園寺の呆徹ほか譲撰と結ばれている。現在境内にある石鳥居には「大正八年旧九月十九日」の年次が刻まれていることから、本碑はその翌年に建立されたと考えられる。石工はいずれも塩釜町の志賀清弥である。裏面には「昭和五十五年十月再建」とのみ刻まれている。本碑は、仁和多利神社が一時大代中峯の地（現在の柏木神社境内）に遷座し、昭和二十五年に現在地へ移転した際、中峯に取り残されたものである。昭和五年、柏木神社の石鳥居西側を整地した際に掘り出され、それを現在地に移設・再建したことと「昭和五十五年十月再建」と記したものである。

No.35は大正九年（一九二〇）の昭徳神碑（No.34）の再建に際し、仁和

多利神社の由緒を記した沿革碑である。棟札等を参考にしながら、神社の変遷を簡潔にまとめて記している。

### 祝文

33 仁和多利神社（No.198）

（オモテ面）

陸軍中将樺澤静夫閑下篆額

夫松島者日本三佳景之一而風光明媚頃勝雄大天下之人皆所知也方松島灣之一角有鹽竈港港之東隅者自我多賀城村

所知也方松島灣之一角有鹽竈港港之東隅者自我多賀城村

笠神區也區民醇素朴淳厚一鄉和團從古有良風美俗之稱隨

而忠人義士從此鄉現出者不勝所謂里仁者孔聖亦重之宜

忠 出此人明治戊辰以後或十年西南之亂或曰清之役或曰露之

戰笠神區之出身而樹功顯名盡忠子邦家者亦頗多世今茲大

忠 正六年一嘗明治維新之五十年紀區民相謀建表忠碑欲以慰

忠勇義烈之英魂遺其芳名于後世洵可謂美也余固信殉難

碑 之先士亦九泉之下有所感孚也嗚乎此佳景地而有此佳村佳

景添益佳村益養佳德以贊邦家之光輝可喜也矣然則一

序之貞石其功豈不大斗笠神區民需余文余感其高義不顧不

文記其概銘曰

曉我皇國 連綿作基 嘘此民士 誠忠為儀

燭和抱德 守節循規 邦國是泰 四方是維

笠神之里 一片此碑 後昆千歲 尚永為師

大正六年仲秋 衆議院議員 小山東助謹撰

## 十年戦役

## 二十七八年戦役

## 三十七八年戦役

## 同

一七七八年戦役軍天

本郷清治

我妻才右衛門

小野善右衛門

板橋熊治

本郷徳吉

本郷宗藏

板橋助之助

小林宿介

板橋源五郎

小野善之丞

小野善右衛門

板橋助左衛門

鈴木三郎

河野嘉吉

板橋助左衛門

板橋松

小林要助

板橋助左衛門

板橋源之丞

我妻貞吉

板橋助左衛門

板橋太郎

我妻新蔵

板橋助左衛門

板橋源太郎

本郷丑五郎

板橋助左衛門

板橋源太郎

板橋助十郎

板橋助左衛門

板橋源太郎

本郷金次郎

板橋助左衛門

板橋源太郎

佐藤又吉

板橋助左衛門

板橋源太郎

鈴木多利治

板橋助左衛門

板橋源太郎

佐藤丑藏

板橋助左衛門

板橋源太郎

小野勇助

板橋助左衛門

板橋源太郎

佐藤巳之吉

板橋助左衛門

板橋源太郎

小林清一

板橋助左衛門

板橋源太郎

我妻申治

板橋助左衛門

板橋源太郎

小林泰治

板橋助左衛門

板橋源太郎

鈴木七太郎

板橋助左衛門

板橋源太郎

丹下勇治

板橋助左衛門

板橋源太郎

小野富藏

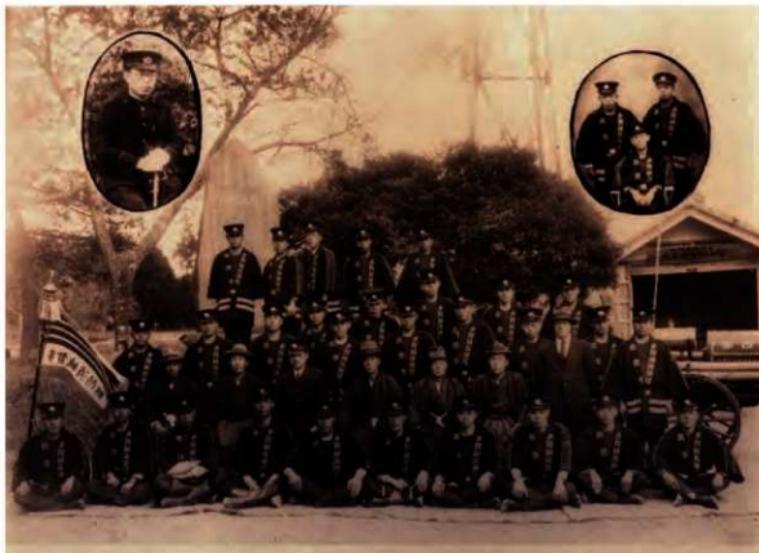
板橋助左衛門



才モテ面



ウラ面



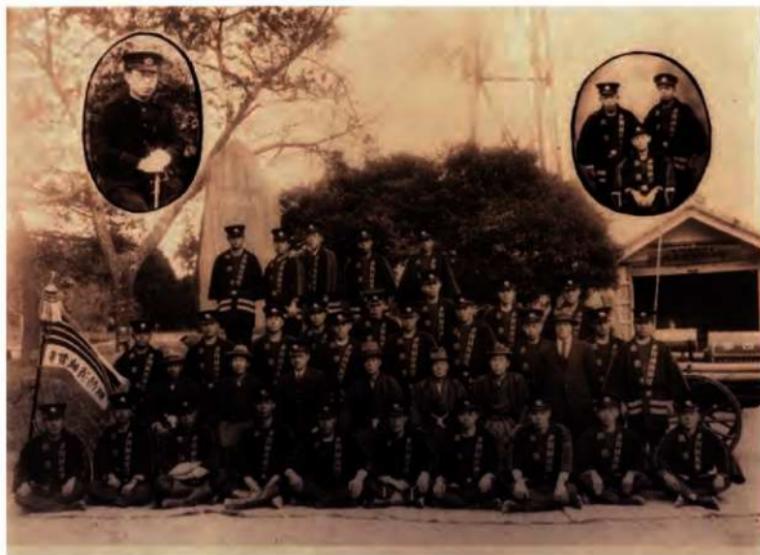
船塚にあった頃の忠義碑（昭和14年）



正面



裏面



船塚にあった頃の忠誠碑（昭和14年）

いう意味であろう。

No.42は九世切峯公の墓標である。

西園寺境内の東側に設けられた墓地の一角に歴代住職の墓域があり、一六基の墓標がコの字形に並んでいる（No.36～49）。また、境内の西側に集められた供養塔群の一角にも三基の墓標がある（No.50・51・53）。また、陸上自衛隊多賀城駐屯地内には、北側に丘陵部があり、その中に近世・近代の墓があり、墓標も残されている（No.54～59）。

### 1 解説

No.36は開山である大林宗茂和尚の墓標である。中央に「開山大林茂和尚之塔」とあり、三文字目を隠して大林茂と刻んでいる。その左側には「七月三日」と刻まれている。碑面の余白に不足はないが、没年は記されていない。ウラ面に「大梅仙林立之」と刻まれており、後年、中興で七世の仙林守席和尚がこの墓標を建立したことが分かる。

No.37は二世福庵楚満座元の墓標であり、この墓地の中では最も古い。臘月は一二月の異称。

No.38は三世藍田水座元の墓標である。念八日は「八日のこと」。

No.39は六世海印珠公首座の墓標である。廿八鳥の鳥は「日」のこと。この墓標は中世の板碑を転用しており、「印珠」の字の周囲に阿弥陀如來を表す種子「キリーケ」の残画が確認できる。

No.40は七世で中興の仙林守席大和尚の墓標であり、三文字目を隠して仙林廟と刻んでいる。二月十日に続く宗の文字は「寂」と考えられる。

No.41は八世龍水智願和尚の墓標である。三文字目を隠して龍水願と刻られており、この墓標が八代龍水智願和尚によって建立されたことが分かる。

No.42は九世切峯公首座の墓標である。廿八鳥の鳥は「日」のこと。この墓標は中世の板碑を転用しており、「印珠」の字の周囲に阿弥陀如來を表す種子「キリーケ」の残画が確認できる。

No.43は一四世笠郷傳公座元の墓標である。

No.44は一世虎嶽性調和尚の墓標である。三文字目を隠して虎嶽調と刻んでいる。

No.45は一四世笠郷傳公座元の墓標である。

No.46は一五世天瑞全止和尚の墓標である。三文字目を隠して天瑞止と刻んでいる。

No.47は一六世月叟宗圓和尚の墓標である。上部には「前住當山」「造建中興」「玉鳳塔主」の語句が三列に並んでおり、前住當山が前住職を示す定例句であることが知られる。「造建中興」の文字とはつながらないが、「明治一四年己亥新築」という一文は、その時期の堂宇新築を示すものと見られる。玉鳳塔主とは、臨濟宗妙心寺の最も古い塔頭玉鳳院の塔主を務めたという意味であろう。「丹波龍潭寺」とは、丹波国（京都府）の龍潭寺（京都府亀岡市）のことで、妙心寺第六世雪江宗深が廬を設けて大梅寺とした後、弟子特芳禪傑が移り住み開山した寺である。龍潭寺と月叟宗圓との関係は不明である。

No.48は一七世堺州宜明和尚の墓標である。頭部がやや丸みを帯びた方柱状を呈し、正面は柳形に窪めた中に「前玉／風／當山／堺州宜明長老禪師」、右側面には「明治卯十四年」、左側面には「九月七日示因」と年次を刻んでいる。堺州宜明の前は「前玉鳳當山」であり、玉鳳は妙心寺の塔頭玉鳳院のことと考えられる。「示因」の由は寂を表したと考えら



いう意味であろう。

No.42は九世切峯公の墓標である。

西園寺境内の東側に設けられた墓地の一角に歴代住職の墓域があり、一六基の墓標がコの字形に並んでいる（No.36～49）。また、境内の西側に集められた供養塔群の一角にも三基の墓標がある（No.50・51・53）。

また、陸上自衛隊多賀城駐屯地内には、北側に丘陵部があり、その中に近世・近代の墓があり、墓標も残されている（No.54～59）。

### 1 解説

No.36は開山である大林宗茂和尚の墓標である。中央に「開山大林茂和尚之塔」とあり、三文字目を隠して大林茂と刻んでいる。その左側には「七月三日」と刻まれている。碑面の余白に不足はないが、没年は記されていない。裏面に「大梅仙林立」と刻まれており、後年、中興で七世の仙林守廓和尚がこの墓標を建立したことが分かる。

No.37は二世福庵楚満座元の墓標であり、この墓地の中では最も古い。臘月は一二月の異称。

No.38は三世藍田水座元の墓標である。念八日は「八日のこと」。No.39は六世海印珠公首座の墓標である。廿八鳥の鳥は「日」のこと。この墓標は中世の板碑を転用しており、「印珠」の字の周囲に阿弥陀如來を表す種子「キリーケ」の残画が確認できる。

No.40は七世で中興の仙林守廓大和尚の墓標であり、三文字目を隠して仙林廟と刻んでいる。二月十日に続く宗の文字は「寂」と考えられる。

No.41は八世龍水智願和尚の墓標である。三文字目を隠して龍水願と刻んでいる。「前住当山大梅十世」は、当山の前住職で、大梅寺の十世とされる。前住當山大梅十世は、當山の前住職で、大梅寺の十世と

刻んでいた。

No.45は四世笠郷傳公座元の墓標である。

No.46は五世天瑞全止和尚の墓標である。三文字目を隠して天瑞止と刻んでいた。

No.47は六世月叟宗圓和尚の墓標である。上部には「前住當山」「造建中興」「玉鳳塔主」の語句が三列に並んでおり、前住當山が前住職を示す定例句であることが知られる。「造建中興」の文字とはつながらないが、「明治一四年己亥新築」という一文は、その時期の堂宇新築を示すものと見られる。玉鳳塔主とは、臨濟宗妙心寺の最も古い塔頭玉鳳院の塔主を務めたという意味であろう。「丹波龍潭寺」とは、丹波国の大梅寺（京都府龜岡市）のことで、妙心寺第六世雪江宗深が廬を設けて大梅寺とした後、弟子特芳禪傑が移り住み開山した寺である。龍潭寺と月叟宗圓との関係は不明である。

No.48は七世堺州宜明和尚の墓標である。頭部がやや丸みを帯びた方柱状を呈し、正面は柳形に窪めた中に「前玉／風／當山／堺州宜明長老禪師」、右側面には「明治卯十四年」、左側面には「九月七日示因」と年次を刻んでいた。堺州宜明の前は「前玉鳳當山」であり、玉鳳は妙心寺の塔頭玉鳳院のことと考えられる。「示因」の由は寂を表したと考えら

40 西園寺(No.2220)

(才モ子面)

享保十六辛亥

中興仙林廓大和尚

二月十日宗

(ウラ面)

小師龍水立之

41 西園寺(No.2222)

元文元年丙辰

前往當山大梅子世龍水魁和尚

七月十四日

42 西園寺(No.2223)

延享五年

圓福第一座功峰薰公坐元塔(請化)

三月初六日

43 西園寺(No.2224)

安永三年

前往當山大梅薰德益州虎和尚

正月十一日

44 西園寺(No.2225)

天明四年甲辰歲

前往當山虎鑑訓和尚

十二月三日

36 西園寺(No.231)

(才モ子面)

開山大林茂和尚之塔

七月三日

(ウラ面)

大梅仙林立之

37 西園寺(No.218)

延享五年

福庵<sup>法名</sup>清座元禪

臘月廿二日

38 西園寺(No.219)

元禄十一年丑

口福第一座藍水座元禪市

十一月念八日

39 西園寺(No.221)

享保廿卯年

海印珠公首座塔

三月廿八鳥

45 西園寺 (No. 226)

文化八〇年

前  
當山圓額第一座立鄉傳公坐元

住  
文久三癸亥年

十月三日

46 西園寺 (No. 227)

明治廿一年三月八日示寂法子堺州建立

前住當山天瑞止和尚

七月初三日

47 西園寺 (No. 229)

明治十五年十月十九日

前住當山

造建中興 月望示圓長老和尚

玉鳳塔主 明治十四日新築

丹州龍潭寺之徒

48 西園寺 (No. 228)

(才モ子面)  
前玉

鳳飛州宜明長老禪師  
當山

(右側面)  
明治卯十四年

(左側面)  
九月七日示寂

49 西園寺 (No. 230)

明治廿六年迄一千八百五十三年  
周穆王五十三壬申二月十五日

南無釋迦牟尼佛塔 (請花)

前住地福前善應重興惠舟和尚  
明治廿一年三月八日示寂法子堺州建立

50 西園寺 (No. 212)

享保六年  
(地藏菩薩立像)

十一月五日

51 西園寺 (No. 214)

正徳四年  
○淨夢淨定門

十月九日

52 西園寺 (No. 217)

寛保五年

(地藏菩薩立像)

九月六日

53 西園寺 (No. 213)

水口信士  
(地藏菩薩立像)

(正面)

西園寺 (No.231)

(正面)

享保十六辛亥

中興仙林廓大和尚

二月十日宗

(裏面)

七月三日

(裏面)

大梅仙林立之

(裏面)

小師龍水立之

元文元年丙辰

前往當山大梅子世龍水魁和尚

七月十四日

福庵<sup>延喜五年</sup>造

座元禪

臘月廿二日

延喜五年

圓福第一座功峰薰公坐元塔 (請化)

三月初六日

福第一座藍水座元禪市

十一月念八日

安永三年

前往當山大梅顯德益州虎和尚

正月十一日

海印珠公首座塔

三月廿八日

天明四年甲辰歲

前往當山虎嶽調和尚

十二月三日

45 西園寺 (No. 226)

文化八〇年

前當山圓額第一座立鄉傳公坐元

住 十月三日

文久三癸亥年

前住當山天瑞止和尚

七月初三日

西園寺 (No. 227)

明治廿六年迄千八百五十三年

周穆王五十三壬申二月十五日

南無釋迦牟尼佛塔 (請花)

前住地福前善應重興惠舟和尚

明治廿一年三月八日示寂法子堺州建立

享保六年

正徳四年

○淨夢禪定門

十月九日

西園寺 (No. 214)

西園寺 (No. 229)

明治十五年十月十九日

前住當山

造建中興 月望示圓長老和尚

玉鳳塔主 明治十四己亥新築

丹州龍潭寺之徒

西園寺 (No. 228)

明治卯十四年

水口信士

前玉

鳳飛州宜明長老禪師

當山

(右側面)

九月七日示寂

49 西園寺 (No. 230)

明治廿六年迄千八百五十三年

周穆王五十三壬申二月十五日

南無釋迦牟尼佛塔 (請花)

前住地福前善應重興惠舟和尚

明治廿一年三月八日示寂法子堺州建立

西園寺 (No. 212)

享保六年

（地藏菩薩立像）

十一月五日

西園寺 (No. 214)

正徳四年

○淨夢禪定門

十月九日

西園寺 (No. 217)

寶保五年

（地藏菩薩立像）

西園寺 (No. 213)

九月六日

西園寺 (No. 213)

正徳四年

（地藏菩薩立像）

西園寺 (No. 213)

正徳四年

（地藏菩薩立像）

西園寺 (No. 213)

正徳四年

（地藏菩薩立像）

西園寺 (No. 213)

正徳四年

54 丸山 (No.232)

羽林村山郡小吳村政

天保十二年歲子曰

(ア) 権大僧都海上

一月三日 笠神村  
佛林金

55 丸山 (No.233)

天保十四卯年 行年四十六才

(ア) 鐵心秋道清覺信士

壬午九月八日

宮城今右工

56 丸山 (No.234)

文久三年亥年

(バン) 秋山早世信士  
九月一日□當

57 丸山 (No.235)

○萬峯玄利信  
宝曆二年申坐

十一月廿五日

58 丸山 (No.236)

天明四年辰夫

○松翁妙清信女(請化)

八月十日

59 丸山 (No.237)

明治三年十月八日

○冬雲翠方信女  
秋月無量信女

同年九月八日

78 西園寺 (No.275)

□靈巖子

(觀音菩薩立像)

享和六年正月八日

79 西園寺 (No.276)

(觀音菩薩立像)

80 西園寺 (No.277)

(觀音菩薩立像)

大梅仙林立之



開山大林茂和尚之塔

七月三日



S=1/8 0 30cm





福庵楚滿座元禪  
延宝五年  
臘月廿二日

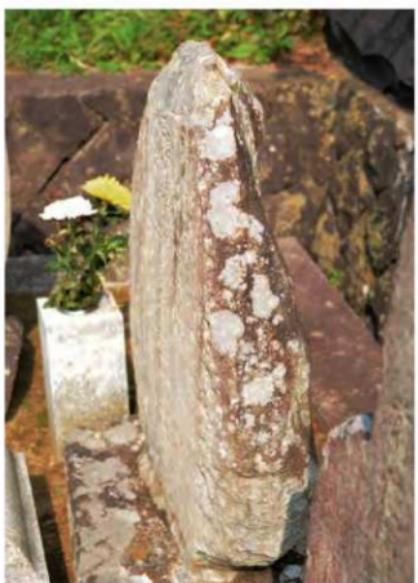
延宝五年





S=1/8 0 50cm

□福第一  
一座藍水座元禪市  
元禄十□丁丑  
十一月念八日



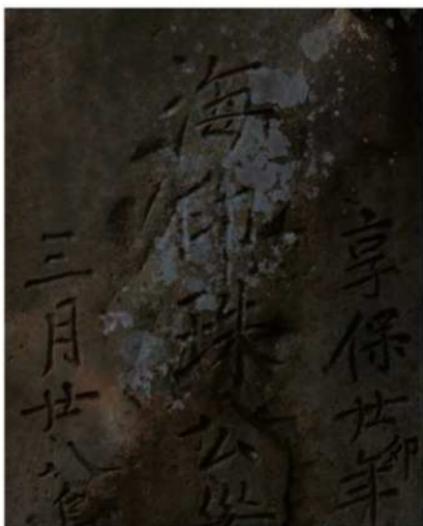


S=1/8 0 50cm

享保廿八年

海印珠公坐塔  
三月廿八日

三月廿八日



50cm

S=1/8 0



二月十日宗

中興仙林廓大和尚

享保十六辛亥

二月十日宗

中興仙林廓大和尚

享保十六辛亥



小師龍水立之





S=1/8 0 30cm



前住當山大梅十世龍水魁和尚

元文元年  
辰丙

七月十四日





S=1/8 0 50cm

安永三  
甲午年

前住當山大梅陽德益丹虎和尚

正月十一日



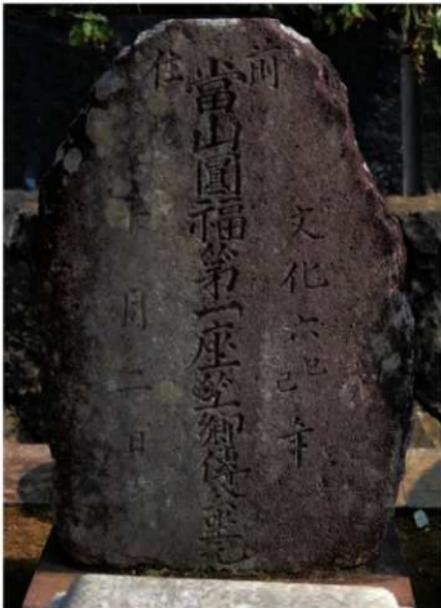
前住當山虎嶽調和尚  
十二月三日

天明四年甲辰歲





S=1/8 0 50cm



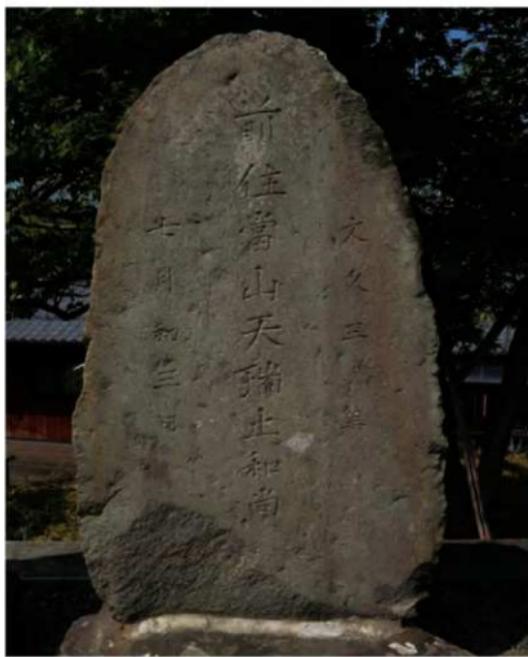
文久三年（一八六三）



S=1/8 0 50cm

前住當山天瑞止和尚  
文久三年正月三日

文久三年正月三日





明治十五年九月十九日

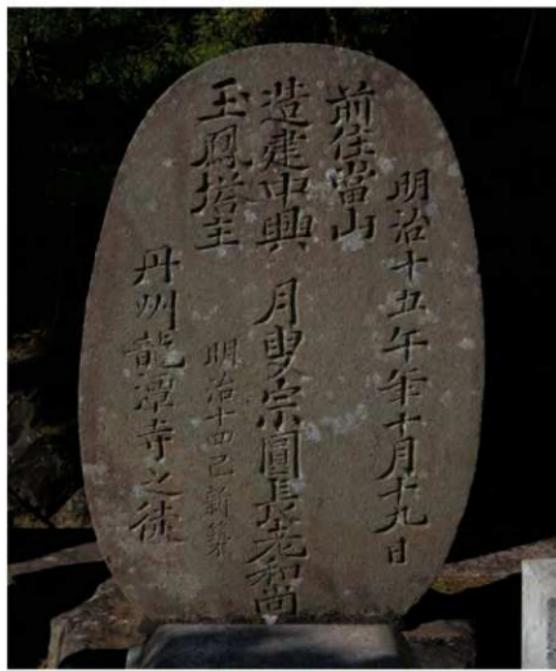
前住當山

建造中興 月叟宗圓長老和尚

玉鳳塔主

明治十四年新鑄

丹州龍潭寺之徒



明治卯十四年

前玉

鳳堯州宜明長老禪師  
當山

九月七日示爾



S=1/8 0 30cm



明治廿六年迄三千八百五十三年  
周穆玉五十三壬申二月十五日

# 南無釋迦牟尼佛塔

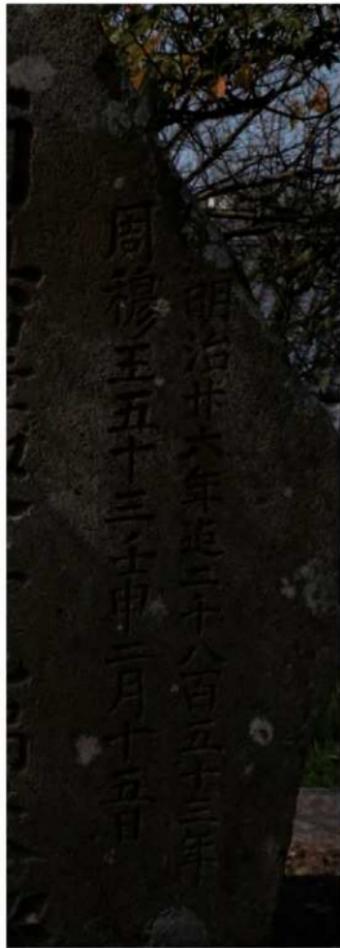
前住地福前善應東興惠舟和尚  
明治廿一年丙戌八日寂法子堯州造立

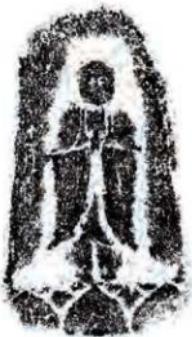
南無釋迦牟尼佛塔  
(請花)

明治廿六年迄二千八百五十三年  
周穆玉五十三壬申二月十五日

前住地福前善應東興惠舟和尚  
明治廿一年三月八日示寂法子堯州造立

0 50cm  
S=1/8





S=1/8 0 30cm

享保六年  
(地藏菩薩立像)  
十一月五日





S=1/8 0 30cm

○  
淨夢禪定門  
正徳四年  
十月九日





寛保二年  
(地藏菩薩立像)  
九月六日





S=1/8 0 30cm

水□自□信土力  
(地藏菩薩立像)





S=1/8 0 30cm



丸  
耀  
大僧都  
禪海上  
天保十一子歲千日  
羽州村山郡小泉村政  
二月三日 笠神村  
佛林金



S=1/8 0 30cm

丸山

(ア)

天保十四  
卯年

行年四十六才

鐵心秋道清意信士

壬  
九月八日

宮城今右工



文久三年  
秋山早世信士  
九月一日  
立

文久三年  
秋山早世信士  
九月一日

S=1/8 0 30cm





S=1/8 0 30cm

宝曆二年十一月廿五日

○善峯玄利信





S=1/8 0 30cm

天明四  
甲辰天

○松月妙清信女  
(請花)

八月十日





S=1/8 0 30cm

○  
冬岩慧方信女  
秋月無量信女  
(請花)  
同年九月八日

明治三年九月八日



## 第六節 棟札・寄進札

仁和多利神社には、元禄一二年（一六九九）から平成一九年までの、一四点の棟札が保管されている。その中には、「時合祀されていた須賀神社と笠石明神の棟札も各一点含まれている。これらはすべて資料化したが、昭和四年（一九六九）以降の棟札については、個人情報保護のため、仮文及び図版等への掲載を控えたものがある。

稲荷神社には現在の社殿の建設に関わる寄進札があり、堂宇東壁に打ち付けられている。

### 1 解説

No.1は元禄一二年（一六九九）の仁和田里権現宮建立の棟札である。オモテ面とウラ面が使用されており、ウラ面はさらには「回にわたり追記されている」。オモテ面は、頭部に丸、その下に主文が記されている。「仁和田里権現宮」は元禄一二年当時の本社の名称である。主文の両側にある「聖主天中天迦陵頻仰聲哀愍衆生者我等令敬禮」の偈頌は、「法華經」卷第三化城喻品第七にあるもので、棟札に使用される偈頌の中では最も多いという（水藤二〇〇五）。正遷官師明性院宥陽については、大代村の修驗來宝院が、開院の来宝坊永順から明性院永春、来宝院正永、明性院永応、来宝院永全と続く中で、来宝院と明性院の道号を交互に名乗っていることから、来宝院の修驗者であった可能性がある。ただし、開院から五世までは「永」字が通字となっている点に相違がみられる。また、大工は八幡村の伏谷作左衛門、木引は円山の成澤五郎七となつている。円山は笠神村の丸山と見られ、いずれも、当時鶴ヶ谷にあつた本

社の近隣から招集したことが知られる。下方には組頭一名、御百姓一七名、小人九名の交名がある。小人は雜役従事者のことである。

ウラ面は、文字の配列、字画の大

きさ、墨の濃淡から一面に三時期（A

↓B→C）の願文が記されている。

A期「オモテ面とセツトになるものである。頭部に一字金輪仏頂尊を表す種子ボロン、その下にある「

切日皆善一切宿皆賢諸佛皆威德

／羅漢皆行満以此誠實言願我成

吉祥の偈頌は、仏式の棟札に特に多いとされている（財團法人文化財

建造物保存技術協会一九八九）。

左側には金剛界大日如来の種子「バン」に続けて水天真言が記されている。

水天は仏教における天部の一人

で水の神であり、その下の「御宮水

性火滅祈所」とともに火伏せの呪文

として記されたものであろう。「火

字が小さく書き分けられているが、

このような事例には、火災への恐れ

から、祈禱文、偈頌等の諸文言の内

表4 来宝院関係資料

風土記書出			供養塔・棟札		
開院	来宝坊永順	承応1（1652）	開院		
二世	明性院永春		明性院宥性	元禄12（1699）	仁和多利神社棟札
三世	来宝坊正永		賴宝院	享保8（1723）	船塚名号塔
四世	明性院永応		賴宝院	享保12（1727）	西園寺墓地名号塔
五世	来宝院永全	安永3（1774）	48歳	明性院宥口	文政11（1821）
				明性院永順	明治4（1871）
					仁和多利神社棟札

「火」と「災」の文字は脇に寄せて小さく書いているものがあるという指摘がある（財團法人文化財建造物保存技術協会一九八九）。

B期・宝永七年（一七二〇）の堂宇建立の棟札である。A期の偈頌と真言の間に年次と主文、右下に遷宮使者、左下のA期の行間に大工と法主の名が記されている。

C期・元文四年（一七三九）の堂宇および鳥居建立の棟札である。左下の、A・B期の願文等の余白に年次と主文、その下に肝入、大工、組頭等の名が記されている。大工と組頭の間にある「頬宝院」は、笠神村およびその周辺においては見出すことができないが、西園寺大代墓地の

享保八年（一七三三）の名号塔、船塚の享保二年（一七二七）の名号塔にその名が刻まれており、享保年間から元文年間にかけて存在したことが確認できるものである。頬宝院と漢字表記は異なるが、ライの音が通じる「来宝院」が大代村にあり、同院は安永三年（一七七四）の書出に、承応元年（一六五二）の開院から五世に至る歴代が書き出されているなど、両者が同時代に存在したことなどが確認できる。仁和多利神社がある笠神村と大代村は隣接した位置関係であることなどを考え合わせれば、両者は同一の可能性がある。

No.2は文政一年（一八一八）の普替の棟札である。オモテ面に主文、

表5 棟札・寄進札一覧表

番号	図版	表題	年代	法量 縦×横×厚mm	備考
仁和多利神社					
1	1	奉建立仁和田里 権現宮一字	元禄12年	1699	963×369×11 ウラ面 に追記 ウラ面 に追記
		奉建立	宝永7年	1710	
		奉建立	元文4年	1739	
2	2	奉萱替御本社	文政11年	1828	542×144×14
3	3	奉建立仁和田里 神社一字	明治4年	1871	1030×334×13
4	4	願座仁和多利神 社岩附修繕一字	明治11年	1878	1017×304×7
5	5	奉納仁和多利神社 御拝殿新築	昭和32年	1957	910×191×23
6	7	奉仁和多利神社 本殿拝殿修繕	昭和44年	1969	912×302×28
7	8	奉仁和多利神社 由諸碑建立	昭和55年	1980	906×255×27
8		奉納御興廟堂本 殿屋根葺替	昭和58年	1983	801×298×22 ウラ面 に記載 ウラ面 に記載 ウラ面 に記載
		社名入り幟長さ 十五尺一対 社名入り幟長さ 六尺一対	昭和58年	1983	
		幟立一対	昭和58年	1983	
		社地土留工事	昭和59年	1984	
9		奉翁犬一対	平成13年	2001	846×300×31
10		社名入り幟一対	平成18年	2006	756×241×30
11		奉仁和多利神社 本社殿並に拝殿 本殿屋根葺替	平成19年	2007	948×303×28
12	6	上棟奉新造宮都 社仁和多利神社 拝殿一字	不明		790×209×17
13	9	願座須賀神社雨覆 修繕	明治23年	1890	605×188×10
14	10	願座仲明社笠石明 神一字	明治37年	1904	600×210×15
稻荷神社					
15	11	稻荷神社祈願所	大正14年	1925	200×460×7
西園寺					
16	13	報恩西園講堂文武 道場草創	昭和9年	1934	不明

ウラ面は頭部に一字金輪仏頂尊の種子「ボロン」、その下に年次、遷宮師、仮肝入、村組頭、御守師の名が記されている。

No.3は明治四年（一八七一）の仁和田里神社建立の棟札である。オモテ面のみ記載されている。主文の「仁和田里神社」の表記の右に「仁和田里権現御改」とあり、明治になつて権現号が廢され、神社という表記になったことを示している。右側に年次があり、その下に「旧明性院永順

改神主本郷勝源友幸」とある。明性院から神主への変更は、明治政府による修驗示廢止令公布（明治五年）の前年ではあるが、全国的な神仏分離の影響を受けたものであろう（林一〇〇一）。主文の脇には「大

庄屋」、「庄屋」の記載があり、従来の「肝入」という表記から変化している。左側にある西園寺月叟は西園寺一六世である。  
No.4は明治一年（一八七八）の岩階（石段）修繕に係る棟札である。オモテ面に主文、ウラ面には修繕に出資した四二名の名簿と金額が列記されている。オモテ面に「正遷宮祠掌」とあるが、祠掌という表記はこの時期から見られる。

No.6は仁和多利神社拝殿新造に係る棟札である。オモテ面上部に大きく「上棟」の文字がある。ウラ面には「奉齋」の文字の下に五柱の神名が記されている。中央の産土大神は土地の守護神であり、家船豊受比咩神（やぶねのくみのかみ）と家船豊受比咩神（やぶねのとようけひめのかみ）は家屋の守護神、手置帆負神（たおきほおいのかみ）と彦挟知神（ひこさしりのかみ）は建築や祭器製作の神である。

No.9は明治三年（一八九〇）の須賀神社雨覆修繕の棟札である。雨覆とは建物等が直接雨にあたることを防ぐ覆いのことであるが、具体的にどの部分の修繕かは不明である。オモテ面に主文と「天壤無窮／國家

保穏」とある。ウラ面には上部中央に「祭神」「ひふみ」「ひふみ」とあり、その右に「氏子保護疫病避除之」、左に年次が記されている。「ひふみ」「ひふみ」は建速須佐之男神であり、日文（ひふみ）という文字により、一一文字が二行にわかつて記されている。「壇」は三種の神器の一つである八尺瓈勾玉の意味もあるが、ここでは印章一般をさす言葉で、「祭神 建速須佐之男神の印」という意味と考えられる。神道様式の棟札である。

No.10は明治三七年（一九〇四）の神明社笠石明神に關わる棟札である。オモテ面に主文、ウラ面上半部に年次と願文、下半部に正遷宮である社掌本郷勝と信徒惣代人三名の名が記されている。

No.11は稻荷神社の寄進札である。笠神、大代、下馬の有志七名が、社殿建設のため出資した旨が記されている。

## 2 日文が記された棟札について

明治三年の須賀神社雨覆修繕の棟札（No.13）において、「祭神」の文字に統いて記されている記号状の文字は日文である。日文は、一般に神代文字と称される漢字以前から存在したとされる文字の一つであり、『国史大辞典』では「日本語を表記する固有の文字（の一種）として、古代に存在したと想定される（主張されている）文字」とされている。江戸時代末期、平田篤胤は各地に伝わる日文を集成して「神字日文傳」を著した（平田篤胤全集刊行会一九七八）。須賀神社雨覆修繕棟札の日文は、その中の、対馬國のト部であつた阿比留家に伝わった文字等を参照して「たけはやす／さのおのかみ（建速須佐之男神）」と判読したものである。

現在、神代文字については、国語学の立場から否定されているが、その歴史的位置づけに問題があるのであり、平田篤胤が研究を始めたといつて「天保二年（一八三二）以前、神代文字などと称される文字が既に存在していたことは、篤胤の研究から明らかである。神代文字の歴史的評価と作成された年代観とは別問題として論じられるべきと考えられる。

日文が記された歴史資料としては、徳島県脇町（現 美馬市）において「日文形棟札」が一二点確認されている。年代的には明治三年（一八七〇）から明治三九年（一九〇六）にかけてのもので、すべて、八幡神社宮司を務めた二宮正胤が上棟の際に廟主となつたものに限定されるという。脇町では四六点の棟札が確認されており、その中で「日文形棟札」は特異な存在となつている（脇町教育委員会「一九八七）。

県内において、日文が記された歴史資料としては、「縣社金華山神社祈禱守符」（石巻市）と「クエラツカ碑」の二件が知られている。前者は、



第13図 対馬国ト部阿比留家に伝来  
した日文 『神字日文伝』上巻を編集)

県内の資料三点についてみると、須賀神社兩覆修繕棟札は祠掌として本郷勝治が閲わっており、「クエラツカ碑」は御崎神社の神主が印刻したとされている。金華山神社の祈禱守符は当然のことながら金華山神社が作成したものである。徳島県脇町の「日文形棟札」がすべて八幡宮宮司二宮正胤によって作成されたという事実も考え合わせるならば、いずれも神職の閲与が認められる。



縣社金華山神社祈禱守符（千々和 2010 より）

明治五年（一八九二）にイギリス人のバジル・ホール・エンバレンが収集したもので、ピットリバース博物館所蔵となっているものである。「御守札」と表書きされた包み紙の中に、守符と一緒に入っている紙片に、「しな□まひこのおほかみ」と読める文字が二行にわたって記されています（千々和 二〇一〇）、□□彦大神と神名を記したものと見られる。後者は、唐桑半島の先端にある御崎神社境内にある。近くに文化七年（一八〇〇）と天保七年（一八三六）の「鯨塚」碑があり、この碑も「クジラツカ」碑を意図したものと考えられる。紀年銘はなく、印刻者は御崎神社の神主としているが明確な根拠は示されていない（唐桑地区石碑研究会 二〇一二）。この碑については、落合直澄が『日本古代文字考』（明治二一年刊）において、阿波字（日文の一つ）が記された古碑として紹介している。

治二一年刊）において、阿波字（日文の一つ）が記された古碑として紹

1 仁和多利寺社棟札  
(オモテ面)

正遷宮師明性院陽

笠神組頭 五兵衛 小人  
御百姓 次衛門

于時元禄十二年

卯年

奥州仙台宮城郡立神村

肝煎本郷氏 九郎右衛門

松右衛門

傳三郎 久左衛門

甚三郎 勘四郎

克右衛門

八幡村大工伏作左衛門

門山三郎

次右衛門 久右衛門

平藏

孫右衛門

聖主天中天 遊賈頻伽聲

同都

円山住木引成澤五郎七

権三郎 茂四郎

平藏

壬奉建立 仁和田里権現宮

一宇當村安生處

松本氏彦太郎

三郎左衛門

大左衛門

長右衛門

哀歎業生者 我等合敬禮

川野氏茂左衛門

助兵衛

岳左衛門

平六郎

九月晦日

西園寺守

母兵衛

平六郎

母兵衛

母施主本郷松右衛門

所之就成願請

(ウラ面)

和昌房 北條市之助 本郷次郎助延寶  
遷宮守者 岩木房 □□□□郎 本郷七三郎則房

一切日吉善 一切宿禰賢 諸佛皆威徳  
(求口一ノニ) 羅漢直行滿 以此誠實言 願我成吉祥  
奉建立

于時宝永七年閏十一月十三日當村安主之所敬白  
奉建立

右八遷宮依然御稟札加子  
簡野長之助利房 法主欽言

大工 法主

簡野彦内

法教房

元文四年九月十九日  
鳥居共

奉建立村二字

大工 藤右衛門  
太郎兵衛

肝人

源太郎衛門

頼寶院

組頭

与三郎衛門

組頭

源太郎衛門

(パン オン ボ □ □ ユ □ カー) 御宮水性火滅所

(オモニア面)

今上皇帝國上安穩

御上屋

奉宣教御本社

村中

五穀成就御武運長久

御口足力  
如意折

萬民豐饒

安主

(ウラ面)

于時文政十二年  
九月吉日

遷宮帥明性院法印有□

村組頭

善八

正五郎

権四郎

假肝入等神邑

松右工門

御守師

與左工門

(才モ子面)

于時明治四辛未年

旧明性院永順改

神主本郷勝衡友幸

同村組頭

一 本郷米工門

本郷民吉

大庄屋

一小林三右工門

本郷貞治

宮城郡笠神村

小野源之助

小野勇吉

本郷貞吉

小野清工門

小野金平

板橋源五良

山地久三良

小林金蔵

山地久三良

小林大吉

小林金蔵

本郷運吉

本郷仲吉

鈴木三良工門

奉建立仁和田里神社一宇當村安全處

庄屋

板橋金石衛門

板橋重藏

鈴木新藏

河野直記

本郷養助

本郷仲吉

本郷孫工門

御郡大工棟梁

鈴木新藏

我妻源治

八幡村

鈴木門藏

我妻善右衛門

大庄屋

鈴木門藏

板橋徳十良

本郷孫工門

鈴木門藏

西園寺守月叟

本郷孫工門

鈴木門藏

三月廿八日

(ウラ面)  
文字なし

(才モノ面)

## 正遷宮祠掌

天上無窮 百穀成就

陸前国宮城郡立神村

鎮座仁和多利神社岩崎修繕一字  
明治十一寅年九月十有二日

國土安穩 氏子安全

同 □ 本郷勝治 氏子四十三戸

同 □ 本郷降藏

世話人当村

石上彌金 鈴木庄吉

(才ラ面)

金圓 金圓

小野善右衛門

金七拾五錢

板橋金右衛門

金拾五錢

板橋勘四郎

金七拾五錢

小野源之助

金七拾五錢

本郷源吉

金七拾五錢

鈴木清五郎

金七拾五錢

本郷孫右衛門

金八拾五錢五厘

山路四郎

金五拾五錢

本郷貞治

金五拾錢

小林三右衛門

同五拾錢

小林重三郎

同五拾錢

本郷養助

同五拾錢

板橋徳藏

同五拾錢

我妻長十郎

同五拾錢

我妻善右衛門

同五拾錢

河野文次

同五拾錢

佐藤嘉造

金貳拾五錢

井内叟

金貳拾五錢

鈴木新蔵

本郷勝治

同貳拾五錢

同貳拾五錢

河野文次

同貳拾五錢

同貳拾五錢

同貳拾五錢

同貳拾五錢

同貳拾五錢

同貳拾五錢

同貳拾五錢

同貳拾五錢

金拾錢

若左勇彌

同九錢六厘

大堀直隆

松木景良

同拾錢

菱沼行信

後山丑松

同九錢六厘

作間盛顕

同六錢三厘

我妻惣次郎

同拾錢

同拾錢

同拾錢

同拾錢

金五錢

鄉吉德治

菊地善吉

同拾錢

(才モ子面)

奉 設計者 松本吉太郎 棟梁 松本彦志 墓金市山ノ寺

棟札 仁和多利神社御拝殿新築 納 上棟 昭和三十二年十二月十八日 大日

大工 佐藤酉松 千田忠男 高橋 進

屋根工事者 鈴木憲藏

(才モ子面)

建設委員長 板橋隆吉 委員 我妻正雄

委員 板橋鶴三 森 肇

我妻深松 平山幸吉

我妻盛次 大塙長寿

板橋勘四郎 松戸 信

板橋勘三郎

8 仁和多利神社棟札

(才モ子面)

板橋勘左衛門

板橋勝治

板橋源之丞

小野清吉

等神青年

小野久藏

等神團長

板橋隆吉

同鈴木新三郎

同鈴木新三郎

牛生區長

鈴木多利治

東海林惣三郎

大代青年

高橋政之助

本郷善次郎

上棟奉新造營部社仁和多利神社拝殿一字

氏子継代

鈴木門藏

平山惣治郎

本郷馨

等神區長

板橋隆吉

同本郷清五郎

等神團長

小野清吉

等神青年

同鈴木新三郎



0  
S=1/5 30cm

(オモテ面) 報國寺西園寺講堂文武道場草創

(ウラ面)

朱雀

現住 沙門進妙心 果 微外

青龍

執事 陸軍騎兵少尉正八位伊東親一

皇風永扇常遇昌

宮城縣農林技手 板橋眞太郎  
本郷道輔

奉請

真如實際常住三寶

陸軍砲兵特務曹長熱八等小野久藏  
工事主任 獅七等 小野清吉  
發願主陸軍一等軍醫正 勳四等 坂定義謹白  
護持 陸軍歩兵大尉正七位坂 英毅  
同 一等軍醫正七位坂 優爾天下太平國士安穩  
昭和九年 戊年 東宮殿下初薦諸節上棟東北醫科大學講師 坂 猶典  
肝人 大正棟梁 訓導 中山定治  
副棟梁 同 鈴木養之助 同 清人

玄武

白虎

功五級 従五位



0 30cm  
S=1/5

一切日皆善  
一切宿皆賢  
諸佛皆威德

法主欽言

五

真言  
遷宮使者御宮堂  
大聖所

遷宮使者

和昌房  
北棲市之助本鄉次郎助延賢  
岩木房  
□□□□能本鄉七三郎田房

鷹野長之助利房

右八遷宮依為使者御棟札加于

一切日皆善  
一切宿皆賢  
諸佛皆威德

法主欽言

奸入  
華右衛門

大工  
鷹野彥内

法主  
法教房

元文四年九月十九日

奉建立村  
一宇

大工  
大藏兵衛

組頭  
寶院

火  
御宮水性

滅祈所

組頭  
御守門

奉建立  
于時宝永七年閏十一月十二天省村安全之所  
敬白

大工  
鷹野彥内

法主  
法教房

元文四年九月十九日

奉建立村  
一宇

大工  
大藏兵衛

組頭  
寶院

火  
御宮水性

滅祈所

組頭  
御守門

真言

羅漢皆行滿

以此誠實言  
願我成吉祥

大工  
鷹野彥内

法主  
法教房

元文四年九月十九日

奉建立村  
一宇

大工  
大藏兵衛

組頭  
寶院

火  
御宮水性

滅祈所

組頭  
御守門



0  
S=1/5 30cm



三月廿八日

西園禪寺月叟

西園禪寺月叟

板橋金右衛門

板橋出藏

所就之成願諸

奉建立仁和田里神社一宇當村安全處

于時明治四年未年

神主本鄉勝胤友幸  
宮城郡笠井村  
大庄屋  
本郷貞吉

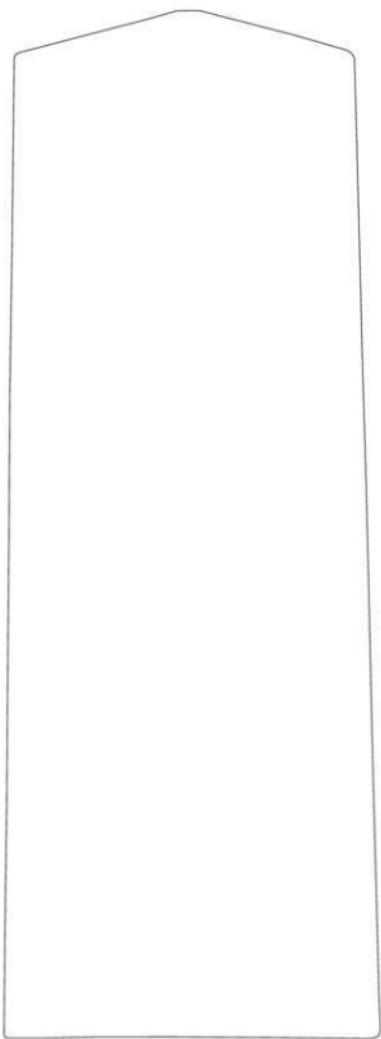
同村組頭

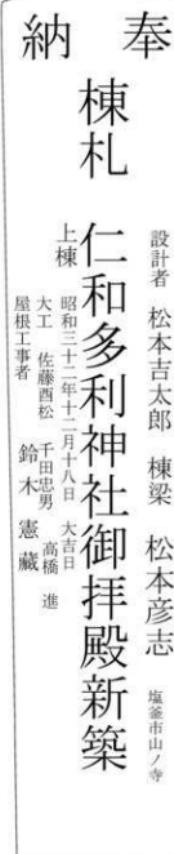
本郷貞吉





0 30cm  
S=1/5





0  
S=1/5 30cm





0  
S=1/5 30cm

建設委員長

李良長

委員長

李良長

委員正雄

李良長

板橋隆吉  
板橋喜三  
板橋喜一  
板橋喜二  
板橋喜四  
板橋喜五  
板橋喜六

森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉

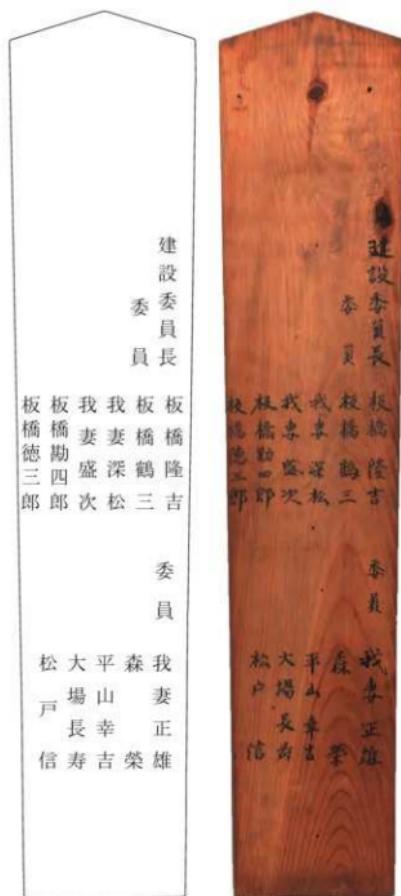
建設委員長

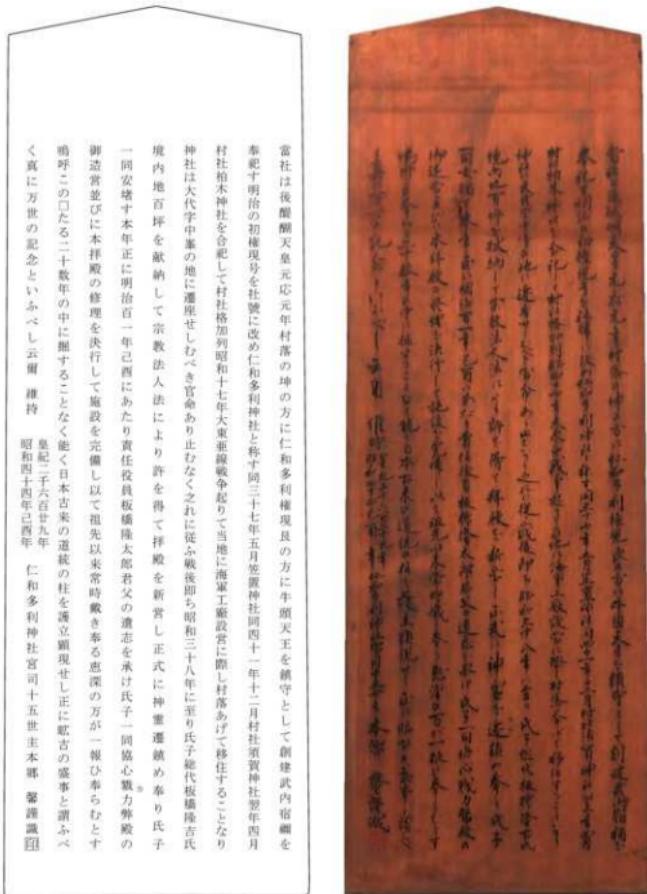
板橋勘三郎  
板橋勘四郎  
板橋勘五郎  
板橋勘六郎  
板橋勘七郎  
板橋勘八郎  
板橋勘九郎

委員長

大平山幸吉  
大平山幸吉  
大平山幸吉  
大平山幸吉  
大平山幸吉  
大平山幸吉  
大平山幸吉

森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉  
森平山幸吉

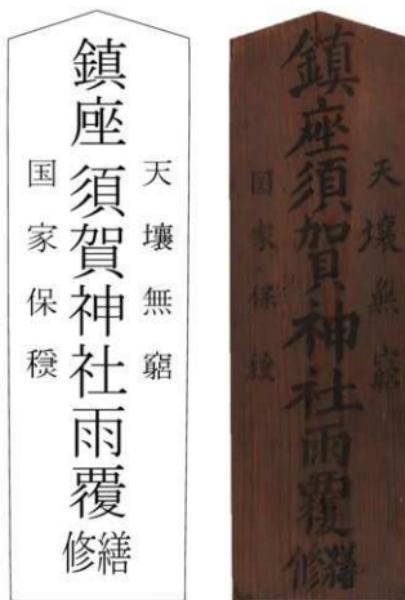




30cm

0  
S=1/5





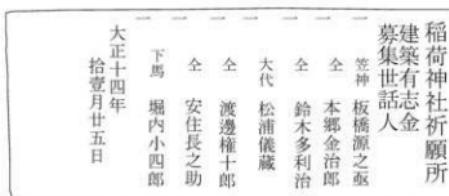
0 30cm  
S=1/5





0  
S=1/5 30cm



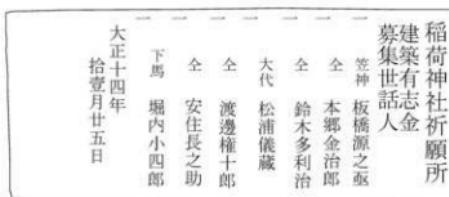


0 30cm  
S=1/5



仁和多利神社

縮尺不明





仁和多利神社



縮尺不明

青龍

朱雀

皇風永扇帝道遐昌

奉請 真如實際常住三寶

發願主陸軍幸富士及安政護白

天下太平 國土安穩

昭和九年東宮殿下初夏蒲節上株

白虎

駕入

大工棟梁

同清人

青龍

朱雀

皇風永扇帝道遐昌

奉請

真如實際常住三寶

天下太平 國土安穩

昭和九年  
成年

東宮殿下初夏蒲節上株

玄武

白虎

肝入  
副棟梁

同清人  
調導  
東北醫科大學講師  
中山定治  
踏木義之助

發願主陸軍二等軍醫正 坂定義謹白

現住  
執事

工事主任

護持  
陸軍砲兵特務少尉正八位  
官城縣農林技手  
同五位

小野清吉  
坂英毅  
同第一等軍醫正七位  
坂英毅  
同大工棟梁  
同清人

沙門準妙心  
吳徵外  
伊東親一郎  
本鄉清輔  
坂英毅  
同大工棟梁  
同清人

同五位

同大工棟梁  
同清人

## 第七節 民俗

### 一 地域の概要

#### 1 人口と行政区

笠神村は、現在の鶴ヶ谷・丸山・黒石崎・陸上自衛隊多賀城駐屯地、塩釜市の牛生など広範囲に広がる村であった。昭和一八年（一九四三）の海軍工廠設置に関わる移転や、昭和二四年（一九四九）に塩釜市へ一部地区的編入があり、人口・行政区ともに大きく変化している。ここでは、旧笠神から多くの家屋が移転し、鎮守である仁和多利神社の祭祀を行っている笠神西・東区の人口をまとめるとしている。この地区の人口は、平成二八年一月三一日時点で四四六二人となっており、これは同じ月の多賀城市の人口の約七パーセントにあたる。



図 14 笠神の行政区

表 6 笠神の世帯数と人口

	世帯数	人口		
		男	女	計
笠神西	723	888	910	1,798
笠神東	988	1,327	1,337	2,664
計	1,711	2,215	2,247	4,462

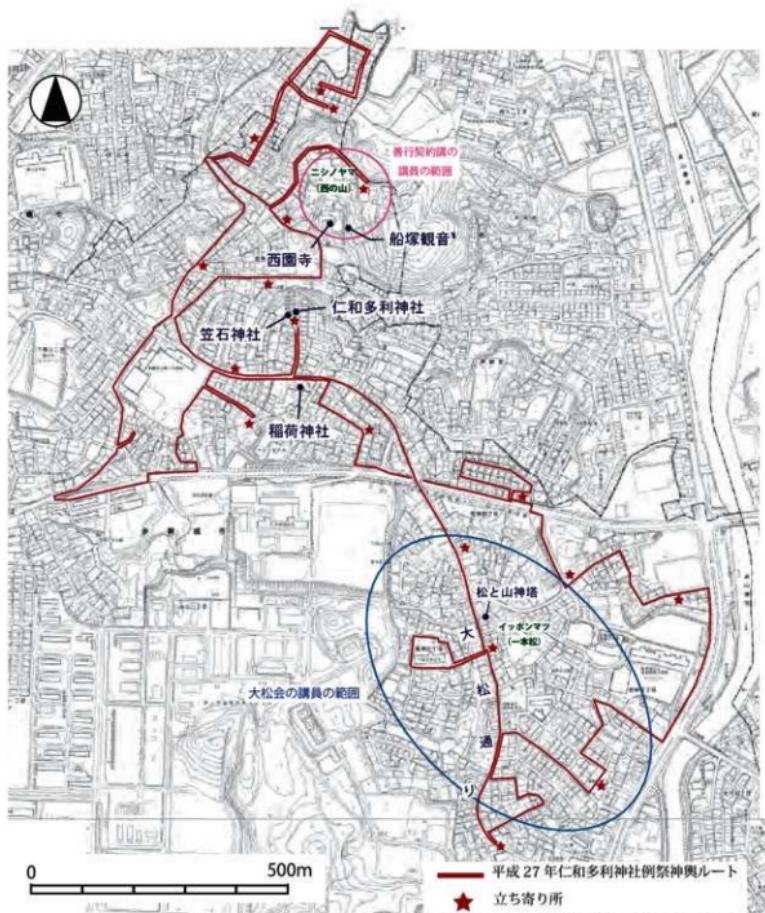
（平成 28 年 1 月 31 日時点 市民経済部市民課記録係  
「住民基本台帳人口集計表」を基に作成）

### 2 地域の移り変わり—海軍工廠建設と笠神—

昭和一八年（一九四三）に多賀城海軍工廠が設置され、火工部の建設予定地になった笠神では、村落の大半の土地が買収された。旧笠神は、現在の鶴ヶ谷・丸山・陸上自衛隊多賀城駐屯地を中心広がっていた村落であり、多賀城の中でも比較的財力のある家が多い地域として知られていたという。昭和一七年（一九四二）以降家屋の移転が始まり、笠神の人々は土地を求めて各地へと移つて行った。下馬や、かつて花立や牛生と呼ばれた笠神一丁目を中心とした地域に多くの家が移り、上ノ台にあつた仁和多利神社、西園寺も、現在はこの地域に移転している。また、現在の笠神で使われている屋号は、旧笠神時代からのものがほとんどであり、当時の家の位置、特徴を現在に伝えている。

#### \* 屋号

- (1) 家屋の位置や方向によるもの  
ウツシヨノイ（後の家）、ヒガシノイ（東の家）
- (2) 家屋の特徴によるもの  
アカカベ（赤壁）
- (3) 地名によるもの  
コザワ（小澤）
- (4) 家の新旧によるもの  
シンタク（新宅）
- (5) 職業によるもの  
シヨウユヤ（醤油屋）



第15図 笠神地区民俗調査関連図

# 旧笠神

③

## 船塚の石碑の話

笠神の今の自衛隊の中に船塚つてあったんだよね。そして、そこに石碑が立ってて、なんか明治生まれの人たちは、そこを通る時は頭を下げて通ったんだね。

(大正11年生まれ 女性)



現在は仁和多利神社にある念忠碑  
『懷鄉史抄 古里の笠神を訪ねて』p. 17



④

## 念仏橋の話

昔このあたりに侍がいたったんださ。その女中さんがね、何をしたんだか、その刀で切られたんだって。その人の幽靈がそこ念仏橋に出るんだって。ほのために、気持ち悪いから、そこさ念仏あげたんだと。して、念仏橋になったんだって。

(昭和6年生まれ 男性)



念仏橋

『多賀城町誌』p. 693

『懷鄉史抄 古里の笠神を訪ねて』p. 39 の住居図を基に作成

**①**

移転前の西園寺

## 墓の移転の話

うちでも一番小さい弟、2年生で死んだんだ。俺は手伝わなかつたけども、俺の親が(弟の)棺桶振って。(遺体は)まだすっかり腐っていねえの。それでトタンを家から持つて行って、ほして下さ火焚いて。半分腐っていたことだから、そのまま持つてこられないから、その上で焼いて、骨だけ(移転先の墓地に)持ってきて、そして後埋めたの。

(大正13年生まれ 男性)

**②**

## サエノカミ（西の神）の話

(その場所は)とにかく夕方なんかに水を汲みに行くとか、朝に少し早く薄暗い時なんかに行くとなんとなく体がサワッとする感じはするのね。で、そこに神様あったんだって言うんだけど、お宮だのは何にもない。藪みたいな杉の木があがってて、してこっちは高い石山で、そこの縄道を入って行って、畑の中に井戸があって、その水を生活に使ってたんだから。ただ、ここサエノカミだっていうので、私はそこを通って歩くから、正月とかお祭りとかって言う時には、赤飯焼いて、そこさあげてくるんだね。藪の中き置いてくるわけ。そういうことはしてましたね。

(大正11年生まれ 女性)



サエノカミの近くにあったとされる石山の一部



下馬

八幡

## 二 人々のつながり

### 1 契約講

#### (1) 大松会

笠神東区の人々によって組織されていた契約講である。大松会の大松とは、東区にあった松の大木や、そこから南東に延びる大松通りから名付けられたものであるという。この会は昭和三五年（一九六〇）に二戸によって結成された。その後、東区の住宅増加に伴って講員も増えていき、多い時には四戸近い家が加入していたという。平成に入り、講員による大松会の利用が少なくなったことから解散の機運が徐々に高まり、平成二六年の総会で、会長の後任者を選出できなかつたことをきっかけに、解散が決定された。この時の講員数は一八戸であった。

大松会の組織には、名譽会長・会長・副会長・会計・監事・幹事といった役が置かれ、任期は二年であったが、再任も認められていた。講員は三班に分けられ、この班が活動の基本的な単位になっていた。班にはそれぞれ当番が置かれ、メンバーは、定期的に変わることもなく、固定されていた。

主な活動内容は、毎年一月の集まりと葬儀・結婚式の手伝いであった。集まりは、結成から一九年間は講員の自宅を会場にして行っていた。会場になる家をヤド（宿）と呼び、ヤドでは集まつてくる講員たための御馳走を準備した。出される料理に決まりはなかつたが、刺身・煮魚もしくは焼き魚、お吸いものなどが出されたという。参加者は男性であることが多い、男性的都合が悪い場合は代わりにその妻が出席していった。二〇回目の総会から、宿泊施設などを利用する移動総会になり、講員の自宅を利用することはなくなつた。

#### 大松と山神塔

笠神東にはかつて松の大木があり、この松は大松会の名前の由来にもなっている。大松の根本には、山神塔が一基立っていたとされており、信仰の場にもなっていた。現在は1月14日に各地でどんど祭が行われ、神社に正月飾りを納める家が多いが、以前は屋敷内の「アキの方」にある木に飾りを納めていた。屋敷内に木がない家では、この大松に納めていたとされている。東区の住民に親しまれていた大松であるが、いつの頃か切り倒され、現在は残っていない。山神塔も移動され、柏木神社の境内に納められている。

大松の根本にあったとされる山神塔



葬儀の手伝いに関しては、大松会が発足した昭和三五年にはすでに葬儀屋が関与するようになつていて、自宅で行うことが多く、同じ班の人たちが手伝っていた。結婚式に関しては、昭和の中頃までは近隣の店を会場にして行うことが多く、米客の上着を預かるなどの仕事を担当していたという。その頃は、講員全員が招待を受けていたが、昭和の終わり頃になると、講員の家でお祝い事があつても役員数名が招待される程度になつていった。これらの大松会の利用は平成に入ると少なくなり、会の解散へと繋がつていった。

## (2) 善行契約講

旧笠神や旧沖区から、西園寺の周辺に移転してきた人々によって組織されていた契約講である。講帳によると、結成されたのは昭和二三年（一九四八）であり、結成当時の講員数は九戸であった。その後も講員数の大きな変化ではなく、講員の高齢化、会館での葬儀の普及などの理由で平成一五年前後に解散した時には八戸で活動していたという。善行契約講には講長が一人置かれており、その役は西園寺の住職が務めていた。

主な活動内容は、毎年三月三日に行われる集まりと、講員の家で不幸があつた時の手伝いである。集まりには一戸から一人が参加し、男性が出ることが多かった。当番にあたっている家を会場にして行われ、その家をヤド（宿）と呼んだが、いつの頃からか近隣の店で行うようになり、その後は西園寺の会館に集まるようになつていったという。

葬儀に関しては、家で葬式をしていた頃はその家に手伝いに行つたり、親戚などに不幸を知らせるシラセ（知らせ）といった役や受付を契約講で担当していた。しかし、葬儀社を利用した会館での葬儀が増え、契約講の出番は少なくなつていった。解散直前の頃は、契約講から花輪をあげるくらいであつたといふ。

## 2 信仰に関わる講

### (1) 観音講

西園寺周辺の家の女性たちで組織されており、観音が描かれた掛軸を拝む講であつたとされている。昭和三〇年（一九五五）に嫁いできた女性によると、嫁に来た時には姑が加入しており、一二三名の女性たちが活動していたという。その後、徐々に人数は減り、平成一八年以前に解散した時の講員は五名であった。

主な活動内容は、毎年三月一七日に行われた集まりである。一戸から一人の女性が参加し、講で所有している掛け軸を拝み、御詠歌をうたつた。当初は講員の自宅に集まつておらず、当番にあたつた家をヤド（宿）と呼んで一年ごとに当番をまわしていた。ヤドの女性は、当日の二・三日前から講員の家を訪ね歩き、講の集まりが近いことを知らせながら米を集めてしまつたといふ。ヤドでは、味付けご飯スープコ汁・煮付けといった精進料理が振舞われていたが、いつの頃からか出前をとつたり、掛け軸を拝んだ後に近隣の店で食事をするようになつていったといふ。

### 観音講の話

ニシノヤマ（西の山）の人たちうんと（とても）働きから、一年に一回くらいの人たちだけて休めたらどうかって。和尚さんが掛け軸を持って来て。2～3日前に次のヤド（宿）の人が米と会費みたいのを集めて、そして3月17日にみんなで（ヤドに）寄つて、お茶飲み会っていうのかね。

（昭和8年生まれ 女性）

## (1) 仁和多利神社

仁和多利神社は等神西・東の二区を中心に信仰されている神社であり、祭神は武内宿禰之命である。現在はかつて花立と呼ばれた笠神一丁目の住宅地の中に鎮座しているが、当初は旧笠神の上ノ台にあり、そこから確認できるだけで二回の移動が行われている。回目の移動は昭和一八年（一九四三）のことであり、海軍工廠建設に伴う集団移転のためであつた。明治四二年（一九〇九）に大代の柏木神社と牛生の須賀神社を合祀していたこともあり、移転先には大代中峯の戸主会の共有地が提供された。二回目の移動は昭和二五年（一九五〇）であり、柏木神社、須賀神社を分離し、仁和多利神社のみで現在地に移ってきた。この時に移動させたのは本殿のみであり、拝殿は柏木神社の拝殿として中峯に置いて来たとされている。その後仁和多利神社の拝殿は、昭和三三年（一九五七）に造営され、この年が正式な遷宮の年とされている。

神社の組織には、責任役員・総代・世話役という役があり、それぞれ西区と東区からほぼ同じ人数が選出される。責任役員とは、責任役員会長と責任役員副会長のことであり、責任役員会長が神社の代表になつている。

祭日は旧暦九月一九日である。以前はこの日に行われていたが、昭和五八年（一九八三）に神輿が奉納されて以降、多くの人が参加できるようになり、一〇月第三日曜日に固定された。この日は柏木神社の神職による祈祷が行われ、神輿渡御では一八か所にも及ぶ地点で祝詞が上げられる。上ノ台にあつた頃には、熊糞を用いて釜の湯を周囲にかける湯立て神事が行われていたという。

仁和多利神社には百日咳平癪の御利益があるとされている。祈願の際には、神社にある鳩が描かれた絵馬を一つ借りてきて、お礼参りの時に二つにして返す。昭和三〇年代までは多くの絵馬が奉納されていたが、現在そのような祈願をする人の姿は見られない。また、この鳩に関するものとして、中谷地の鹿踊りを笠神に入れはいけないとする話がある。移転前の笠神と中谷地は、砂押川を挟んで隣り合っていた。この鹿踊りが笠神に入ると、絵馬にも描かれて神聖視されている仁和多利神社の鳩が、鹿に驚いて逃げてしまうとされている。

## 湯立神事の話

釜さ火焚いてね、そいづを拝み終わってから、煮立ってるお湯をかぶるんだね。最後に（宮司が）倒れるまで。倒れたら（宮司を）お宮さ運んで、終わり。そしてから部落の役員たちが、一段下に集まる建物があって、そこで赤飯だなんだって御馳走もらつて。そこさ行くと、我々も赤飯もらつたりして、食べたりして。

（大正11年生まれ 女性）



昭和中期の仁和多利神社



奉納された絵馬

仁和多利神社の

一年

1月

14日 どんと祭



第3日曜日 新年祈願祭



4月

第3日曜日 観桜会

10月

第3日曜日 例祭



## (2) 西園寺

笠神・大代・下馬地区を中心に、多くの檀家を抱える臨済宗妙心寺派の寺院である。山号は黄龍山であり、現在の住職で一九代目となつてゐる。海軍工廠建設に伴い、昭和一八年（一九四三）から終戦までの間に、旧笠神の上ノ台から現在地に移動した。西園寺跡地には、現在でも移動しきれなかつた墓標が残つており、萬靈塔を中心に一か所に集められてゐる。

寺の組織に関しては、檀家は全員花園会の会員になつており、その取りまとめとして責任役員が置かれている。この責任役員で組織される総代会というものがおり、住職を含めた六名が寺の運営にあたつてゐる。所の下には、花園会地区役員と呼ばれる役があり、約五〇名の役員が活動をしている。それ以外にも、寺には青年年部があり、五〇～七〇歳代の男性たちが加入している。

また、以前は寺の御詠歌の組織である無相教会があり、寺庭が指導者となつて約二五名の女性たちが活動をしていて。この無相教会が組織された以前から、御詠歌をうたう集まりがあり、念佛講と呼ばれたこの講が、無相教会の前身であるとされている。無相教会が解散した現在では、元無相教会のメンバー一〇名が御詠歌同好会として活動を続けており、月に一回西園寺に集まつて練習をしている。

西園寺では一年を通して様々な行事が開かれている。中でも五月の大回向、秋季法要、大みそかの除夜の鐘の三つの行事には、地域から多くの人が集まる。五月の大回向が一番古い行事であるとされており、当日は御詠歌同好会による御詠歌もうたわれる。



念佛講とされる写真



御詠歌同好会練習風景



西園寺跡に残る墓標

西園寺の

一年

2月

15日 仏涅槃会

4月

8日 仏誕生会

5月

4日 大回向



9月

彼岸近く 秋季法要

12月

8日 成道会

31日 除夜の鐘



※主な行事。この他にも座禅会等、様々な行事が行われる。

### (3) 笠石神社

仁和多利神社の境内にカサイシサマ（笠石様）と呼ばれる神社があり、社殿の中には大きな石と石の祠が納められている。「笠神」の地名の由来を、この笠石神社に求める説もあり、地域の歴史と関わりの深い神社である。『仁和多利神社 還宮五十式年祭記念 鎮守暦』には、明治三七年（一九〇四）に仁和多利神社に合祀されたとの記録があるが（神社役員会 二〇〇七）、その後も笠石神社は仁和多利神社とは別にあつたとされている。

笠石神社は、旧笠神の上ノ台、西沢のあたりにあつたとされており、当時は現在のような社殿ではなく、石の祠や大きな石をカサイシサマとして信仰していたという。そこから確認できるだけで二回の移動が行われている。一回目は、海軍工廠に伴う集団移転に関連するもので、昭和一九年（一九四四）であつた。家屋の移転が一段落したこの頃、神社のベツトウ（別当）を務めていた後山家の男児が急に体調を崩し、その原因を確かめるために拝み屋を訪ねた。すると、笠石神社の神が「自分も一緒に（移転先に）連れて行ってほしい」と訴えていると伝えられた。また、『懐郷史抄 古里の笠神を訪ねて』によると、この時に「三月二八日の祭りをしてほしい」という言葉もあつたとされており、その後、後山家では大石と石の祠を移動させ、祭りを欠かさないことを約束したという（板橋 一九九七）。祠は、野田の玉川に架かる大土手橋の西側にあつたとされる、ヘビイシ（蛇石）という大きな岩の南面に祀られた。大石は、その重さのためにヘビイシまで運ぶことができず、後山家の屋敷の裏に安置したとされている。二回目の移動は平成一四年であり、二か所に分かれていた大石と祠は、仁和多利神社の境内へと移された。これを機に、

笠石神社の祭祀は、後山家の手を離れ、笠神地区全体で行うこととなつた。

祭日は三月二八日であり、『多賀城町誌』に載っている奉納された幟の写真（第二章 第四節 参照）にもこの日にちが見える（多賀城町誌編纂委員会 一九六七）。当日は、大石と石の祠の二か所に赤飯を供えて拝んでいた。現在は、仁和多利神社の祭日に社殿の扉を開け、一緒に拝まっている。後山家で管理していた頃には、祭日以外にも正月には注連縄を張り、家族が食べるよりも先に大石と祠に餅を供えたという。



笠石神社



社殿の中の祠と大石

(4) 稲荷神社

笠神二丁目の住宅地の一角に稲荷神社があり、「五社稲荷」や「休場のお稲荷さん」と呼ばれ、信仰を集めている。現在は、近隣の女性たちによつて管理されているが、それ以前は近くの家で鍵の管理や供物の準備を行つていた。その後、この家で管理していくことが難しくなつたため、五年ほど前から近隣の六〇～八〇歳代の女性たちが集まつて、稲荷神社の管理、祭りを行うようになった。

祭日は四月二九日である。当日は塙竈市のお稲荷神社の神職による祈祷が行われ、約一〇名の女性たちが集まる。また、一二月一五日前後には大祓が行われ、この日も祓ヶ崎稲荷神社の神職が訪れる。

祭日以外にも毎月一日と一五日には社殿の扉が開けられ、数名の女性が集まつてくる。お参りの後、社殿の中で各自持ち寄つた料理を広げて会話を楽しむ時間が持たれており、五社稲荷は地域の女性たちの憩いの場になつてゐる。また、五社稲荷は商売繁盛の御利益があるとされており、近隣住民以外の参拜者も多い。昔は、特に塙竈の尾島町で働く女性たちが参拝に訪れる姿が目立つてゐたという。



平成 27 年 12 月 20 日の神事の様子

(5) 船塚観音

西園寺の境内に観音堂があり、船塚観音と呼ばれている。この観音堂は旧笠神の船塚と呼ばれる小高い山の上にあつたものであり、海軍工廠建設による移転の時に現在地へと運ばれた。『懷郷史抄 古里の笠神を訪ねて』によると、祭日は九月一九日であつたとされているが(板橋一九九七)、現在は西園寺の秋季法要の時に拌まれている。西園寺の無相教会があつた頃には、祭日に御詠歌があげられていた。



船塚にあった頃の観音堂

## 第三章 下馬村

### 第一節 地理的・歴史的環境

#### 一 地理的環境

旧下馬村は、現在の行政区では下馬一～五丁目にあたる。旧下馬村は、現在の行政区では下馬一～五丁目にあたる。

鹽竈神社への参宮に際し留守氏、大崎氏、葛西氏なども下馬したこと

が地名の起源であるとしている。

下馬村が明確に史料上に見出せるのは近世になつてからである。仙台藩家臣の中で、下馬村との関わりが深いのは芦立氏である。六〇間四方の田宅（在郷屋敷）を賜り、下馬で明治維新を迎えていたが、実際に下馬村に居住し始めた時期については不明である。

下馬村は、安永三年（一七七四）の風土記御用書出によれば、家数二軒、男女都合一人と記されており、西屋敷という屋敷地に住んでいたといふ。芦立氏やその家中等は含まないとしても、耕地に対して人口の少なさは否めない状況であった。

下馬村は、安永三年（一七七四）の風土記御用書出によれば、家数二軒、男女都合一人と記されており、西屋敷という屋敷地に住んでいたといふ。芦立氏やその家中等は含まないとしても、耕地に対して人口の少なさは否めない状況であった。

下馬村は、安永三年（一七七四）の風土記御用書出によれば、家数二軒、男女都合一人と記されており、西屋敷という屋敷地に住んでいたといふ。芦立氏やその家中等は含まないとしても、耕地に対して人口の少なさは否めない状況であった。

下馬村は、安永三年（一七七四）の風土記御用書出によれば、家数二軒、男女都合一人と記されており、西屋敷という屋敷地に住んでいたといふ。芦立氏やその家中等は含まないとしても、耕地に対して人口の少なさは否めない状況であった。

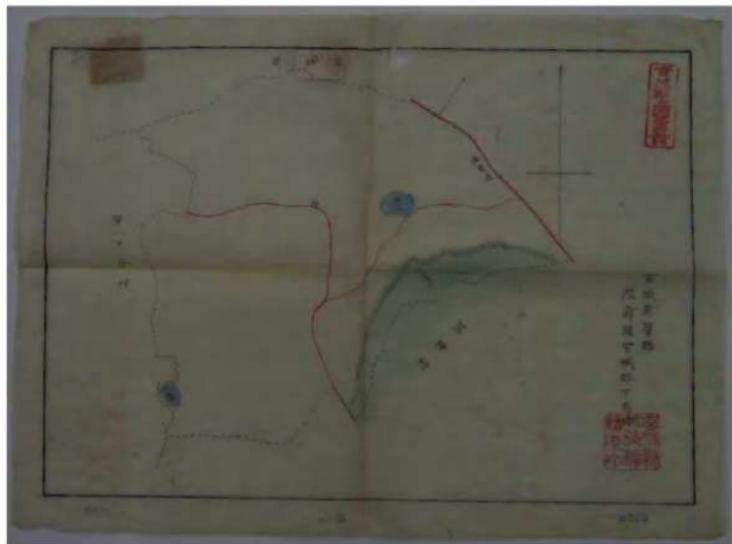
#### 二 歴史的環境

下馬村の中世以前の歴史については資料がない。しかし、吉田東伍は『大日本地名辞書 奥羽』の中で、留守系譜に、下馬の名義を解きたる一節ありとして次のように記している（吉田 一九〇二）。

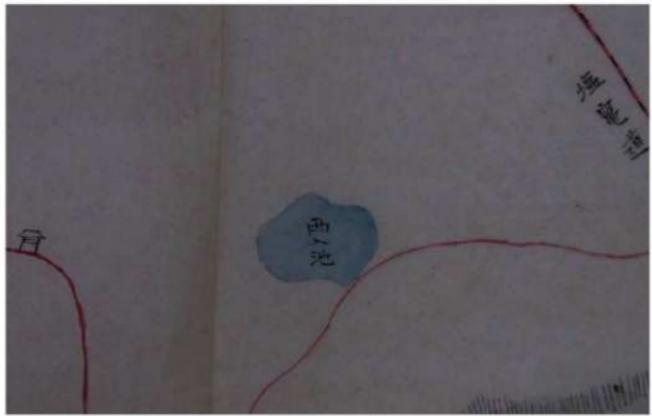
（略）往古、当家鎮守鹽竈宮之事者、家景高森在城以来、為大旦那、毎年七月十日祭礼、規式重賛、參宮捧御幣、旧礼也、神領社家領、至政

所であったが（三塚 一九三三）、昭和一七年（一九四二）笠神に海軍工廠が建設されると、工員住宅が建設されて住宅地として急速に開発が進んで行つた。

第二節 地図と写真に見る地域の変化



陸前国宮城郡地誌附図宮城縣管轄陸前国宮城郡下馬村 宮城県図書館蔵 (29.5 × 40cm)



同上 (部分)

12 宮城郡  
下馬村

陸前國宮城郡  
下馬村

田

道  
川原  
村境

通  
大堤場

南

油

草  
屋

柏

柏

井

内  
外

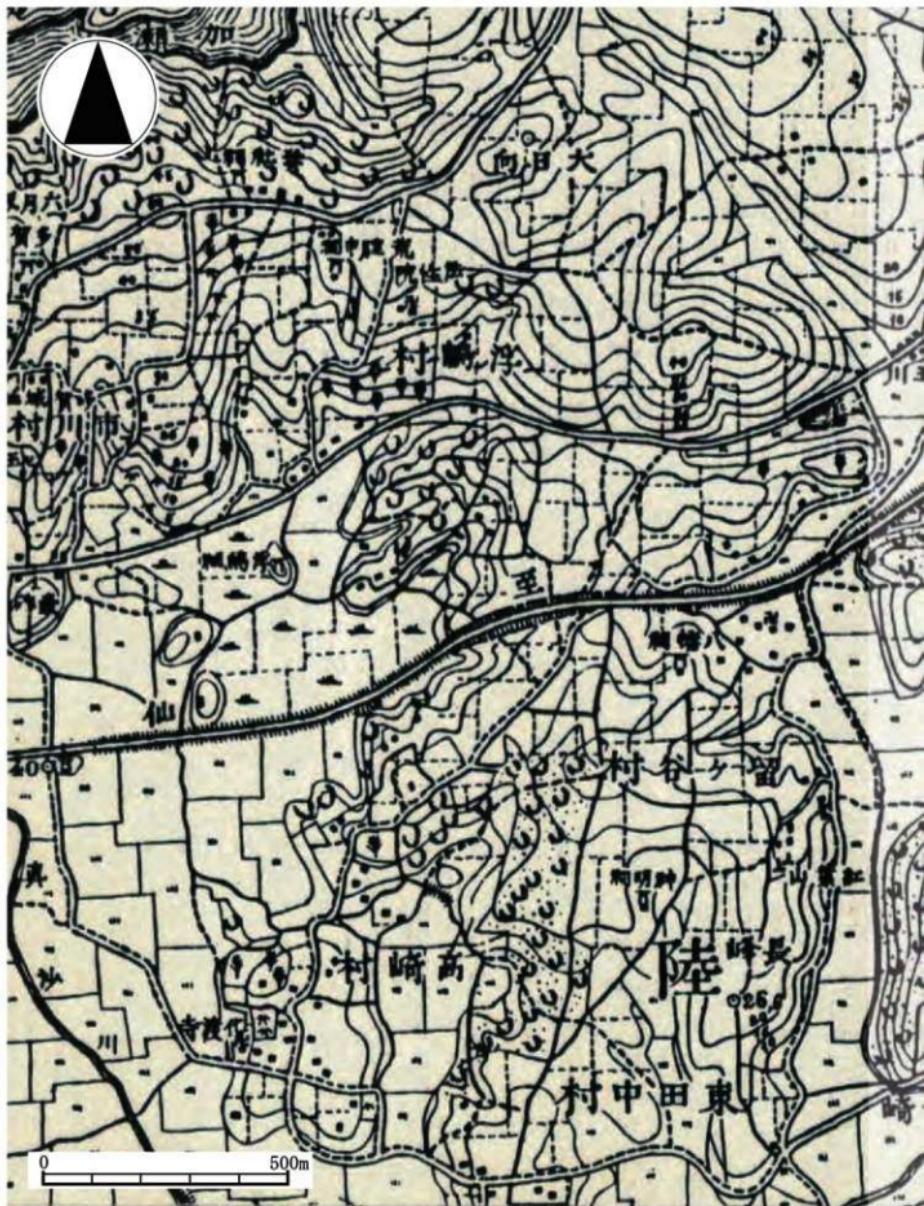
由

陸前國宮城郡下馬村（明治 22 年以前） 宮城県公文書館蔵





下馬地区周辺地図 1 (明治 24 年第二師団參謀部測量・製版)



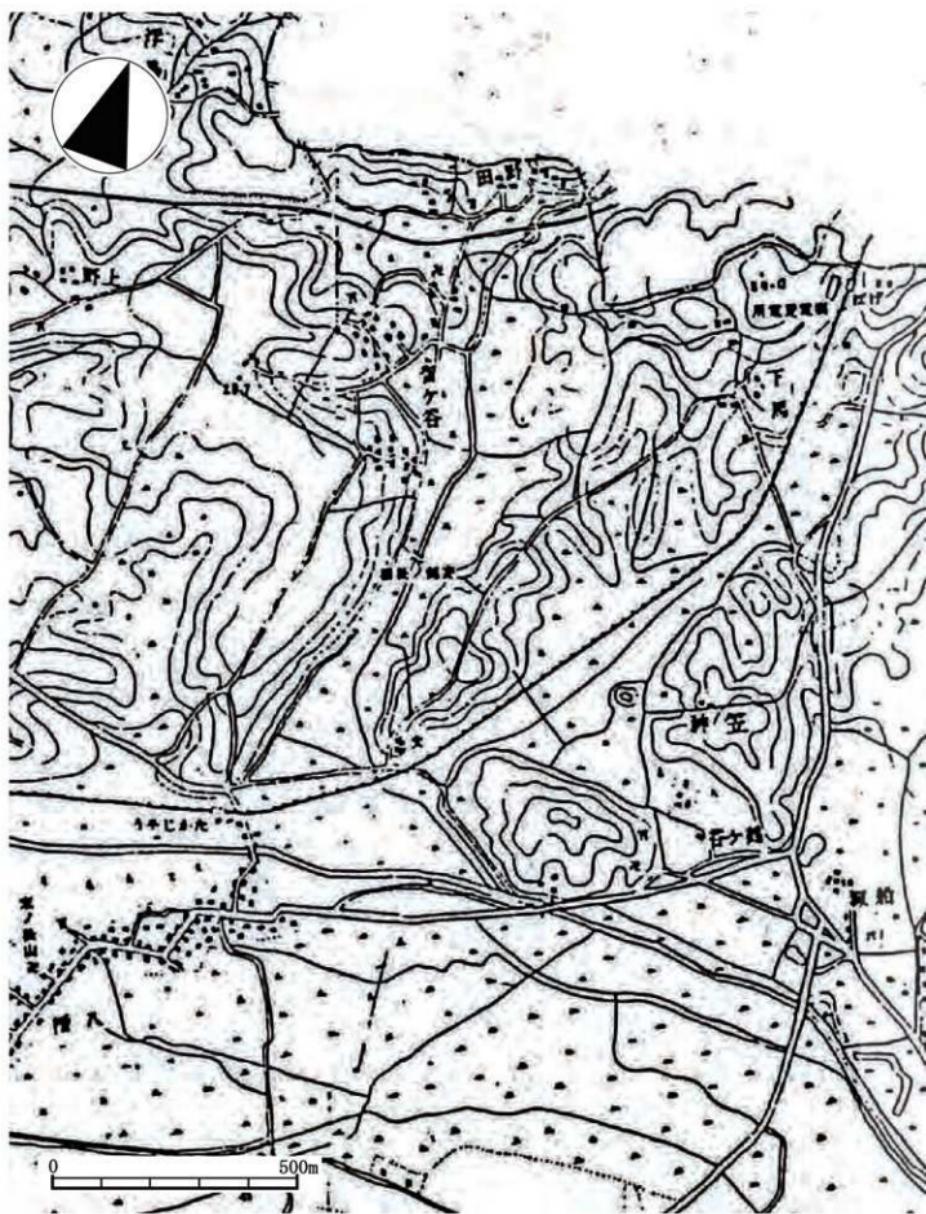


下馬地区周辺地図2（昭和6年国土地理院発行）



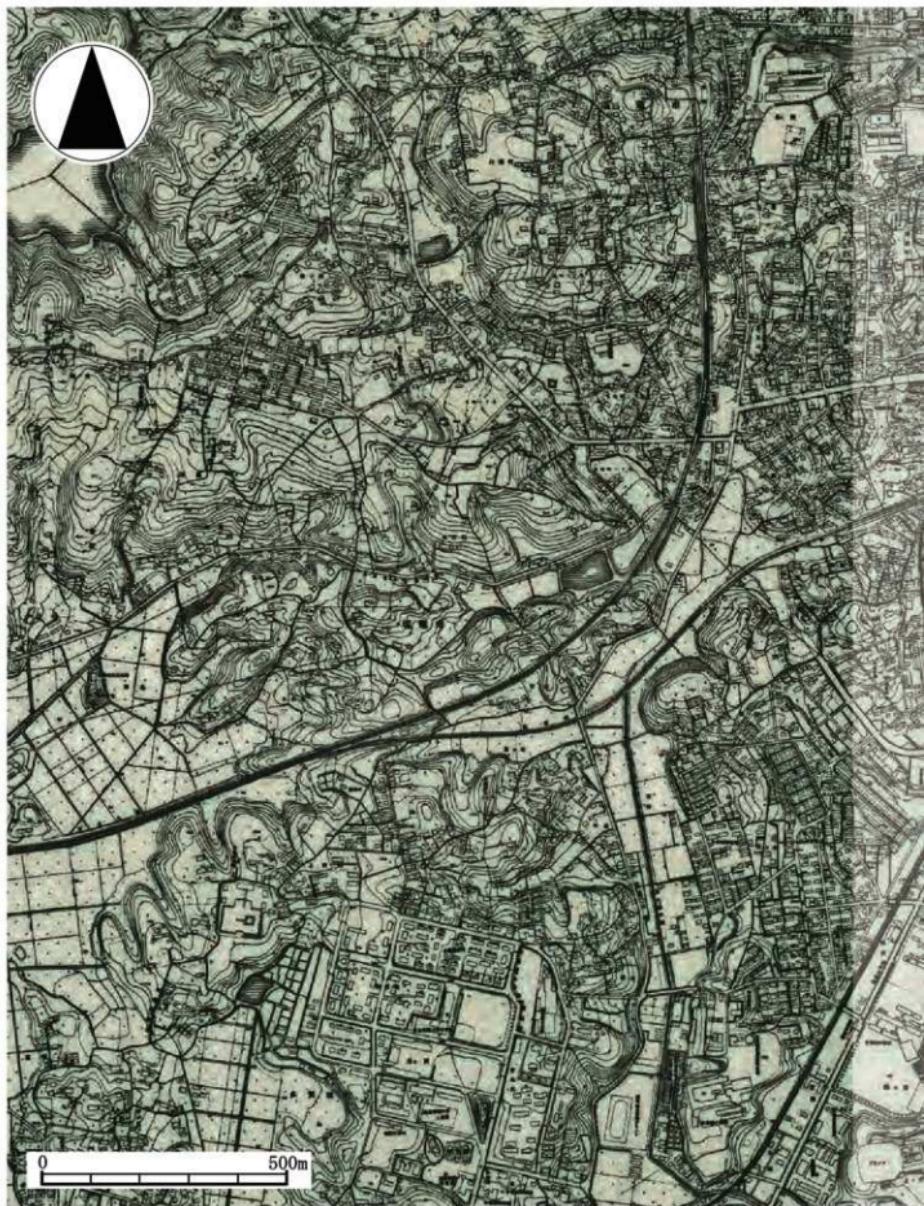


下馬地区周辺地図3（昭和13年）





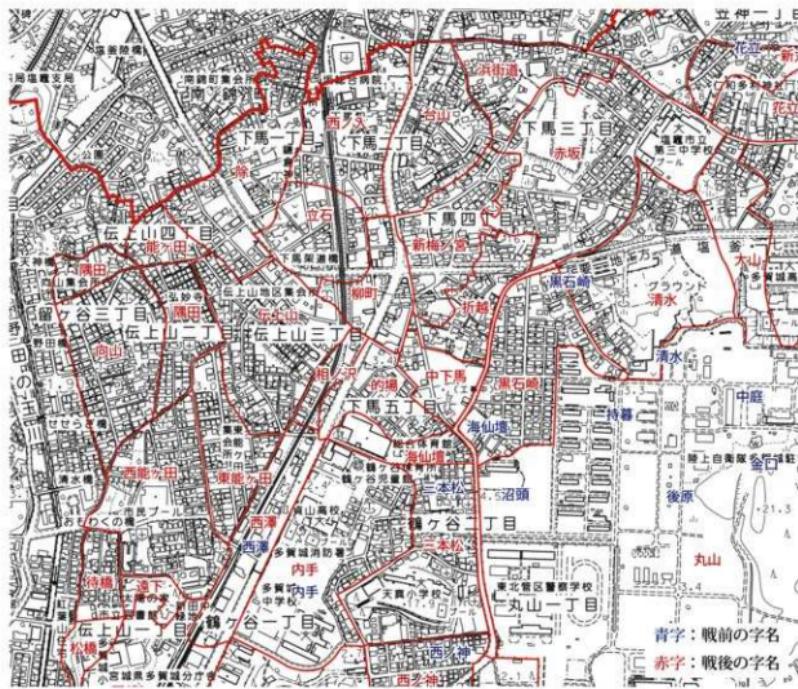
下馬地区周辺地図 4 (昭和 44 年)





下馬地区周辺航空写真 1 (昭和 22 年米軍撮影)

画面左下から北東方向にかけて直線的に伸びているのは国道 45 号線であり、その西側を並行するのは仙石線の線路である。画面右下隅の直線的な区画は笠神の丸山地区である。画面左下隅の伝上山地区は、海軍工廠の工員住宅建設のため開発が進められ、現在のように住宅地が広がる原因となった。国道と仙石線の縁辺は細長く水田が広がっており、西澤という小名も示すように、かつては湿地だった。



第16図 下馬村字名分布図



現在の下馬地区の様子（中央の赤い社は鎌倉神社）

### 第三節 地名

本節を記載するにあたり、参考とした資料は笠神村と同様につき、省略する（第二章 第三節 参照）。

#### ○ 風土記御用書出に記された小名以外の地名

前林 新田

#### ○ 陸前国宮城郡各村字調書に記された小字

赤坂 濱街道 豊山 西ノ入 梅ノ宮 折越 中下馬 柳町

立石 除 傳上山 相ノ沢 的場 遠落海 遠下

折越 新梅の宮 關田 台山 立石 伝上山 中下馬 西能ヶ田

除 能ヶ田 濱街道 東能ヶ田 松橋 待橋 的場

赤坂（あかさか） 下馬三丁目から笠神二丁目の塩竈市立第三中学校付近にかけての地域。

相ノ沢（あいのさわ） 伝上山の山の間に入り込んだ沢（『研究』）。

梅の宮（うめのみや） 『町誌』には、将監墓という鍬田氏の墓所があるところで、その西側の竹林の中に小祠があつたとの伝説があるとしている。

折越（おりこし） 下馬から浜街道を越して笠神に入っている所（『研究』）。

小松原（こまつばら） 立石の東南十数町の位置にある。芦立氏が立石より射た矢が立ったところで、「矢立の塚」という塚があつたという

（『研究』）。

台山（だいやま） 昭和八年頃には高い丘であつたという（『研究』）。下馬三丁目一二番周辺の高台。

立石（たていし） 鎌倉神社の北側の山。高さ五尺、幅一尺ほどの無

銘の石が立つてることによる（『研究』）。

立石山（でんじょうやま） もとは下女山といい、芦立氏の先祖が罪を犯した下女を殺害して葬つたところと云われている。昭和八年ころには下馬地区の共葬墓地であった（『研究』）。

遠落海（とおつみ） もとは人海で遠内海ではなかつたか（『研究』）。遠下（とおさがり） 遠落海の下（『研究』）。

西ノ入（にしのいり） 下馬一丁目、JR下馬駅を含むその南側の地域。

除（のぞき） 下馬一丁目、JR下馬駅の南西約二〇〇メートルの鎌倉神社周辺の地。（『研究』）には、「芦立氏の屋敷跡約一町歩位の所、元

は免租地であつたから除という。屋敷の土壁の外は外除と云つてゐる」とあり、その指摘のとおり、藩の租税が免除された除屋敷に起因すると考えられる。

浜街道（はまかいどう） 塩浜から塩竈に至る街道の通れるところ（『研究』）。

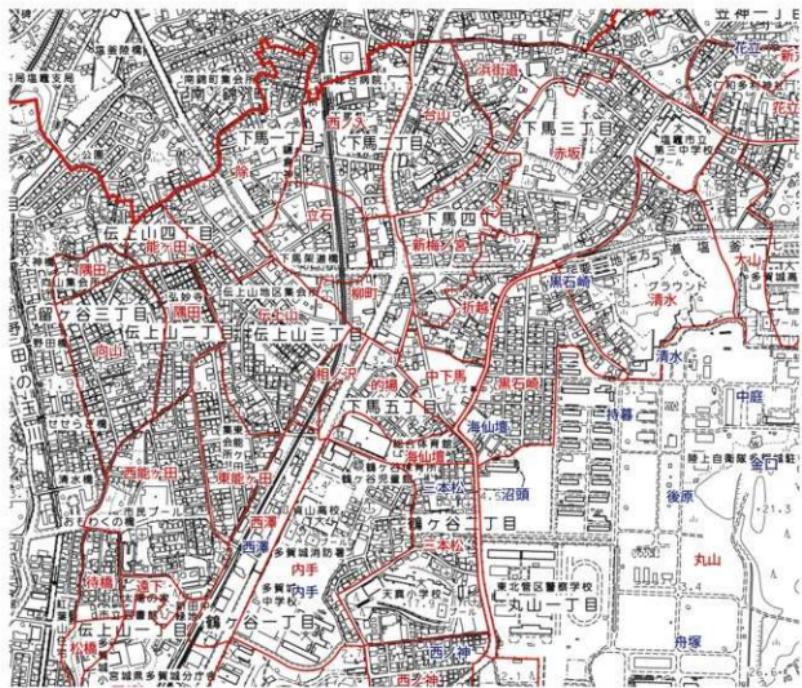
的場（まとば） 矢立の塚の近傍。

芦立氏の弓または鉄砲の的場のあつたところか（『研究』）。

柳町（やなぎまち） 昭和八年頃にはすべて田となつてゐる（『研究』）。



的 場



第16図 下馬村字名分布図



現在の下馬地区の様子（中央の赤い社は鎌倉神社）

## 第四節 社寺仏閣

下馬村は江戸時代を通じて寺社仏閣が置かれなかつたところであり、中世以前にもその存在は確認されていない。

### 鎌倉神社

鎌倉神社は下馬一丁目に所在する市内で最も新しい神社である。江戸時代、下馬は仙台藩家臣芦立氏が田宅（在郷屋敷）を賜つたところであり、鎌倉神社は、当初その屋敷の氏神であつたと伝わつてゐる。

祭神は、鎌倉権五郎景政とされているが（本郷 一九七三）、芦立氏が鎌倉権五郎を祭神とした絆縁については明らかではない。

現在の社殿は、道路に面して鎮座しているが、もとは現在地よりやや北側の奥まつた場所にあり、木立の中、鳥居の奥に立つ茅葺の社の写真が、昭和四二年（一九六七）刊行の『多賀城町誌』に掲載されている。昭和四四年（一九六九）、明治百年を記念して本殿は流造りに、拝殿は入母屋造りに改修され、本社である鎌倉市の御靈神社（権五郎神社）より新たに神靈を迎えてゐる。

芦立氏の屋敷については、「宮城郡屋敷帳」に「壹軒六拾間六拾間

芦立章治居屋敷」とあり、敷地が六拾間四方であつたと記されている（多賀城市史編纂委員会 一九八五）。その屋敷跡は、鎌倉神社の南西約

一四〇メートル付近にあるが、屋敷跡から見て氏神（鎌倉神社）を祀つた場所は北東の方角にあたり、屋敷の鬼門に勘詰した可能性がある。なお、神社から屋敷跡にかけての小字は「除」であり、藩政期に諸役免除とされた「除地」に由来するものであろう。



ゴンゲンサマ時代の鎌倉神社（『多賀城町誌』より）



鎌倉神社

明治維新を経て芦立氏が領主としての立場を失い、明治三七年（一九〇四）以降、芦立氏が下馬の地を離れるに、その氏神の祭祀は古くから下馬に居住していた人々によって執り行われ、ゴンゲンサマ（権現様）と呼ばれていたという（第三章 第六節 参照）。昭和四年の改修の翌年、芦立氏から下馬全区の自治会に寄贈され、その維持管理が委嘱されることとなつた。これにより、芦立氏の氏神は、ゴンゲンサマの時代を経て鎌倉神社となり、下馬地区初めての鎮守の神となつた。

## 第五節 石造物

### 一 凡例

笠神村参照

### 二 分布と概要

下馬村地域で確認した石造物は少なく、近世・近代の供養塔、道標、近世・近代の墓標などがある。太平洋戦争時に現在地とは異なる地点から移動したものや、本来の所在地が不明なものなどがある。それらの所在地の概要については以下のとおりである。

**新梅ノ宮** 下馬三丁目一番の宅地内に大正一四年（一九二五）の道標がある。もととは、多賀城市立天真小学校付近にあったものを移設したものとのいう。

**折越** 下馬四丁目一八番の宅地内に石祠が祀られており、その脇に明治六年（一八七三）の供養碑がある。所有者は海軍工廠建設時に丸山から現在地へ移転したもので、供養塔も移転前の丸山の宅地に祀っていたものである。石祠と並んで擬宝珠状の石造物が一基ある。

**向山** 伝上山二丁目一八番の道端に年代不明の供養塔が一基ある。この塔の由来については不明である。

**赤坂** 下馬三丁目のゴルフ練習場内に近世・近代の供養塔と墓標一八基がある。周辺にあったものを一箇所に集めたものとされ、東西七、五メートル、南北九メートルの範囲に巡らされた柵の中に、供養塔と墓標が混在した状態で祀られている。



向山



新梅ノ宮



折越の擬宝珠



折越

なお、現存しないが、下馬三丁目には将監墓と呼ばれる墓地があった。

『多賀城町誌』には、次のような記載がある。

(略) 梅の宮の堀内氏の前の竹藪の中に将監墓といふ墓地がある。今は竹藪も次第にうすれ、整地が進んでるので、この墓地も早晚なくなるであろうが、元来鎌田氏の先祖の墓地である。いま将監墓は見当たらないが、鎌田土佐藤原有信墓というものが中央にある。この墓地の西方の竹藪の中には小祠があつたと伝えられる。(以下略)

鎌田有信は鹽竈神社の社家であり、鎌田家一代として天明四年(一七八四)から文政六年(一八二三)までその職にあつた人である。将監は一三代有和であり、この代で明治維新を迎えていた(高橋一九八一)。町誌の指摘のとおり、墓地は昭和四四年に利府町加瀬の大祥寺に移転し、墓標は新しい墓所に埋設されたという。

町誌の記載に従えば、墓標銘は法名ではなく、「苗字+俗名+本姓+実名」となっている。本市市川字大畠には同じく鹽竈神社社家志賀氏の墓地があり、歴代の墓標銘も同様の様式となっている(宮城県多賀城跡調査研究所 一九八一)。



第17図 将監墓位置図



第18図 赤坂供養塔・墓標配置図



赤坂

### 三 近世・近代の供養塔・道標

#### 1 解説

No.60は本郷氏個人が建立した湯殿山塔である。明治になると馬頭観世音などに個人建立のものが目立つようになるが、このような湯殿山塔にも個人的な建立例が見られるようになる。

No.61は題目塔である。年代は不明であるが、ヒゲ題目と称される独特な書体であり、本例は「南」「無」「經」のヒゲが下に垂れ下がっている点に特徴がある。

No.62・63は念佛塔である。

No.64は馬頭観世音塔である。

No.65は中谷地(八幡・蒲生・仙台市)方面と七ヶ浜方面を示した道標である。道標ではあるが、個人の建立となっている。

#### 供養塔記文

#### 60 折越 (No.244)

明治六西山

本郷

(アーチ)  
湯殿山

善助

建之

十月八日

#### 61 向山 (No.252)

七月八日

南無妙法蓮華經  
菩薩塔

佐藤光廣

#### 62 赤坂 (No.257)

宝永七年  
南無阿弥陀佛

安政五年  
九月六日

#### 63 赤坂 (No.266)

南無阿彌陀佛

十月吉

#### 64 赤坂 (No.268)

昭和四年正月三日

馬頭観世音

堀内小四郎建之

#### 道標記文

#### 65 新梅ノ宮 (No.243)

中谷地 方面

大正十四年七月

右 蒲生 方面

左 七ヶ浜 方面 小野源左工門  
建之



S=1/8 0 30cm





0 30cm  
S=1/8



62 赤坂（No. 257） 宝永七年（一七一〇）

○南無阿彌陀佛  
宝永七庚寅年

九月元日



63 赤坂（No. 266） 安政五年（一八五八）

○南無阿彌陀佛  
安政五年

十月吉



堀内小四郎建之  
昭和四年旧三月三日

馬頭観世音



右 中谷地  
蒲生 方面  
左 七ヶ浜 方面  
方面 大正十四年七月  
小野源左工門 建之



S=1/8 0 30cm



四 墓標

No. 66～75は貝灰石を使用した墓標である。

No. 75は外側が舟形背抜状を呈し、裏面は荒削りのまま、正面を平坦にして菩薩像を平内彫りにしている。菩薩像の首から下は埋没しており、詳細は不明である。

No. 77は石立像である。頭部が失われているため、詳細は不明である。

积文

66 赤坂 (No. 255)

元禄八乙亥

○一峯道寒禅定  
蠟月□日

67 赤坂 (No. 256)

元禄十一乙亥

□ 禅定門 (請花)

68 赤坂 (No. 258)

正徳四年

○養岸妙雲伊女 (請花)  
十一月廿五日

69 赤坂 (No. 259)

正徳五年

○利元  
五月

70 赤坂 (No. 260)

元文二年

○淨法有足水信

三月十五日

71 赤坂 (No. 261)

寛延二年三月

本然草堂信士 (請花)

五月二十六日

72 赤坂 (No. 262)

宝曆二年三月

○受室妙用信女

七月二十八日

73 赤坂 (No. 263)

宝曆五年三月

○旧居知陽信女

正月六日

74 赤坂 (No. 264)

明和四年正月

○節義道義信

十一月六日

75 赤坂 (No.265)

明和六年

○古畠目道信土

九月八日

76 赤坂 (No.270)

(笠置彌像)

77 赤坂 (No.271)  
(笠置彌像)

○

元禄八乙亥  
一峯道寒禪定  
臘月□日



□



元禄十一口

禪定門  
(請花)



赤坂 (No.258) 正徳四年 (一七一四)

正徳四年

○養岸妙靈信女  
(請花)

十一月廿五日



赤坂 (No.259)

正徳カ

○利元口

五月



70 赤坂 (No. 260) 元文三年 (一七三八)

元文三年  
（一七三八）

○淨岩是小信

三月十五日



71 赤坂 (No. 261) 寛延三年 (一七五〇)

寛延三年  
（一七五〇）  
力  
本然是室信士  
(請花)  
五月二十六日



赤坂 (No.262) 宝曆二年 (一七五二)

宝曆二年 (一七五二)

○受室妙用信女

七月二十八日



赤坂 (No.263) 宝曆五年 (一七五五)

宝曆五年 (一七五五)

○旧岳知陽但女

正月六日



○節叟道信

明和四年年

十二月六日



○古出自道信士

明和六年年

九月八日



## (1) 芦立氏と下馬の旧家

下馬には仙台藩の家臣であつた芦立氏の屋敷があつた。芦立氏は宮城県南部からこの地に移り住んだとされており、明治中頃に塩竈の尾島町へと移住するまで、下馬に居住したという。下馬には当初、この芦立家を含めて七軒しか家がなかつたとされており、七軒で一つの村であったため、この七軒を「下馬七軒」と呼んだ。下馬七軒とは、芦立家・目黒家・目黒家・亀山家・繁泉家・中鉢家・堀内家のことである。この七軒は、堀内家以外、現在の国道四五号線の西側にある程度固まつて居を構えていた。現在は下馬から離れた中鉢家の場所については、目黒家と亀山家の間に「ユウバチャヤシキ（中鉢屋敷）」という土地の呼び名が残つており、おおよその場所が伝えられている。芦立家については、鎌倉神社から見て南西の方角に屋敷があつたとされる場所がある。

芦立家と中鉢家が下馬から離れた後は、残りの五軒で「下馬五軒」と呼ばれるようになつた。現在でもこの五軒は下馬にあり、この呼び方が広く知られている。この中で現在まで芦立家との関わりが伝えられている家は、「一軒ある目黒家のうちの一軒である。この家の先祖は、芦立氏に従つて県南から移り住んだお抱えの医者であつたとされている。この家の昭和二年（一九二七）生まれの女性が幼い頃までは、塩竈の芦立家に手伝いに行くなど付き合いがあつた」という。その他家の家については、繁泉家は山形から移り住んできたと伝えられ、亀山家はもう一軒の目黒家から分かれたという話が残つている。これらの旧家は、当時芦立家の氏神であつた鎌倉神社を共同で管理したり、契約書を組織するなど、互いに協力し合つていた様子が史料や聞き書きから確認できる。



昭和初期の下馬の風景

## 第六節 民俗

### 一 地域の概要 1 人口と行政区

下馬村は、現在の下馬西・東・北・南に加え、伝上山・向山・鶴田・東能ヶ田・西能ヶ田などを含む、広範囲に広がる村であった。この地域の人口は、平成二八年一月三一日時点で六九六二人となつており、これは同じ月の多賀城市の人口の約一パーセントにあたる。

この中でも、古くから人が住み、地域の中心となつていたのが下馬西・東・北・南北地区である。鎌倉神社の組織家も、この範囲内に存在している。



第19図 下馬の行政区

表7 下馬の世帯数と人口

	世帯数	人口		
		男	女	計
下馬西	454	463	511	974
下馬東	435	465	529	994
下馬北	239	249	266	515
下馬南	599	698	756	1,454
伝上山	203	230	253	483
鶴田	116	144	130	274
向山	455	541	581	1,122
東能ヶ田	192	215	221	436
西能ヶ田	282	336	374	710
計	2,975	3,341	3,621	6,962

(平成28年1月31日時点 市民経済都市民課記録係)

「住民基本台帳人口集計表」を基に作成)



第20図 下馬地区民俗調査関連図

## (1) 芦立氏と下馬の旧家

下馬には仙台藩の家臣であつた芦立氏の屋敷があつた。芦立氏は宮城県南部からこの地に移り住んだとされており、明治中頃に塩竈の尾島町へと移住するまで、下馬に居住したという。下馬には当初、この芦立家を含めて七軒しか家がなかつたとされており、七軒で一つの村であったため、この七軒を「下馬七軒」と呼んだ。下馬七軒とは、芦立家・目黒家・目黒家・亀山家・繁泉家・中鉢家・堀内家のことである。この七軒は、堀内家以外、現在の国道四五線の西側にある程度固まつて居を構えていた。現在は下馬から離れた中鉢家の場所については、目黒家と亀山家の間にチュウバチャシキ（中鉢屋敷）という土地の呼び名が残つており、おおよその場所が伝えられている。芦立家については、鎌倉神社から見て南西の方角に屋敷があつたとされる場所がある。

芦立家と中鉢家が下馬から離れた後は、残りの五軒で「下馬五軒」と呼ばれるようになつた。現在でもこの五軒は下馬にあり、この呼び方が広く知られている。この中で現在まで芦立家との関わりが伝えられている家は、二軒ある目黒家のうちの一軒である。この家の先祖は、芦立氏に従つて県南から移り住んだお抱えの医者であつたとされている。この家の昭和二年（一九二七）生まれの女性が幼い頃までは、塩釜の芦立家に手伝いに行くなど付き合いがあつたという。その他家の家については、繁泉家は山形から移り住んできたと伝えられ、亀山家はもう一軒の目黒家から分かれたという話が残つている。これらの旧家は、当時芦立家の氏神であつた鎌倉神社を共同で管理したり、契約書を組織するなど、互いに協力し合つていた様子が史料や聞き書きから確認できる。



昭和初期の下馬の風景

## (2) 海軍工廠建設と地域の変化

### 下馬への移転者

昭和一八年（一九四三）、多賀城海軍工廠が設置され、その建設地に住んでいた人々は家屋の移転を余儀なくされた。下馬にも、主に旧笠神からの移転者を受け入れるための集団移転地が用意された。この土地への移転者の他に、新たに土地を買い求めて移り住んだ旧沖区の人も多く、それらの移転者は、元からの下馬の住人とどの様な関わりの中で地域に馴染んでいった。下馬に古くからあった契約譲に加入する家があつたり、旧沖区の中谷地から移転してきた女性たちの山の神講に下馬五軒の女性たちが加わるなど、旧笠神・旧沖区からの移転者は、地域に少なからず影響を与えたと考えられる。

表9 旧笠神からの移転戸数

地区名	戸数
下馬	28
笠神	17
塩釜	8
中央	3
伝上山	2
鶴ヶ谷	2
利府	2
大代	1
八幡	1
市川	1
新田	1
松島	1
七ヶ浜	1
不明	3
計	71

単位 (戸)

(右)『多賀城市史2 近世・近現代』p.350を基に作成

(左)『懐郷史抄 古里の笠神を訪ねて』pp.34-37を基に作成

表8 旧沖区からの移転戸数

地区名	戸数
八幡	49
塩釜	9
下馬	8
利府	8
笠神	6
東田中	2
仙台	2
新田	1
北海道	1
不明	2
計	88

単位 (戸)

### 工員住宅の建設

下馬西区と伝上山二丁目との境には、海軍工廠の工員住宅が立ち並んでいた。この住宅の建設のために、下馬の人々が墓地として利用していた土地を明渡すことになり、墓石や遺骨を西園寺へと移動させた。この墓地には芦立家の墓もあり、塩竈へと移住した後も、ここに墓地を利用していた。芦立家の墓は墓地の中央にあり、周囲に開いがめぐらせてあつたという。この墓地へと向かう一本道は上り坂になつており、カンツキ坂と呼ばれていた。



墓地跡に続くカンツキ坂



工員住宅 (『平成22年度版 わたしたちの多賀城』p.33)

### 3 屋号

(1) 家屋の位置や方向によるもの

オモテノイ（表の家）

芦立氏の屋敷の門の前に居を構えたため、このように呼ばれた。

(2) 地形・地勢によるもの

ソテツボ・ソデクボ（袖窪）

カイグンヤ（海軍屋）  
この家の先祖が海軍の関係者であったことから、このように呼ばれる  
ようになった。

(3) 地名によるもの

ツルガヤ（鶴ヶ谷）

イツケンゲバ（一軒下馬）  
貴、周間に家がなく、この一軒しかなかつたためにこのように呼ばれ  
る。

(7) その他

(4) 家印によるもの  
マルイチ（一）

マルゼン（萬）

マルマツ（松）

(5) 職業によるもの  
ミセノイ（店の家）

センベイヤ（煎餅屋）

モチヤ（餅屋）

(6) 家の先祖に關係するもの  
アメリカヤ（アメリカ屋）  
この家の先祖がカナダに出稼ぎに行つたことがあり、このように呼ば  
れるようになった。

## 二 人々のつながり

### 1 契約講

#### (1) 志講

明治八年（一八七五）に「下馬七軒」によって組織された契約講である。

当初の講員数は七戸であったが、その後徐々に増えていき、昭和四七年（一九七二）に解散する直前は一八戸によつて活動が行われていた。一

志講についての詳細な聞き書きは困難であるが、現在でも元講員の家に

講帳が残つてゐるため、それによつて概要を知ることができる。

講員については、明治八年には「下馬七軒」の戸主の名前が記されて

おり、七戸で始まつたことがわかる。その後、明治三〇年（一八九七）

までに堀内家が一戸、目黒家が一戸増え、講員は九戸になつた。そして、明治三四年（一九〇一）を最後に、中鉢家の名前が見られなくなる。さらに、芦立家も明治三七年（一九〇四）を最後に講帳から名前がなくなる。このことから、芦立家、中鉢家はこの時期に下馬を去つたと考えることができる。その後も多少の増減があり、大正二年（一九一二）には八戸が加入するなど、地域の発展とともに講員の数は増え続けた。活動内容については、明治八年に次のようない取り決めがなされている。

各自持寄定

一 白米苞升  
一 金苞朱

右之通相定候条但乞ケ年ニ致

一月十月ニ宿可仕候當相手之義

八式人宛猶村内ニ而不時之義有

之候節ハ相手方ニ世話可仕候其

其時々詮議之次第ニより村内老

同心寄萬事相つとめべく

候也

明治八年十月

當番

これによると、一月と一〇月に宿をもつて集まりが開かれ、その際には各自米と金錢を持ち寄ることが定められている。また、手伝いとして当相手二名があてられており、都合の悪い場合は代わりの人にお願いすることとされている。そして、契約での決まりごとは村内の人々で守ることと結ばれている。年に二回開かれていた集まりであつたが、明治三六年（一九〇三）旧暦一〇月を最後に、一〇月の集まりは行わなくななり、旧暦二月のみの開催に変更されている。その後も昭和四七年まで毎年集まりが持たれていた。

解散については、講帳に次のように記載されている。

現在の世相と文化経済の進展にともない現在は葬儀屋で一切責任を以つて済すやうになつたので契約講の必要性が余りみとめなくなつたので講員の皆様は解散の希望の声が大きいので百年に近い歴史ある講であります多數の意見を以つて解散する事にしました

戦後の火葬の普及と、葬儀社が中心となっての葬儀の一般化により、葬儀の際の助け合いという契約講の大きな役割が失われた。現在、一志講の活動を記憶している人は少なく、講員の家で集まりが開かれていたこと、講員の家で死者が出た時には契約講で手伝っていたことを、数名が断片的に覚えている程度である。



一志講の講帳

(2) 旧笠神からの移転者による契約講

旧笠神から移転してきた人々が中心になって組織していた契約講である。特に名称はなく、ケイヤクカイ（契約会）や、ケイヤクコウ（契約講）と呼ばれていた。当時、主に旧笠神からの移転者を受け入れる場所として一画が斡旋され、そこに住む一五戸によって昭和二二年（一九四七）頃に結成された。自宅で葬式を行わなくなつたことなどを理由に、平成五年前後に解散した。

主要な活動は、毎年一月に行われる集まりと、講員の家で不幸があつた時の葬儀の手伝いである。集まりは新年会も兼ねて一月に行われ、一戸から一人が参加していた。男性が出なければならないという決まりはなく、女性の参加者の方が多かった。会場は当番に当たっている家で行われ、この当番のことをヤド（宿）と呼んだ。ヤドは、基本的に一年ごとに交代し、隣の家、隣の家の家へと回っていた。しかし、解散の何年か前から、講員の高齢化や体調不良などの理由で同じ家がずっとヤドを務めていた。ヤドに当たった家では、集まりの際の食事の準備、葬儀の際の役割の振り当て、講帳や通帳の管理を行つていた。

葬儀に関しては、死者が出た家の親戚に、不幸を知らせに行くシラセ（知らせ）、墓石を動かすアナホリ（穴掘り）といった役があった。ニッカン（入棺）の手伝いなどもあり、当初、契約講の果たす役割は大きかつた。また、人が亡くなつた家には、契約講から米一〇キロが支給され、いたが、いつの頃からか金銭を支給するようになつた。しかし、平成に入つた頃から、徐々に葬儀社を利用した会館での葬儀が増え、契約講の出席者は減つていった。

## (1) 山の神講

子受けや安産の御利益で知られる、美里町（旧小牛田町）の山神社を信仰する女性の講集団である。下馬の山の神講は、旧沖区の中谷地から下馬に移転してきた家を中心には、五・七戸の女性によって構成される。姑が脱退するとその家の嫁が新たに加入するようになつておらず、戸から一人の女性が入ることになつて。以前は嫁へと代替わりがなされていたが、最近は姑がそのまま活動を続ける状態が続いており、講員の年齢層は高めである。現在は、中谷地から移転した家の女性たちが中心であるが、以前は下馬に元から住む家の女性たちも加わっていた。この山の神講で拝んでいる掛け軸は、海軍工廠建設に伴う移転の前から、旧沖区の中谷地で拝まれていたものである。その後、講員は中谷地を去り、それぞれの移転先へと移つて行つた。そのため山の神講の活動も中断していたが、下馬へ移り住んだ家から掛け軸が見つかり、周辺の中谷地から移転してきた家の女性たちによつて活動が再開された。一方、八幡に集団移転をした中谷地の女性たちは、下馬の講とは別に新たな山の神講を組織し、平成一五年まで活動をしていた。そのため、旧中谷地の女性を中心とした山の神講は下馬と八幡に二つあつたが、旧中谷地時代からの掛け軸を所有しているのは下馬の講である。



平成 28 年 3 月 26 日の山の神講



嘉永 6 年の掛け軸

## 山の神講の話

昔、中谷地にいた時には、ずっと（山の神講の活動を）やれてたんだけど、移転になってみんなバラバラでしょ？ そんでね、家のお姑さんがなんだか夢見が悪かったんだって。そして、拝み屋さんに拝んでもらったら、「なんか名のある神だけど、寝てる神様がある」と言われたんだと。「なんだやー？」と思って考えてみたら、山の神様のヤド（宿）にあたってたのに、ほら、移転だなんだでないでいた神様（掛け軸）が家にあったの。移転するので、山の神講どころじゃないさ。そこでそれを出して、みんなに拝んでもらったんだって。で、これをまた拝んだらしいんでないかってことで、昔みたいに。それから拝み始まったの。

(昭和 3 年生まれ 女性)

ドの女性が自宅で精進料理を供え、その後、近隣の店で講員全員で食事をし、そこで次のヤドの女性に掛け軸が渡される。現在は小牛田の山神社に参拝に行くことはあまりないが、以前は三月一二日に行っていた。誰かが代表して参拝をする代参ではなく、全員で参拝に行つていたという。

## (1) 鎌倉神社

鎌倉神社は下馬西・東・北・南区の四区を中心に信仰されている神社であり、祭神は鎌倉権五郎景政である。現在はこの四区の中からそれぞれ選ばれた役員によって管理されており、下馬地区の鎮守の神様として信仰されているが、昭和四〇年代初めまでは、芦立家の氏神として「下馬五軒」とその分家、計六軒によつて祀られていた。ゴンゲンサマ（權現様）と呼ばれた神社は茅葺きの小さな社（第三章 第四節 参照）であつたとされ、屋根の葺き替えもこの六軒が協力して行つてゐた。その後、昭和四〇年代の区画整理に伴い、多少場所を移動させ、新たに社殿を作ることになった。そして、昭和四五年（一九七〇）に地域の鎮守の神様として祀られることになり、現在に至つてゐる。

神社に関する組織には、神社社主・永代総代・總代顧問・總代・世話役・自治会・婦人部・商店会・子ども会・消防団・防犯員・交通指導がある。神社社主とは、芦立家の当主のことであり、現在でも祭りに参加するなどして、鎌倉神社との繋がりを保つてゐる。永代総代は、芦立家の氏神であった時代から、神社を祀つてゐた六軒が務めている。總代顧問は、主に総代の経験者があたり、助言などをを行う。總代は、四区の区長を含めた九名が務めており、各区から最大三名ずつ選出することができる。この中でも、神社がある西区の区長は、組織の代表となつてゐる。その他、神社の行事は下馬地区を挙げて行われるため、地域の各団体が関わつてくる。神社社主と永代総代は固定されているが、その他の役には任期が設けられている。

祭日は、九月一八日である。毎年この日には例祭が行わられ、柏木神社

の神職によつて神事が執り行われる。また、三年に一度大祭が開かれ、子どもたちによる神輿渡御が行われる。大祭の年は人を集めため、九月一八日が平日の場合には、その近くの休日が祭日となる。祭日は、把握できているだけで二回変更されている。アジア・太平洋戦争の前までは今と同じ九月一八日であつたが、戦時中に四月一五日に変更されたといふ。昭和四五年に地域の神様になつた後、元の日にちに戻された。神社に奉納されている二つの轍のうち、昭和四五年のものには、四月一日の日付が入つてゐるが、昭和五二年（一九七七）の轍には九月一八日の日付が入つてゐる。このことから、この間に祭日が変更されたと考えられる。

祭日の様子は、地域の神社になつてからとその前では大きく異なる。平成二七年の祭りは、三年に一度の大祭であつた。鎌倉神社の横の公園で、柏木神社の神職による祈祷が行われ、神社の役員から子どもたちまで多くの人が参加した。祈祷後、子ども神輿が地域を巡り、その後直会が行われた。芦立家の氏神であつた頃の祭りは、各家で餅を搗くくらいであつたとする話もあれば、神社を管理していた六軒の家が集まつてゐたという話もあり、その時期によつて様子が異なつたようである。

# 鎌倉神社の

一年

9月

18日 例祭

(3年に1回の大祭の年は、日にちではなく曜日が優先で、休日に行う)



## 鎌倉神社の話

今あいなく立派になったけど、昔はほんとにクズ屋葺きの、「ここ神社かや?」って思うようなとこだった。6軒で管理している時は、屋根葺きもなにも6軒でやってたからね。ほって、私たち中学生時代の時は、夏休みの時だのそこ掃除して、ゴザ敷いて、そこで勉強会だのしたんだ。神社の前を行つて。(祭りは)私たち小さい頃は9月だったのかな。秋祭り。お祭りってなにもしねえ。明日お祭りっていう前の晩。6軒の人たちなんかお茶菓子だのなんか持ってきて、神社で一杯飲んで、お参りして。その程度だったな。

(昭和2年生まれ 女性)

(自分が嫁に来た頃は)4月15日ね。4月15日お祭り来るってよく言ったんだったよね。昔だからお祭り楽しみにして。草餅と赤飯、お膳だのちゃんと用意して御馳走したんだよ。自分の家の親戚たちを呼ばって御馳走したの。

(昭和6年生まれ 女性)

14日 どんと祭



1月

14日 どんと祭



# 第四章 地誌・記録・文書

## 一 封内風土記

### 1 笠神

笠神邑。

戸口凡廿六。

神社凡四。

神明宮。

傳云。東山帝。元祿

中勸請。

祇園社。不傳。何時勸請。二渡権現社。同上。柏木明

神社。不傳。何時勸請何神。佛宇一。舟塚山觀音堂。不詳。何時

創建。寺一。黃龍山西園寺。臨濟宗。本郡松島。瑞巖寺末寺。傳

云。大林和尚開山。不詳。共年月。橋一。土橋長六間。濶一間半。

### 2 下馬

下馬邑。戸口凡二。希文按。

### 3 風土記御用書出

#### 1 笠神村風土記御用書出

##### 笠神村

高 三拾五貫六百七拾六文 (註1)

田代 三貫四百九拾三文

烟代 五貫百八拾三文

##### 1 神社

仁波多里權現社

一小名

鶴谷

一 勸請 誰勸請と申儀并年月共二相知不申候事

一 社地 (欠) 一 社 東向四尺作

一 鳥居 北東向 一 祭日 九月十九日

一 祇園社 一小名 牛生 (註2・3)

一 勸請 誰勸請と申義并年月共二相知不申候事

一 社地 (欠) 一 社 辰巳向式尺作

一 鳥居 辰巳向 一 祭日 六月十五日

一 神明社 一小名 日向

一 勸請 誰勸請と申義并年月共二相知不申候事

一 社地 橫五間 縱十五間 一 社 南向式尺作

一 地主 新屋敷久兵衛 一 別當 右久兵衛

一 祭日 九月十五日

一 仏閣 一 祭日 九月十九日

一 觀音堂 一小名 (欠) (註4)

一 勸請 誰勸請と申義并年月共二相知不申候事

一 境内 橫四間 縱四間 一 堂 南向式尺作

△ 一 本尊 一 地主 沼屋敷榮吉

一 別當 右榮吉 一 祭日 九月十九日

一 寺 芦ヶ寺

黄龍山 西園寺

一 小名 鶴谷 一 臨濟宗 一 仏殿 南向 縱七間半

一 本尊 积迦如来 木仏坐像 御長八寸

但作者相知不申候事

一 門 辰巳向

一 額 門之横額黃龍山三字 松嶋瑞岩寺御先住曾庵和尚筆

一 開山之事 当寺者松嶋瑞岩寺第武拾七世大林和尚開山二御

座候處右年号相知不申候仙林和尚享保十六年二月中興二付當

安永三年迄四拾四年二糸成申候事

一 本山井末寺之事 本山者当郡松崎村青龍山瑞岩寺二御座

候 但末寺無御座候事

一 古塚

一 船塚 廻り七拾三間 一 箱塚 廻り九拾四間

前頭

右二塚共ニ何塚と申義ハ相知不申候得共往古ヨリ之古塚二御座候

事

一 山三

一 大山 高サ拾六間 一 与五山 高サ拾間

一 助ヶ森 高サ九間

右何も他村御境并遠見之品無御座候事

一 御林 一ヶ銘 当村御拌領御林無御座候事

一 平野山御林 横拾九間

右ハ元禄元年御植立二御座候 但他村御境無御座候事

一 川一ツ一箱塚川

一 水上八當郡八幡川二而当村境龍ヶ崎と申所江流來申候事

一 末水八當村境菊ヶ岡と申所ヨリ大代川二糸成候事

但郡八幡村片瀬片川

右間数並通路之儀ハ當郡八幡村ヨリ御書上仕候事

一 橋 菊ヶ岡橋

一 堤 老ツ 山中 一 西沼 廻リ百六拾間

一 沼 老ツ 助ヶ森 一 西沼 廻リ百六拾間

一 堀 老ツ 一 当村一円用水 右溜高拾九貫五百拾弐文

一 石崎堰 当村堰本二而当村井下馬村石武ヶ村用水 総溜高七

貫六百八拾丈 但当村分溜高六貫三百六拾丈

一 坂 老ツ 一 赤坂 長武拾間 当村ヨリ当郡大代村江之通路

一 道 二筋

一 当村ヨリ当郡八幡村塙籠村江之道 老筋

一 当村ヨリ当郡大代村江之道 老筋

一 名石 老ツ

一 笠石 竪武<sup>西沢</sup>間 右ハ名石と申ニハ無御座候得共往古ヨリ笠石

と申唱来リ異体之石ニ御座候間御書上仕候、但土中ニ相入居候

二付委細ニ間數申上兼候事

一 小名 四 一 鶴谷 一 丸山 一 牛生 一 小坂

一 御村境 橫三拾三丁

一 南ハ當郡八幡村境當村分箱崎と申所ヨリ

豎一 東ハ當郡八幡村境當村分高原と申所ヨリ

横一 北ハ當郡下馬村境當村分与五山と申所迄

一 西ハ當郡留谷村境當村分西沢と申所迄

右之通風土記御用二付此度相改御書上仕候 已上

安永三年九月

○ 風土記御用書出

宮城郡陸方下馬村  
肝人 荣 吉

下馬村

道 二筋

一 堤 一  
一 待居瀬長堤 当村一円用水 右為高四貫三百五拾八丈  
一 堤 ○ 一 坂

○ 村名二付由來

下馬村

一 当村より当郡塙竈町江之道 一筋

○ 田代 九貫四百三拾四文

一 名石 ○ 一 名水 ○ 付温泉 ○ 一 名木 ○ 一 産物

一 番代 三貫六拾五文 但 茶烟一円無御座候事

○ 古歌 ○ 一 端郷 ○ 一 小名

一 内 三百四拾七文 御藏入

一 屋敷名 一 西屋敷 式軒

一 都合 捨式貫四百九拾九文

一 南八当郡笠神村境当村分持幕と申所ヨリ

一 人頭 式人 一 家数 式軒

一 北八当郡塙竈村境当村分花立と申所迄

一 男女 都合拾壱人 内 一 男七人 一 女四人

一 東八当郡笠神村境当村分牛生と申所ヨリ

一 馬 式足

一 西八当郡留ヶ谷村境当村分新田と申所迄

一 牛 ○ 付舟 ○ 一 名所 ○ 一 旧跡 ○ 一 神社 ○ 一

以上 十一ヶ条

○ 俗間

御案当本文四十一ヶ条付ヶ条四ヶ条都合四十五ヶ条之内印仕候分三

○ 一 寺 ○ 一 修驗 ○ 付行派寺并虛無僧寺 ○ 一 孝子孝婦忠

十四ヶ条之品無御座候事

僕良民并百歲以上長寿之者 ○ 一 古人 ○ 一 品督之御百姓

右之通風土記御用二付此度相改御書上仕候 以上

○ 一 御林 ○ 一 川 ○ 一 滝 ○ 一 橋 ○ 一 沼

安永三年九月

一 山 一

前林 一 前山 高七間 但山上遠見之品并他村御境無御座候事

○ 一 御林 ○ 一 川 ○ 一 滝 ○ 一 橋 ○ 一 沼

以上

三 鹽松勝譜

西園寺

笠石ノ南ニ在リ。地ヲ鶴谷ト曰フ。松島円福、十七世ノ僧大林ノ

創建ニテ。後久シケ廢セリ。享保辛亥ノ年。僧仙林ト云フ者再建

ス。松島瑞巖寺ニ隸ス。寺南ニ阪路アリ。赤坂ト曰フ。大代巷ニ

出ル路ナリ。大代ハ此ヲ距ルコト里許。後ニ見エタリ。

仁和多利權現祠

西園寺ノ東北ニ在リ。

神明祠

西園寺ノ西南ニ在リ。地ヲ向陽ト曰フ。

船塚

地ヲ眉見塚ト曰フ。周回七十余步。

箱塚

地ヲ前畠ト曰フ。周九十余步。

箱塚川

箱塚ノ東南ニ在リ。上流八幡川ト為ス。東南菊岡ヲ経テ大代川ニ入

ル。

菊岡橋

八幡村ニ属シ、箱塚ノ東南ニアリ。

西沼

地ヲ助ヶ森ト曰フ。沼周回百六十歩。

註1 一 貫 仙台藩では、土地生産高と同時に年貢高を表示する方

式として、貫文制をとつており、錢の単位で表示した。

寛永二年（六四四）、一貫文を一〇石と定めた。

註2 紙園社 須賀神社のことか。

註3 牛 生 昭和二十四年一二月に塩竈町に編入された。

註4 觀音堂 船塚觀音のこと。海軍工廠建設に伴い、西園寺に移設された。

## 参考文献

- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第2巻 近世・近現代』一九九三
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』一九九七
- 伊勢崎市 『伊勢崎の近世石造物』一九八五
- 板橋徳太郎 『懐郷史抄 古里の答神を訪ねて』一九九七
- 大塚徳郎・竹内利美ほか『宮城県の地名』一九八七
- 加藤政久『石仏偶頌辞典』一九九〇
- 唐桑地域石碑研究会『気仙沼市唐桑地区石碑調査報告書 唐桑の石碑』二〇一二
- 川勝政太郎 『偶頌 川勝政太郎講述』一九八四
- 菊池武一・司東真雄『宮城縣史17 金石志』宮城縣 一九五六
- 経済企画庁総合開発局『土地分類図』一九七一
- 庚申懶話会『日本石仏事典』一九七五
- 庚申懶話会『石仏調査ハンドブック』一九八一
- 国立歴史民俗博物館『社寺の国宝・重文建造物等棟札銘文集成 東北編』
- 近藤 豊『古建築の細部意匠』大河出版 一九七一
- 財団法人文化財建造物保存技術協会『民家の棟札集成 四国地方の民家を中心として』一九八九
- 佐々木慶市『水沢市史2 中世』一九七六
- 鈴木正夫『宮城県北部の庚申信仰』一九八八
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編5 板碑』一九九八
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第5巻 歴史史料(一)』一九八五
- 松島町史編纂委員会『松島町史』通史編I・II 一九九一
- 松島町史編纂委員会『松島町史』資料編II 一九八九
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第3巻 民俗・文学』一九八六
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第2巻 近世・近現代』一九九三
- 高橋富雄ほか『宮城県地名大辞典』一九七九
- 高橋正巳『鹽竈神社旧社家の歴史』鹽竈神社旧社家献膳講 一九八一
- 千々和到『第二部 海を渡った日本の「おふだ」』『日本の護符文化』二〇一二
- 地質調査所『地域地質研究報告 塩竈地域の地質』一九八三
- 東北大學東北アジア研究センター『東日本大震災に伴う被災した民俗文化調査2011年度報告集』二〇一二
- 東北大學東北アジア研究センター『東日本大震災に伴う被災した民俗文化調査2012年度報告集』二〇一三
- 東北大學東北アジア研究センター『東日本大震災に伴う被災した民俗文化調査2013年度報告集 別冊』二〇一三
- 東北歴史資料館『宮城の古絵図』一九九四
- 林淳『明治五年修驗宗廢止令をめぐる一考察 天台・真言への帰入問題』『禪研究所紀要』三〇(二〇〇二)
- 平田篤胤全集刊行会『神宇日文傳』『新修平田篤胤全集 第十五卷』名著出版一九七八
- 水沢市立図書館『解説中世留守家文書』一九七九

三塚源五郎『多賀城村聚落の機構 地名の研究』一九三三

三塚源五郎『多賀城六百年史』一九三七

光森正士・岡田建『仏像彫刻の鑑賞基礎知識』至文堂一九九三

宮城都教育会『宮城都誌 全』〔第二篇 地理〕一九二八

宮城県神社庁『宮城縣神社名鑑』一九七六

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報』一九八〇

一九八一

古川左京『鹽竈神社史』一九三〇

本郷馨一光『塩竈多賀城七ヶ浜神社誌』一九七三

吉田東伍『大日本地名辞書 奥羽』一九〇一

脇町・脇町教育委員会『わきまち—伝統的建造物群保存対策調査報告書

一』一九八七 渡邊菊治『宮城県の庚申塔』一九八三

## 石造物一覧表

図版 番号	地区名	名称	年代	石材	法面 (cm)		備考	登録 番号
					高さ 巾	厚さ		
板 神								
1	笠神	花立八	板碑				安山岩?	(585) 25.5
2	笠神	西園寺	板碑				アルコース砂岩	18.5 笠神二丁目3
							細粒	202
							97	17 葬禮に転用
							56	221
<b>供養塔</b>								
3	笠神	仁和多利神社	湯殿山	文化14	1817	アルコース砂岩	(110)	80
4	笠神	仁和多利神社	山神	文政1	1818	アルコース砂岩	(116)	105
5	笠神	仁和多利神社	蛇神	明治3	1880	ディササギ	(50)	26
6	笠神	仁和多利神社	日吉神社	明治18	1885	ディササギ	(81)	43.5
7	笠神	西園寺	山神	寛政8	1796	ディササギ	(113)	92
8	笠神	西園寺	馬頭観世音	文化11	1814	アルコース砂岩	(170)	45
9	笠神	西園寺	念佛龕	文政12	1829	織状砂質泥岩(船井石)	92	46.5
10	笠神	西園寺	地藏菩薩坐像	天保2	1831	ディササギ	87	22.5
11	笠神	西園寺	馬頭観世音	安政2	1855	ディササギ	(107)	80
12	笠神	西園寺	名少	慶応2	1866	ディササギ	178	49
13	笠神	西園寺	日吉神社	明治12	1879	ディササギ	96	51
14	笠神	西園寺	六地藏	明治19	1886	ディササギ	(107)	74
15	笠神	西園寺	山神	明治23	1890	ディササギ	60	32.5
16	笠神	西園寺	大日如來	明治26	1893	ディササギ	(83)	51
17	笠神	西園寺	題目	明治28	1895	ディササギ	(80)	33.5
18	笠神	上ノ台	板碑	寛政11	1799	ディササギ	(150)	13
19	笠神	上ノ台	湯殿山・月山・羽黒山	文化11	1814	アルコース砂岩	(188)	56
20	笠神	上ノ台	湯殿山・月山・羽黒山	明治18	1885	ディササギ	(130)	106
21	笠神	芦畔	地神大神	明治31	1898	織状砂質泥岩(船井石)	(76)	43
22	笠神	花立B	湯殿山大神	大正3	1914	織状砂質泥岩(船井石)	(162)	52
23	笠神	花立B	日吉神社	大正6	1917	織状砂質泥岩(船井石)	(82)	34
24	笠神	花立B	水神	大正14	1925	安山岩	22.5	12.5
25	笠神	船塚	名号	享保12	1727	安山岩	136	9
							64	248
							15	288

石井龍・鳥居132						
25	笠神	仁和多利神社	石燈籠	明治15	1882	デイサイト
27	笠神	仁和多利神社	石燈籠	明治15	1882	デイサイト
28	笠神	仁和多利神社	石鳥居	大正8	1919	織状砂質泥岩(鶴井石)
29	笠神	仁和多利神社參道	楓立	明治44	1911	織状砂質泥岩(鶴井石)
30	笠神	稻荷神社	楓立(裏側)	昭和2	1927	織状砂質泥岩(鶴井石)
31	笠神	稻荷神社	手水鉢	大正14	1925	デイサイト
32	笠神	稻荷神社	扁額			(36)
33	笠神	仁和多利神社	念忠碑	大正6	1917	織状砂質泥岩(鶴井石)
34	笠神	仁和多利神社	昭和神樂碑	大正9	1920	織状砂質泥岩(鶴井石)
35	笠神	仁和多利神社	昭和55	1980	斑葉苔	細粒
笠神	仁和多利神社	手水鉢			72.7	58.5
36	笠神	西園寺	楓標			161.7
37	笠神	西園寺	楓標	延宝5	1657	アルコース砂岩
38	笠神	西園寺	楓標	元禄10	1697	アルコース砂岩
39	笠神	西園寺	楓標	享保20	1735	アルコース砂岩
40	笠神	西園寺	楓標	享保16	1731	成層アルコース砂岩?
41	笠神	西園寺	楓標	元文1	1736	デイサイト
42	笠神	西園寺	楓標	延享5	1748	デイサイト
43	笠神	西園寺	楓標	安永3	1774	デイサイト
44	笠神	西園寺	楓標	天明4	1784	アルコース砂岩
45	笠神	西園寺	楓標	文化6	1809	デイサイト
46	笠神	西園寺	楓標	文久3	1863	アルコース砂岩
47	笠神	西園寺	楓標	明治15	1882	デイサイト
48	笠神	西園寺	楓標	明治14	1881	デイサイト
49	笠神	西園寺	楓標	明治26	1893	デイサイト
50	笠神	西園寺	地藏像	享保6	1721	デイサイト
51	笠神	西園寺	地藏像	正徳4	1714	アルコース砂岩
52	笠神	西園寺	地藏像	寛治2	1712	デイサイト
53	笠神	西園寺	地藏像			55
					34	15.5
					213	

笠神	西園寺	觀音像	享保6	1721						275
笠神	西園寺	觀音像								276
笠神	丸山	墓標								277
54	笠神	丸山								277
55	笠神	丸山	墓標		天保11	1840		(81)	54.5	33
56	笠神	丸山	墓標				48	32	19	自衛隊駐屯地内
57	笠神	丸山	墓標		文久3	1863		(44)	35.5	12
58	笠神	丸山	墓標				(55)	28.5	11	自衛隊駐屯地内
59	笠神	丸山	墓標		天明4	1784		(46)	34	20.5
	笠神	丸山	墓標					(48)	33	自衛隊駐屯地内
	笠神	花立B	平水跡							237
<b>供養塔</b>										
60	下馬	折越	別喰山	明治6	1873	「イサイ」	(84)	39	23	244
61	下馬	向山	題目				65	29	12	252
62	下馬	赤坂	名号	宝永7	1710		(73)	53	18	257
63	下馬	赤坂	名号	安政5	1858		(87)	66	40	266
64	下馬	赤坂	馬頭觀世音	昭和4	1929			63	44	22
65	下馬	新海ノ宮	道標	大正14	1925	鐵狀砂質混岩(鶴井石)	(85)	20	5	268
<b>道標</b>										
66	下馬	赤坂	墓標	元禄8	1695		(49)	51	24	255
67	下馬	赤坂	墓標	元禄11	1698		(87)	85	15	256
68	下馬	赤坂	墓標	正德4	1714		68	45	28	258
69	下馬	赤坂	墓標	正德			(29)	43	11	259
70	下馬	赤坂	墓標	元文3	1738		(52)	39	27	260
71	下馬	赤坂	墓標	寛延3	1750		72	44	35.5	261
72	下馬	赤坂	墓標	宝曆2	1752		(70)	54	21	262
73	下馬	赤坂	墓標	宝曆5	1755		(74)	68	28	263
74	下馬	赤坂	墓標	明和4	1767		(83)	62	26	264
75	下馬	赤坂	墓標	明和6	1769		(67)	26	17	265
76	下馬	赤坂	墓標	明治34	1901		(62)	33	24	267
77	下馬	赤坂	苦痛像	昭和			14以上	36.5	18	269
	下馬	赤坂	苦痛像				(29)	30	12	270
	下馬	折越	羅室珠				(38)	13	9	271
										245

多賀城市文化財調査報告書第一三〇集

## 多賀城市の歴史遺産

### 笠神村 下馬村

平成二八年三月発行

編  
集

多賀城市教育委員会

〒九八五一八五三一

宮城県多賀城市中央二丁目一番一号

發  
行

多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会

印  
刷

今野印刷株式会社

〒九八四一〇〇一一

宮城県仙台市若林区六丁の目西町二一〇

本報告書は、平成27年度「文化庁  
文化事業」で作成したものです。